

長岡京跡・淀城跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀城跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和51年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、淀駅高架工事に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

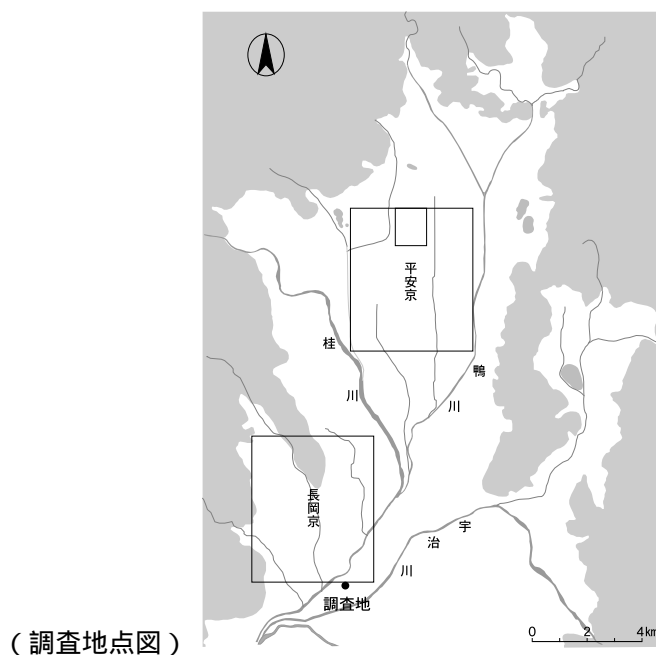
平成22年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・淀城跡
長岡京左京第536次調査
- 2 調査所在地 京都市伏見区淀池上町地内
- 3 委 託 者 京都市代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2010年2月15日～2010年8月31日
- 5 調査面積 980m²
- 6 調査担当者 尾藤徳行・内田好昭・長戸満男・南出俊彦・津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「神足」「納所」「円明寺」「淀」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 尾藤徳行・長戸満男・南出俊彦
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



目 次

1 . 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	2
(3) これまでの調査	3
(4) 調査の目的	5
2 . 遺 構	6
(1) 基本層序と遺構の概要	6
(2) A 1 区の遺構	9
(3) A 2 区の遺構	10
(4) B 1 区の遺構	13
(5) B 2 区の遺構	17
(6) B 3 区の遺構	23
(7) B 4 区の遺構	24
(8) B 5 区の遺構	29
(9) C 1 区の遺構	30
(10) C 2 区の遺構	36
(11) C s 2 区の遺構	45
(12) C 3 区の遺構	45
3 . 遺 物	47
(1) 遺物の概要	47
(2) 土器類	47
(3) 瓦類	56
(4) その他の遺物	61
4 . ま と め	68

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	A 1 区全景 (北東から)
		2	A 2 区第 1 面全景 (南西から)
		3	A 2 区第 2 面全景 (南西から)
		4	B 1 区全景 (北東から)

- 図版 2 遺構 1 B 2 区第 1 面全景 (北東から)
 2 B 2 区第 2 面全景 (北東から)
 3 B 3 区全景 (南西から)
 4 B 4 区第 1 面全景 (北東から)
- 図版 3 遺構 1 B 4 区第 2 面全景 (北東から)
 2 B 5 区全景 (南西から)
 3 C 1 区第 1 面全景 (北東から)
 4 C 1 区第 2 面全景 (北東から)
- 図版 4 遺構 1 C 1 区第 3 面全景 (北東から)
 2 C 2 区第 1 面全景 (北東から)
 3 C 2 区第 2 面全景 (北東から)
 4 C 2 区第 3 面全景 (北東から)
- 図版 5 遺構 1 C 2 区第 4 面全景 (北東から)
 2 C 2 区第 6 面全景 (北東から)
 3 C_s2 区第 1 面全景 (北東から)
 4 C_s2 区第 2 面全景 (北東から)
 5 C 3 区全景 (南西から)
- 図版 6 遺構 1 B 2 区集石 7・15 断割り断面 (南から)
 2 B 3 区石垣 1 (北東から)
 3 B 5 区石垣 2 (北東から)
- 図版 7 遺構 1 C 1 区石垣 13 (北東から)
 2 C 1 区第 4 面路面 14 (南西から)
 3 C 2 区第 3 面礎石・礎石拔取り跡 (南東から)
- 図版 8 遺構 1 C 2 区第 4 面路面・溝 (南西から)
 2 C 2 区第 5 面縁石・溝・路面 (北東から)
 3 C 2 区第 6 面空地・溝・路面 (北東から)
- 図版 9 遺物 B 1 ~ B 4 区出土土器
- 図版 10 遺物 C 1・C 2 区出土土器
- 図版 11 遺物 軒瓦・鬼瓦
- 図版 12 遺物 銭貨
- 図版 13 遺物 1 金属製品
 2 木製品
- 図版 14 遺物 土製品・角・石製品・石造物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	B 2 ~ B 5 区調査前風景 (南西から)	2
図 3	調査風景 (南から)	2
図 4	淀城下町復元図と周辺調査位置図 (1 : 5,000)	4
図 5	全区柱状断面模式図 (深さは 1 : 20)	7
図 6	A 1 区断面図 (1 : 100)	8
図 7	A 1 区平面図 (1 : 200)	9
図 8	A 2 区断面図 (1 : 100)	11
図 9	A 2 区平面図 (1 : 200)	12
図10	A 2 区礎石 26 ~ 29 実測図 (1 : 50)	13
図11	B 1 区断面図 (1 : 100)	14
図12	B 1 区平面図 (1 : 200)	15
図13	B 1 区礎石 1 実測図 (1 : 50)	16
図14	B 1 区集石 5 実測図 (1 : 50)	16
図15	B 2 区断面図 (1 : 100)	18
図16	B 2 区平面図 (1 : 200)	19
図17	B 2 区土坑 2 ・ 9 ・ 12 実測図 (1 : 50)	20
図18	B 2 区集石 6 ・ 14 実測図 (1 : 50)	20
図19	B 2 区集石 7 ・ 13 ・ 15 実測図 (1 : 50)	21
図20	B 3 区断面図 (1 : 100)	22
図21	B 3 区平面図 (1 : 200)	23
図22	B 3 区石垣 1 実測図 (1 : 100)	24
図23	B 4 区断面図 (1 : 100)	25
図24	B 4 区平面図 (1 : 200)	26
図25	B 4 区土坑 4 ・ 12 , 集石 15 実測図 (1 : 50)	27
図26	B 4 区石垣 2 実測図 (1 : 100)	27
図27	B 5 区断面図 (1 : 100)	28
図28	B 5 区平面図 (1 : 200)	29
図29	B 5 区石垣 2 実測図 (1 : 100)	30
図30	C 1 区断面図 (1 : 100)	31
図31	C 1 区平面図 (1 : 200)	32
図32	C 1 区石垣 13 実測図 (1 : 100)	33

図33	C 1 区地業 2 断ち割り断面図 (1 : 50)	34
図34	C 1 区溝11実測図 (1 : 50)	34
図35	C 1 区サブトレンチ断面図 (1 : 50)	35
図36	C 1 区路面断ち割り実測図 (1 : 50)	35
図37	C 2 区断面図 (1 : 100)	37
図38	C 2 区平面図 (1 : 200)	38
図39	C 2 区石列 5、柱穴 6 ~ 26・28実測図 (1 : 50)	40
図40	C 2 区柱穴54~56実測図 (1 : 50)	41
図41	C 2 区柱穴30・32・61実測図 (1 : 50)	42
図42	C 2 区空閑地68実測図 (1 : 50)	43
図43	Cs2 区実測図 (1 : 200、 1 : 50)	44
図44	C 3 区断面図 (1 : 100)	46
図45	C 3 区平面図 (1 : 200)	46
図46	A 2 区出土土器実測図 (1 : 4)	48
図47	B 1・B 2 区出土土器実測図 (1 : 4)	49
図48	B 3・B 4 区出土土器実測図 (1 : 4)	51
図49	C 1 区出土土器実測図 (1 : 4)	53
図50	C 2 区出土土器実測図 (1 : 4)	54
図51	Cs2 区出土土器実測図 (1 : 4)	56
図52	軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	57
図53	軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	58
図54	丸瓦・刻印瓦拓影・実測図 (1 : 4)	59
図55	鬼瓦実測図 (1 : 6)	60
図56	金属製品・骨実測図 (1 : 3)	61
図57	参考資料 ネコザメ背鱗棘 (側面)	62
図58	銭貨拓影 (1 : 1)	63
図59	木製品・土製品・石製品実測図 (200は 1 : 8、209・210・213は 1 : 2、他は 1 : 4)	65
図60	石製品実測図 (1 : 8、 1 : 10)	66
図61	石垣石刻印拓影 (1 : 4)	67
図62	C 区桃山時代から江戸時代初頭復元図 (1 : 500)	69
図63	C 区江戸時代復元図 (1 : 500)	70

表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	6
表 3	遺物概要表	47
表 4	銭貨一覧表	64

長岡京跡・淀城跡

1. 調査経過

(1) 調査の経緯

この調査は、京都市建設局事業推進室による京阪電鉄淀駅高架工事に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査である。調査地は、長岡京の新条坊復元案では京外となるが旧条坊復元案では左京九条三坊十三町にあたり、また淀城跡に該当することから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施することとなった。

調査地は、1999年度の1次調査から続くもので、2006年度の大阪行き路線の高架橋工事に伴う6次発掘調査の北西に隣接する。今回は、京都行き路線の高架橋工事に伴う7次調査である。淀駅前の踏切南端から線路沿いに京都側に約110m、大阪側に約290mの全長約400mの間に、11基の橋脚基礎工事が行われる予定地について、事前にそれぞれの工事区の調査を実施した。調査区の名称は高架工事の工区名と同一とし、大阪側からA1・A2区、B1～B5区、C1～C3区と呼称した。各調査区の面積は、A1区約104㎡、A2区約103㎡、B1区約130㎡、B2区約

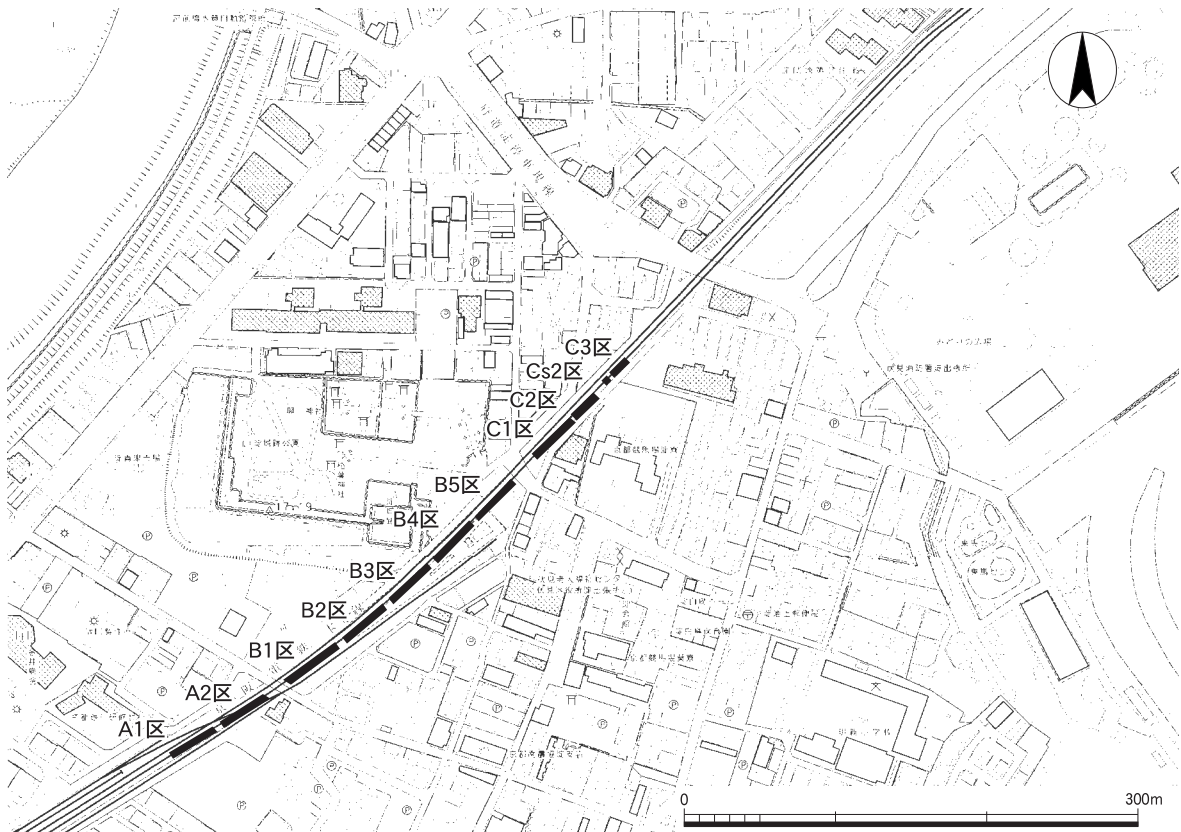


図1 調査位置図(1:5,000)

105m²、B 3 区約95m²、B 4 区約102m²、B 5 区約111m²、C 1 区約106m²、C 2・Cs 2 区約81m²、C 3 区約43m²の計約980m²である。

調査に先立ち、鋼矢板やH型鋼材などによる土留め工事の準備を行った。さらに、線路に近接しているため、調査中に、地表面から1mまでの掘削深度で、「切張り・腹起こし」を設置することとなった。現場事務所設置などの付帯工事の後、各工区を順次調査することとした。

調査は、2010年2月15日から付帯工事を開始し、3月9日からC 1 区より調査を行った。まず、淀城期の上層から調査を開始した。下層の遺構が認められない部分は、工事掘削深まで断割りを行って、土層の記録を採った。

6次調査と同様に、淀城の石垣の石材が出土した場合は、材質や刻印の有無などを点検し、残存状態の良好なものは番号を付けて取り上げ、京阪電気鉄道株式会社が保管することとなった。

調査の過程で、京都市文化財保護課の指導を受けながら、各区の調査を進めた。また、随時検証委員会の評価を受けた。工程の都合で、一時中断を挟み、8月31日にはすべての現地作業を終了した。

(2) 位置と環境

現在の淀周辺の地理的な特徴は、土地分類基本調査¹⁾によると、京都盆地の桂川をはさむ自然堤防分布地帯から南部の桂川、宇治川、木津川の集まる低湿な地域および三角洲的性格の氾濫平野で、礫・砂・粘土の層が発達している。また、平野地の海拔高が10m程度で、縄文海進時には海にならず池沼であったところである。淀付近には幅の広い木津川の旧河道があり、木津川が作った自然堤防地帯が大部分を占め、その中に旧河道が数本みとめられる。木津川大橋付近から桂川の淀付近までつながる旧河道が最も顕著なもので、自然堤防は島状に分布し、その上に集落が立地するとある。

ところで、現在の淀の地形環境は、江戸時代、明治時代以降の河川改修によって形成されたものである。現在の桂川・宇治川・木津川の三川合流地点は、淀のはるか南西に位置しているが、古代・中世においては、淀の地が三川合流点にあたり、交通の要所であった。長岡京期には、京の南端に位置し、平安時代の『日本後紀』に、延暦23年(804)7月24日、桓武天皇が与等(淀)



図2 B 2 ~ B 5 区調査前風景(南西から)



図3 調査風景(南から)

津に行幸するとあり、以後、平安京の外港として登場する。中世の『東寺百合文書』『北野社家日記』などに、淀魚市で魚介類、塩、米穀、木材などが取引されたとあり、淀津は重要な拠点であった。中世からあった淀城（江戸時代の淀城と区別するため「古淀城」とする。）は、現淀城の北方の納所町（当時の宇治川の対岸）に位置していたようで、豊臣秀吉が天正16年（1588）から修築した。同時に桂川左岸堤を京都への鳥羽街道とし、淀を経て図4の淀小橋と淀大橋を渡って大坂へと続く淀川左岸堤を大坂街道として整備し、交通・水運の要所として重要な地位を占めていた。しかし、文禄3年（1594）、古淀城は伏見城築城とともに廃城となり、港の機能も失った。²⁾

江戸時代になり、淀は三十石船の運行などで交通の要衝として復活した。徳川幕府は、古淀城の宇治川対岸の淀中島（現在の池上町・下津町）に淀城を築城することとなった。そのため、過書船（三十石船）奉行を勤めた河村与三右衛門屋敷があった地区などを撤去して現在の淀城が築城されることになった。元和9年（1623）に伏見城が廃城となり、二代将軍徳川秀忠の命を受けた譜代大名、松平定綱が築城したもので、徳川幕府は淀を重視し、歴代藩主は譜代大名が務めた。寛永10年（1633）10万石の永井尚政が城主となり、手狭な城下町の拡張と水害防止のため、寛永14年（1637）より木津川の付け替え工事を行った。木津川と淀川の合流点を下流側に移し、元の木津川河川敷を埋め立てて、外堀と外高嶋の武家屋敷などを造成した。以後、寛文9年（1669）には石川憲之、正徳元年（1711）に戸田光熙、享保2年（1717）に松平乗邑が城主となった。享保8年（1723）に稲葉正知が城主となり、幕末までの約130年間、稲葉家が城主を務めた。宝暦6年（1756）には落雷により天守が焼失し、以降は再建されなかった。幕末の慶応4年（1868）には鳥羽伏見の戦いで城下は焼失し、明治4年（1872）廃藩となった。明治時代前半、淀城の石垣は払い下げられ、工事用石材として大量に崩されたとある。なお、図4の城下町復元図は、寛永14年（1637）の木津川付け替え・淀城拡張工事以降の図である。

調査地は、室町時代には、京都から大坂への街道筋に位置していた。大坂街道は、図4の淀小橋から南下してC3区・C2区・C1区を通り抜けて淀大橋を渡り、大坂に通じていた。また、江戸時代には、淀城本丸東側から南側の地域に位置し、『淀の歴史と文化』や『京の城 - 洛中洛外の城郭』³⁾の淀城復元図を参考にすると、A1・A2区は1637年以降の淀城拡張後に造成された部分で、調査地のA1区は内高嶋に南面する外堀北肩に推定され、A2区は本丸南方の内高嶋の武家屋敷に該当する。B1区は中堀の南・北肩と本丸南側の曲輪、B2区は本丸南側の曲輪、B3区は本丸南側の曲輪と内堀北肩、B4区は本丸東側の曲輪と東曲輪との間の中堀西肩、B5区は中堀東肩と東曲輪、C1区からCs2区は東曲輪、C3区は東曲輪と堀に推定された。東曲輪や南の曲輪・内高嶋部分には、淀藩の蔵や高位な家臣の屋敷が所在し、東曲輪東側の街道沿いは町人の町屋地域、その東側と南側は下級武士の居住地域とある。

（3）これまでの調査

淀城跡で行われた主な調査には、図4の調査1～7、今回の淀駅高架工事に伴う1～6次にわたる調査がある。概要を表1にまとめた。

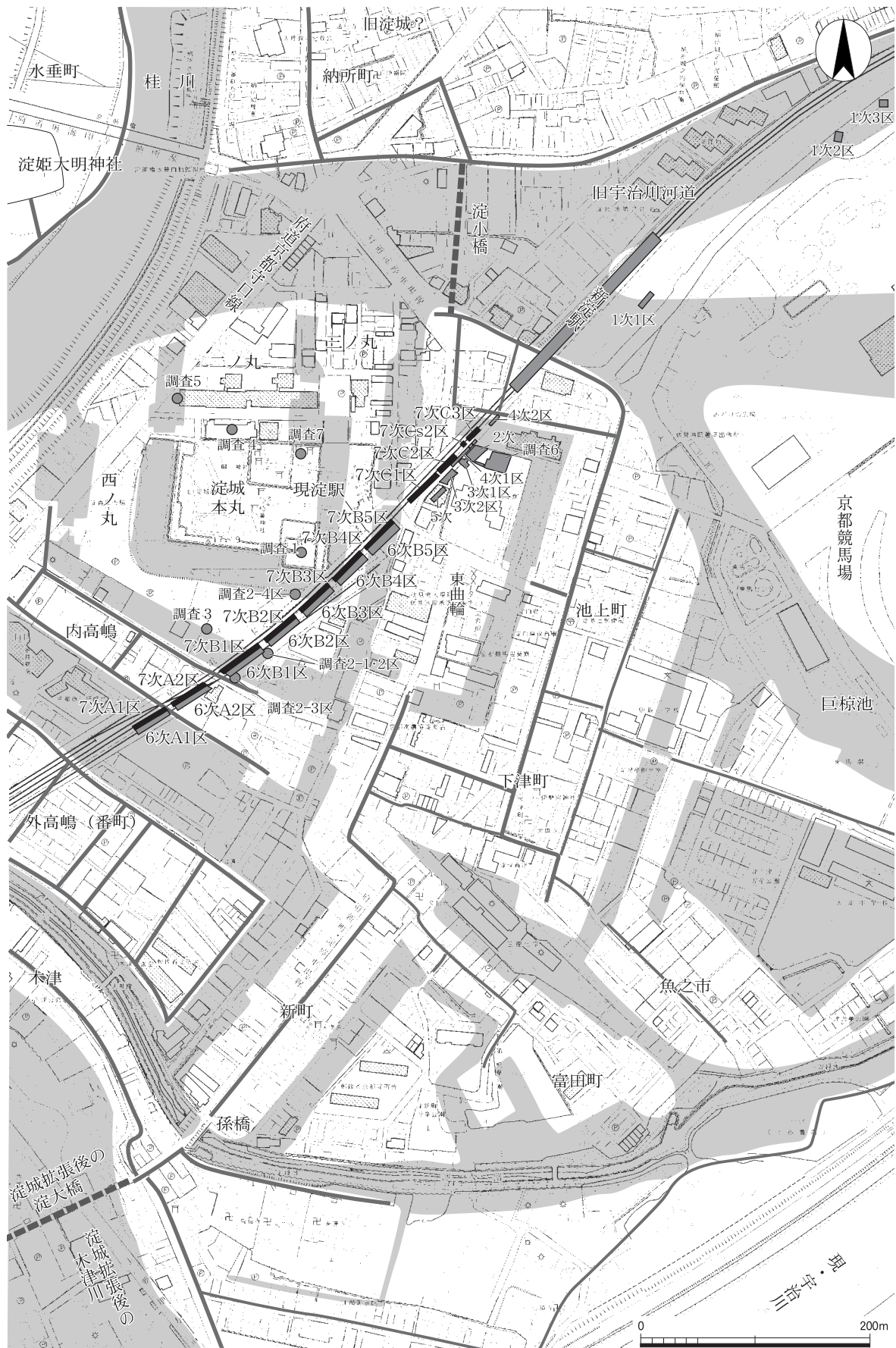


図4 淀城下町復元図と周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表 1 周辺の調査一覧表

調査No.	調査方法	調査年度	調査概要	文献
調査 1		1987年	本丸天守台部分を全面調査。天守台の地下に石積の地下室があったことが明らかとなった。	註 4
調査 2	試掘調査	2003年	2区では、地表下0.4～1.4mで南曲輪の建物や塀に伴う石垣を検出。一辺40～70cmの石を上下2段、東西方向に4列で南面して検出。3区では、地表下2.8m以下で北面する石垣（内高嶋北側の中堀南肩）を検出。一辺40～80cmの石が2段以上4列以上並ぶ。軸線は西で27度北へ振る。4区では、地表下1.2mで一辺10～40cmの石材を検出。天守台南の内堀に北面する石垣の裏込め部分である。	註 5
調査 3	試掘調査	1990年	地表下0.2～2.9mで3層の堀埋土を検出。地表下2.2m（標高10m）で内高嶋北側の中堀北肩の石垣を検出。	註 6
調査 4	試掘調査	1996年	地表下0.4～1.8mで一辺が40～60cmの花崗岩が東西方向に並び南面する石垣と、南北方向に並び西面する石垣がL字接続し、本丸と二ノ丸の境界の役割を果たしていたと推定する3～4段の石垣を検出。	註 7
調査 5	試掘調査	1976年	地表下2.5～3.0m以下で二ノ丸西側の内堀東側の石垣を検出。一辺60cm以上の石が2段2列以上積んである事を確認。	註 8
調査 6	発掘調査	2003年	東曲輪の北端に位置する。標高約12mで淀城期の米蔵跡を検出。	註 9
調査 7	試掘調査	2006年	本丸北東隅で隅櫓に上る石組の階段を検出。	註10
1次調査	試掘調査	1999年	新淀駅の北端に位置し、湿地状堆積を検出。	註11
2次調査	発掘調査	2003年	東曲輪に位置する。調査6に続く大規模な米蔵の西端を検出。	註12
3次調査	発掘調査	2004年	東曲輪に位置する。調査6の米蔵の南西角や4次調査に続く屋敷地の南北境界を示す石列などを検出。	註13
4次調査	発掘調査	2006年	東曲輪に位置する。3次調査で検出した南北境界石列の延長部分や井戸などを検出。	註14
5次調査	発掘調査	2006年	東曲輪に位置する。淀城復元図では三鉄門東側の空閑地にあたる。地表下1.8～3.0m（標高10.4～9.2m）で淀城期以前の約10面の路面層を検出。路面層の上層では、幅約8mの南北道路とその縁石部分を検出し、江戸時代初頭頃の遺物が出土。下層の路面からは、平安時代から中世の遺物が少量出土。	註15
6次調査	発掘調査	2006年	A1～B5区の調査区を設定。A1区では、内高嶋の外堀北肩部分を検出。A2区では、第1面で内高嶋の18世紀後半以降の土坑・柱穴、第2面で17世紀中頃以降の柱列、建物基礎の石垣を検出。B1区では、本丸南の曲輪の中堀北肩部分を2列検出。B2区では、南の曲輪の建物の布基礎部分、基礎の根石、建物基礎の石垣を検出。B3区では、内堀南肩部分の石垣を検出。B4区では、内堀東肩部分の石垣と、17世紀中頃の三鉄門南の整地層・柱列・瓦敷きの雨落ち・集石遺構を検出。B5区では、三鉄門と東曲輪の中堀西肩部分の石垣を検出。工事に伴い石垣の石材112個を取り上げ、16石17個の刻印を確認。	註16

(4) 調査の目的

当地は、周知の遺跡の長岡京跡・淀城跡にあたる。これまでの調査から、江戸時代の遺構として、A1～C3区において江戸時代の淀城の遺構を調査すること、また、C1～C3区において3～5次調査によって明らかとなっている淀城期以前の中世の遺構を調査すること、さらに、長岡京跡の遺構を下層で確認することを目的とした。なお、今回の調査地は、工事前に施工された土留め工事の制約から工事掘削深度の約2.2mまでが調査可能深度となった。

2. 遺 構

(1) 基本層序と遺構の概要

いずれの調査区でも、現代盛土直下に淀城期の遺構面がある。淀城期の遺構面は、厚い淀城構築土層の上面である。淀城構築土層は、明黄褐色～黄褐色の細砂～粗砂層で、木津川などの川原に豊富に存在した流水性の堆積物を二次的に積み上げた客土である。調査地中央から南西寄りのA1区からB5区では、工事掘削深の範囲内では淀城構築土層の下端を確認できず、層厚は2.0m以上に及ぶ。C1・C2区では、淀城構築土の層圧は0.6～0.8mに留まり、工事掘削深の範囲内で淀城築城以前の遺構面が3面以上確認できた。これらの遺構面を成立させている地層は灰色～オリーブ黒色のシルト層で、こちらは極めて近くに堆積していた止水性の堆積物を二次的に積み上げた客土である。淀城築城以前の整地層は流水性の薄い砂層を挟んでおり、この時期にたびたび洪水の被害にみまわれた事が窺える。

以上により、A1区からB5区付近では、淀城築城以前は湿地状もしくは緩やかな流れの河道にあたり、居住地ではなかったことが推定できる。淀城築城以前の淀中島地域の居住域は、C1・C2区より東側の淀城期は東曲輪とされた地域および現池上町から下津町付近と見られる。この地域は、前述した島状に分布する自然堤防上にあたるものとする。

今回の調査では遺構総数172基のうち、A2区では淀城期の遺構を30基、C2区では淀城期以前の遺構を68基検出した。その他の地区で石垣・堀・堀肩部・礎石・柱列・土坑・集石・路面・溝・井戸などを検出した。

今回検出した遺構は、2006年度6次調査の北西隣に位置することから、大半が6次調査で検出した遺構に続くものである。A1区では、内高嶋南端で外堀北肩を検出し、外堀の埋土から遺物

表2 遺構概要表

時 期	遺 構
桃山時代～ 江戸時代初頭	C1区 地業2、土坑3～10・12・17、溝11・18、路面14～16、石列19～25 C2区 路面31・69・34・63、溝27・70・35・36・64・66、石列5、柱穴6～26・28・30・32・61、礎石54～56、縁石42、小径67、空閑地68、落込み62
江戸時代前半	A1区 土手1、堀2 A2区 礎石26～29、柱穴23・24、土坑25、掘込31 B1区 礎石2、集石5、土坑6・7 B2区 集石5・8・14～16・18、土坑9～12・17・19～21 B3区 石垣1、堀2 B4区 石垣2、堀3、土坑9、土坑12・13、集石14・15 B5区 柱穴1、石垣2、堀3 C1区 石垣13、堀1、路面 C2区 石垣4、路面、土坑3
江戸時代後半	A2区 礎石2・7・17・20～22、集石13・18、溝8、土坑1・3～6・9・11・14・15・19 B1区 堀4、杭列8、礎石1、土坑3 B2区 土坑1・2、集石3・4・6・7・13 B4区 石垣2、堀3、土坑1・4・5、石列6 C2区 集石1、土坑2、路面 C3区 堀1

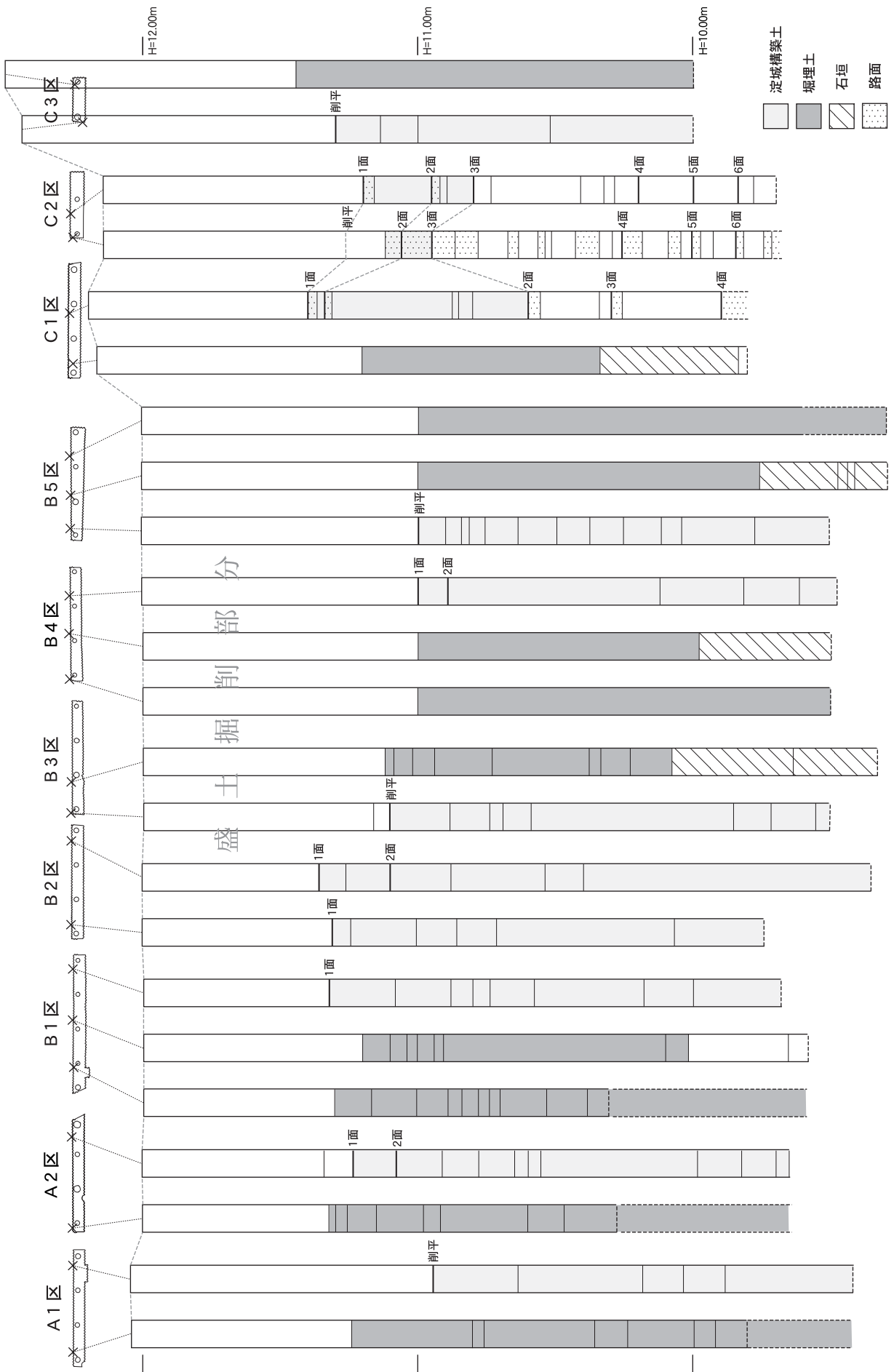


図5 全区柱状断面模式図（深さは1：20）

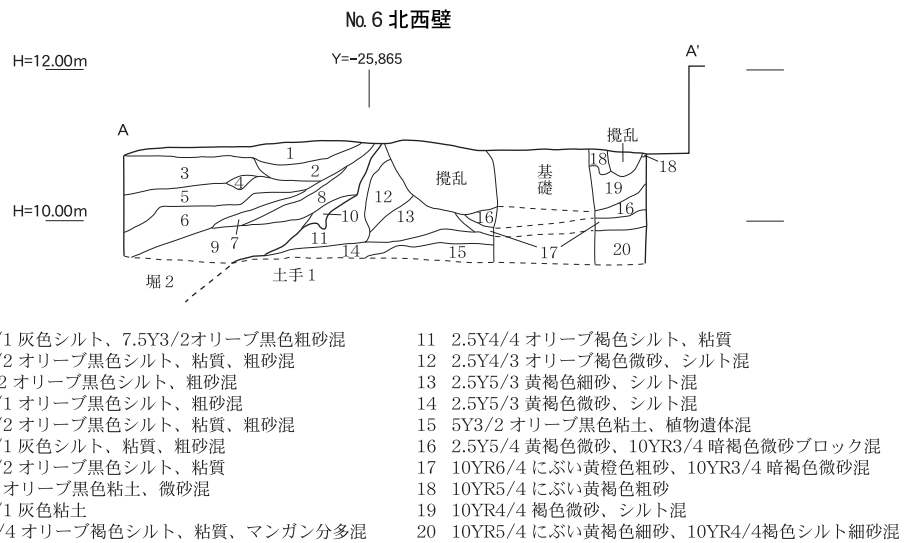
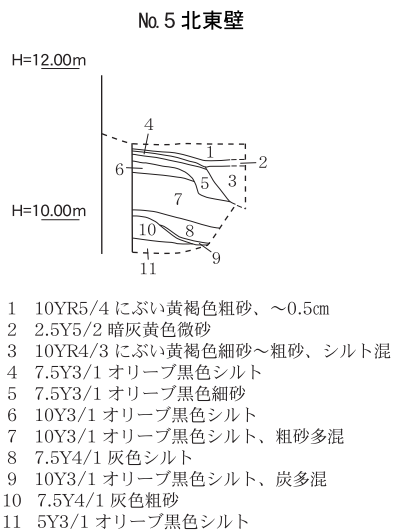
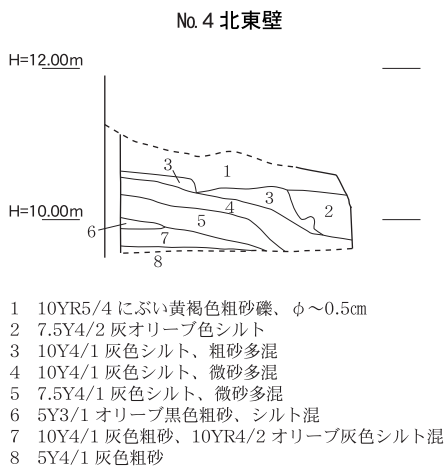
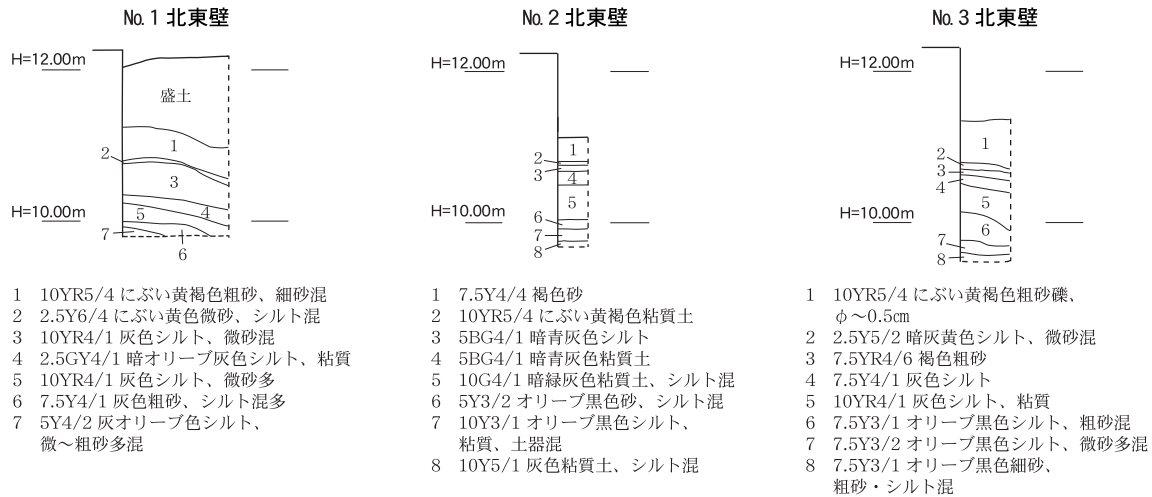


図6 A1区断面図(1:100)

を採取した。A 2 区では、本丸南方の内高嶋に推定され、江戸時代前期や後期の建物関連遺構である礎石、集石、柱穴や土坑を検出した。B 1 区では、中堀北肩部や礎石、集石、土坑、堤状盛土の法面などを検出した。B 2 区では、本丸南側の曲輪にあたり、建物の布基礎と考えられる集石遺構や土坑などを検出した。B 3 区では、本丸を取り囲む内堀に北面する石垣を検出した。B 4 区では本丸東側の曲輪に位置し、内堀に西面する石垣や集石遺構・土坑などを検出した。B 5 区では、中堀に東面する石垣を検出した。C 1 区では、淀城期の石垣13、溝 1、淀城以前の地業 2、路面、石列などを検出した。C 2 区では、淀城期の集石や石垣、淀城期以前の井戸、路面、側溝、礎石、石列、落込みなどを検出した。C 3 区では、堀を確認し、調査区南西端で東曲輪の陸地部分を確認した。

以下、各調査区を説明する。

(2) A 1 区の遺構 (図 6・7、図版 1)

調査区は、淀城期の本丸南方に位置する曲輪「内高嶋」の南端の外堀肩部にあたり、6 次調査では外堀と陸地部分の土手を確認した。狭い場所で腹起こしの工事手順のため全面掘削ができず、5 m ごとに工事にあわせて調査した。北東端の約 7 m は調査区を半裁して断面観察と平面調査を行った。いずれも近代以降の削平が深く、調査区北西端では、地表下 1.1 m で淀城構築土が見られるのみであった。調査区北端から約 3.6 m で内高嶋の外堀に面する土手部分 (11~20 層) と、外堀部分を検出した。現地表は標高約 12.0 m である。

土手 1 (図 6) 京阪電鉄の線路敷関連の盛土を除去して、調査区北端から約 3.6 m、標高 11.0 m でオリブ褐色シルト層 (11 層) を検出した。これは外堀に面する内高嶋の南端部の土手 1 と判明した。さらに南側は、南面する堀 2 を埋め立てた土層となる。これより北側は内高嶋の構築土の粗砂・泥砂層の互層堆積が見られる。土手や内高嶋の構築土からは中世の瓦器椀などが出土した。近隣に存在した中世遺物包含層を掘

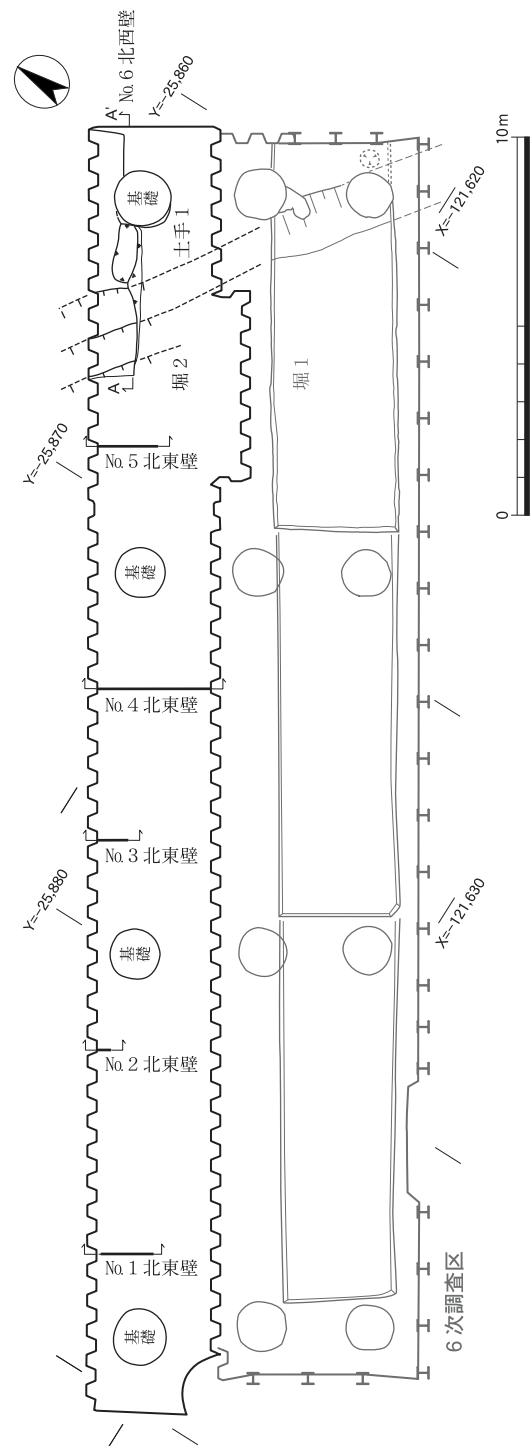


図 7 A 1 区平面図 (1 : 200)

削して造成したことがわかる。

堀 2 土手 1 を北肩として南側に落ち込むオリブ黒色～灰色シルト粘土層（1層～9層）を検出した。これは、明治期に堀を埋め立てたときの埋土と考えられ、6次調査の土手と堀肩部の北西延長上に位置する。堀埋土からは江戸時代から明治時代の遺物が出土した。

（3）A2区の遺構（図8・9、図版1）

調査区は、淀城期中堀と外堀の間に位置する曲輪「内高嶋」にあたり、6次調査では武家屋敷に関連する遺構を確認した。現地表は標高12.1mである。京阪電鉄の線路敷関連の盛土を除去して現地表下0.7～0.9m（標高11.4～11.2m）で検出した淀城構築土層上面を第1面とした。次に第1面を少し掘り下げ標高11.1～11.0mで遺構を検出した。これを第2面とした。第1面の遺構は6次調査と同様に、調査区中央の南寄りに集中的に分布するが、遺構数は少ない。江戸時代後期の礎石・集石などの建物関連遺構や溝、土坑、ピットを検出した。第2面の遺構は、礎石4基、柱穴2基、土坑1基、掘込1基などの合計8基を検出した。出土遺物は江戸時代前期に属する。断割り調査では、工事掘削深度限界の標高9.7mまで重機掘削し、6次調査と同様の堤状盛土とみられる堆積状況を確認した。

第1面

礎石 2・7・17・20～22 調査区中央部で検出した一辺0.1～0.3mの礎石上面は標高約11.2～11.4mを測る。各礎石間に対応関係は認められない。礎石20据付け穴から施釉陶器と磁器の小片が少量出土した。

集石 13・18 標高約11.2mで検出した集石13は径10～30cm大の角礫が密に詰まる。掘形は1.2m×1.0m、深さ0.3mある。集石18は集石13に南接し、径5～10cm大の石が密に詰まる。掘形は0.5m×0.4m、深さ0.2mある。いずれも礎石の根固めの可能性がある。集石13から瓦片が少量出土した。

溝 8 調査区南端部で検出した。幅0.45m、東西約1.2m、深さ0.1mを測る。軸線が東で約27度南に傾く。遺物は出土していない。

土坑 1・3～6・9・11・14・15・19 土坑1は調査区北端部、土坑9は調査区南端部、これら以外は調査区南部で検出した。土坑の平面形は概ね円形あるいは楕円形、径0.4～0.9m、深さ0.2～0.5mを測る。江戸時代前期末から中期（17世紀末～18世紀後半）に属する遺物が出土した。

第2面

礎石 26～29（図10） 調査区南部で、礎石上面はほぼ標高11.0mで検出した。一辺10～40cm、厚さ10cmの角礫である。礎石26～28の3基は柱間1.4～1.5mで南北方向に並ぶ可能性がある。礎石27・29が1.6mの間隔で6次調査の石垣66の延長線上に位置する。主軸線は東で約30度南に傾く。礎石29据付け穴から施釉陶器と染付磁器の小片が少量出土した。また、6次調査の柱列2～4を含めて建物となる可能性がある。

柱穴 23・24 調査区中央部の標高約11.1mで検出した。柱穴23は柱痕跡があり、掘形径0.35m、

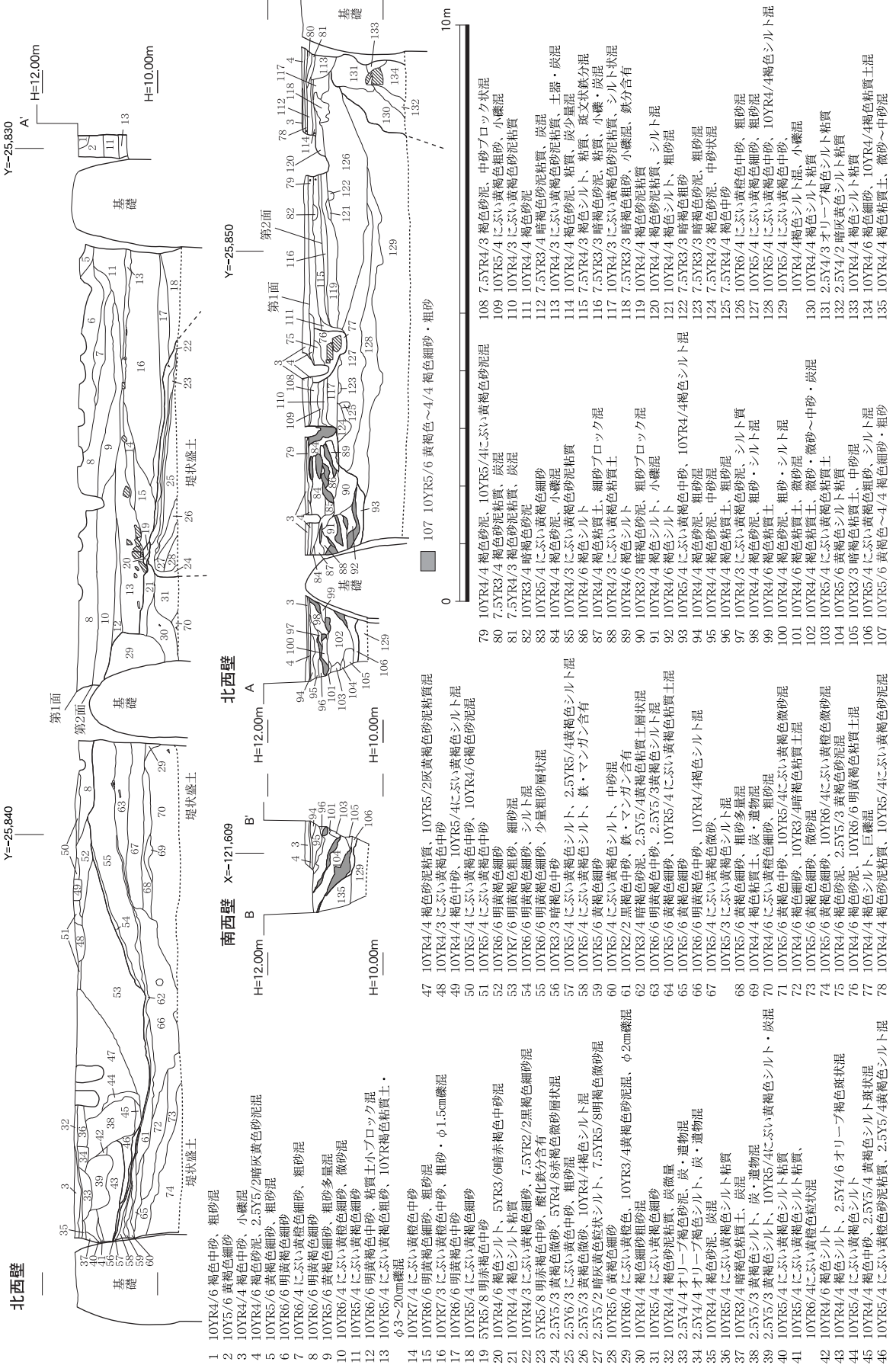


図8 A2区断面図(1:100)

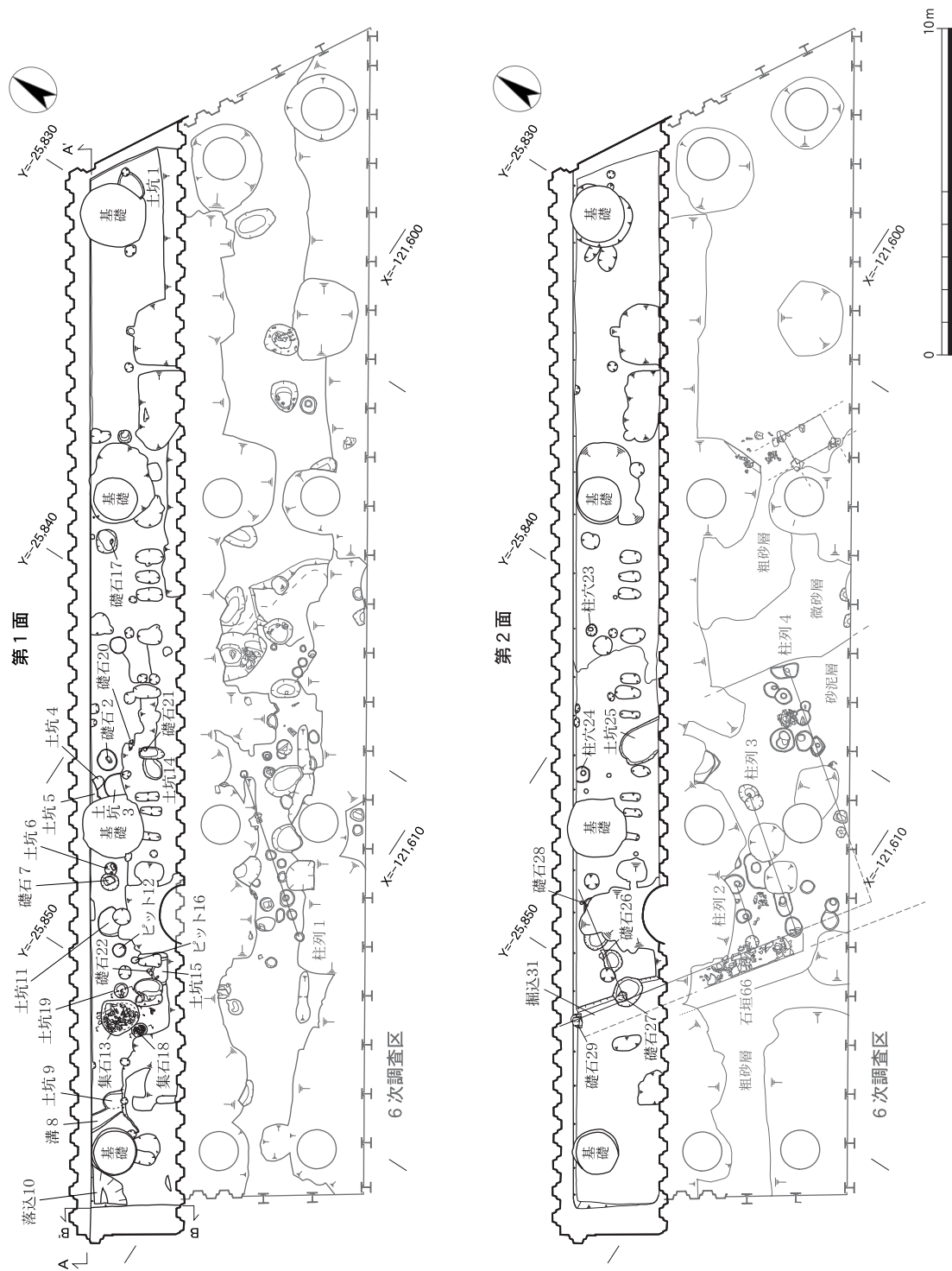


図9 A2区平面図(1:200)

深さ0.4mを測る。柱穴24は柱痕跡があり、掘形径0.5m、深さ0.1mを測る。柱穴24で土師器片が少量出土した。

土坑25 調査区中央部の標高11.1mで検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈するとみられる。埋土はにびい黄褐色砂泥(10YR4/3) 南北幅1.0m、東西長1.4m以上、深さ0.4~0.5mを測る。

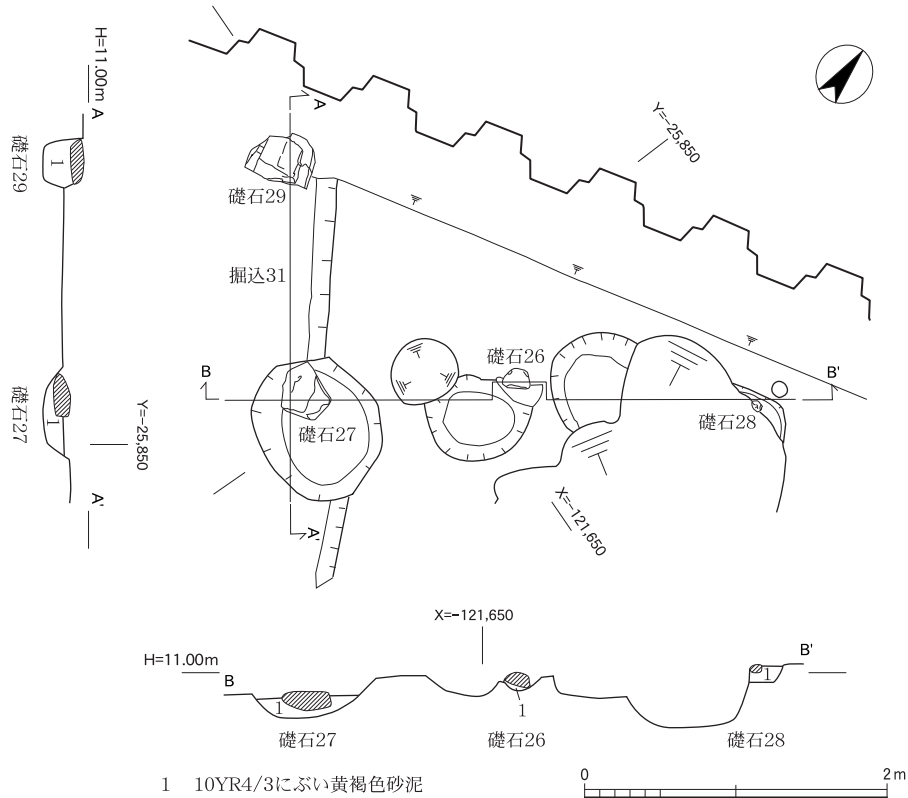


図10 A 2区礎石26～29実測図（1：50）

掘込31 調査区南部の標高約11.0mで検出した。6次調査の石垣66の西側延長線上に位置し、石垣の掘形とみられる直線的な肩部を検出した。東西の主軸線は東で約39度南に傾き、検出規模は長さ2.6m、深さ0.1m前後を測る。石垣は検出していない。抜き取られたものと考えられる。

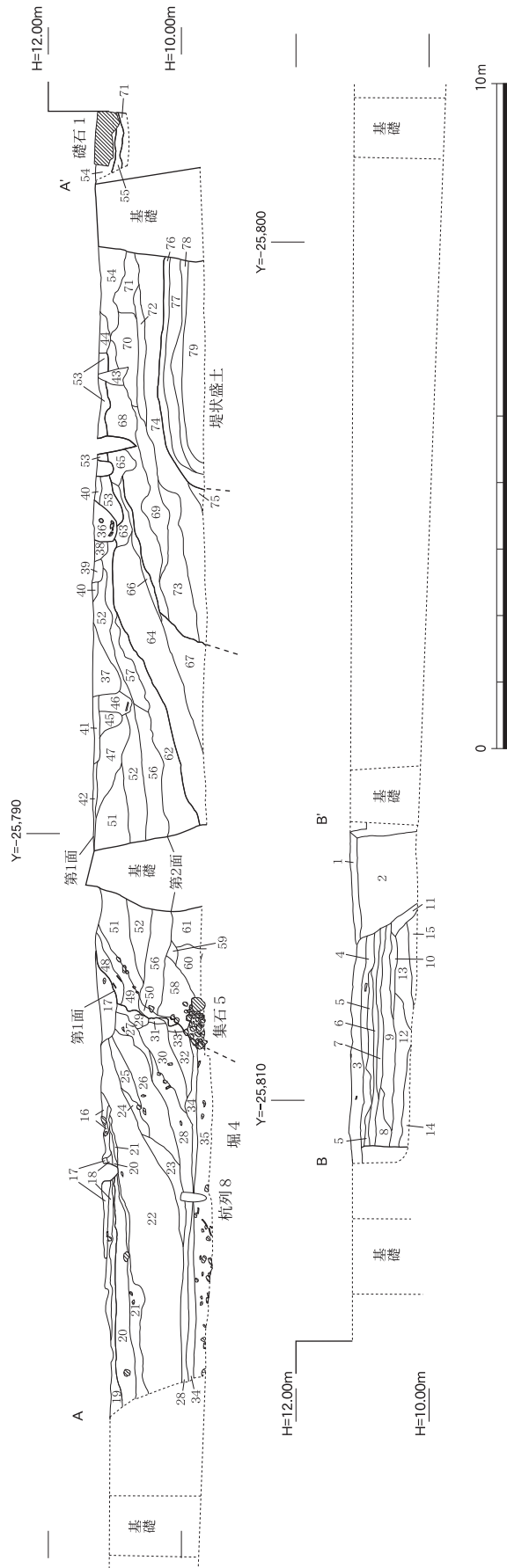
（4）B 1区の遺構（図11・12、図版1）

調査区は、淀城跡の本丸南の曲輪とさらに南側の中堀にあたり、曲輪内施設および中堀の北肩部に関連する遺構を確認した。第1面は、現地表下0.8～0.9m（標高11.2～11.3m）で検出した黄褐色系の整地層（40～42・44・53・54層、淀城構築土）の上面が成立面である。遺構は少なく、堀1条、杭列1条、礎石1基、土坑1基を検出した。江戸時代後期から近代の遺物が出土した。第2面は、淀城構築土を少し下げた面で検出した。第1面を少し下げた状態で検出したため、堤状盛土の南側法面が露出した状態となった。遺構は集石1基、礎石1基、土坑2基を検出した。江戸時代中期の遺物が出土した。

第1面

堀4 調査区南西部で検出した堀4は、調査区全体の2/3程の面積を占める。堀北肩部の石垣は残存しないが、石垣掘形の埋土や裏込石の痕跡を確認した。暗青灰色系の堀埋土は近代の石垣撤去後に埋め立てたもので、石垣の面石であったとみられる50～90cm大の角礫数石の他、江戸時代後期（19世紀中葉）以降の遺物が混入して出土した。

杭列8 調査区のほぼ中央部、堀4の埋土内で検出した。6次調査第2面の石垣8西延長線上



- | | | |
|--|---|--|
| <p>1 10YR4/4 褐色泥砂、黄褐色泥砂、黄褐色シルトブロック少量混</p> <p>2 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、シルトブロック混</p> <p>3 2.5Y5/3 黄褐色シルト、2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト・小礫混</p> <p>4 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、φ0.5cm礫混</p> <p>5 10YR4/4 褐色泥砂、小礫混</p> <p>6 10YR4/2 灰黄褐色シルト、シルト・小礫・炭混</p> <p>7 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、シルト・小礫・炭混</p> <p>8 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、シルト・小礫・炭混</p> <p>9 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、シルト・小礫・炭混</p> <p>10 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、炭混</p> <p>11 2.5Y5/3 黄褐色泥砂</p> <p>12 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、灰色シルトブロック混</p> <p>13 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、シルト・小礫混</p> <p>14 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、均質</p> <p>15 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、φ1cm礫・褐色シルト少量混</p> <p>16 10YR3/3 暗褐色泥砂</p> <p>17 7.5YR4/4 褐色泥砂、グライ化、シルト混</p> <p>18 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、黄褐色シルトブロック混</p> <p>19 10YR4/1 褐色泥砂、炭粒少量混</p> <p>20 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂</p> <p>21 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、シルト混</p> <p>22 5Y4/2 灰オリーブ色砂、5Y6/3 オリーブ黄色砂泥・炭少量混</p> <p>23 5Y5/2 灰オリーブ色砂、シルト・中礫少量混</p> <p>24 5Y5/3 灰オリーブ色砂、5Y6/3 オリーブ黄色砂泥・炭少量混</p> <p>25 5Y6/3 オリーブ黄色砂泥、シルト質に細砂混</p> <p>26 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥、中礫中量混</p> <p>27 2.5Y4/1 黄灰色泥土、細砂混</p> | <p>28 2.5Y4/1 黄灰色泥土、炭化物含む堆積シルト層薄く混</p> <p>29 10YR6/3 にぶい黄褐色泥砂、シルトに細・中砂混</p> <p>30 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥、細砂含むシルト混</p> <p>31 2.5Y6/3 にぶい黄褐色泥土、細砂少量混</p> <p>32 5Y5/2 灰オリーブ色泥土、細砂少量混</p> <p>33 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂</p> <p>34 7.5Y5/1 灰色砂泥、明灰色シルト細ブロック混</p> <p>35 7.5Y4/1 灰色砂泥、炭粒・瓦少量混、φ4~10cm礫多量混</p> <p>36 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、炭粒少量混(土坑3)</p> <p>37 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、炭粒少量混(土坑3)</p> <p>38 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭粒少量混</p> <p>39 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭粒・小礫少量混</p> <p>40 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、黄褐色シルトブロック混</p> <p>41 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭粒・小礫少量混</p> <p>42 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、小礫・砂多量混</p> <p>43 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、φ1~4cm礫多量混</p> <p>44 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、黄色シルト・炭混</p> <p>45 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂、炭粒少量混</p> <p>46 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭・小礫少量混</p> <p>47 10YR4/4 褐色泥砂、シルト混</p> <p>48 10YR4/4 褐色泥砂、小礫中量混</p> <p>49 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂</p> <p>50 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂</p> <p>51 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、明灰色シルト混</p> <p>52 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂、シルトブロック混</p> <p>53 10YR4/2 灰黄褐色泥土、炭粒少量混</p> | <p>54 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭粒・シルトブロック多量混</p> <p>55 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、炭・シルトブロック混</p> <p>56 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、細砂~中砂、シルト混</p> <p>57 10YR3/4 暗褐色泥砂、中~細砂シルト混</p> <p>58 10YR6/3 にぶい黄褐色泥土、黄褐色泥砂斑状混</p> <p>59 10YR6/3 にぶい黄褐色泥土、黄褐色泥砂斑状多量混</p> <p>60 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂、シルトブロック混</p> <p>61 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂、シルトブロック・明灰色細砂中砂混</p> <p>62 10YR7/3 にぶい黄褐色中砂から細砂、10YR6/4 にぶい黄褐色細砂・マンガン混</p> <p>63 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、マンガン・灰色シルト少量混</p> <p>64 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、シルトブロック少量混</p> <p>65 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、シルトブロック少量混</p> <p>66 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、黄褐色シルトブロック少量混</p> <p>67 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、黄褐色シルトブロック混</p> <p>68 2.5Y6/3 にぶい黄色砂、上部にシルト層状混</p> <p>69 2.5Y5/2 暗灰色砂泥、灰色シルトブロック混</p> <p>70 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、黄色シルトブロック混</p> <p>71 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、黄色シルト少量混</p> <p>72 10YR6/3 にぶい黄褐色中砂~細砂、黄色シルト少量混</p> <p>73 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂、シルトブロック多量混</p> <p>74 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂、褐色シルト混</p> <p>75 10YR3/4 暗褐色泥砂、マンガン分多量混</p> <p>76 10YR5/3 にぶい黄褐色泥土、シルト混</p> <p>77 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂</p> <p>78 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂粘質、炭粒少量混</p> <p>79 10YR4/2 灰黄褐色泥土、φ2cm礫・砂混、マンガン少量混</p> |
|--|---|--|

図11 B 1 区断面図 (1 : 100)

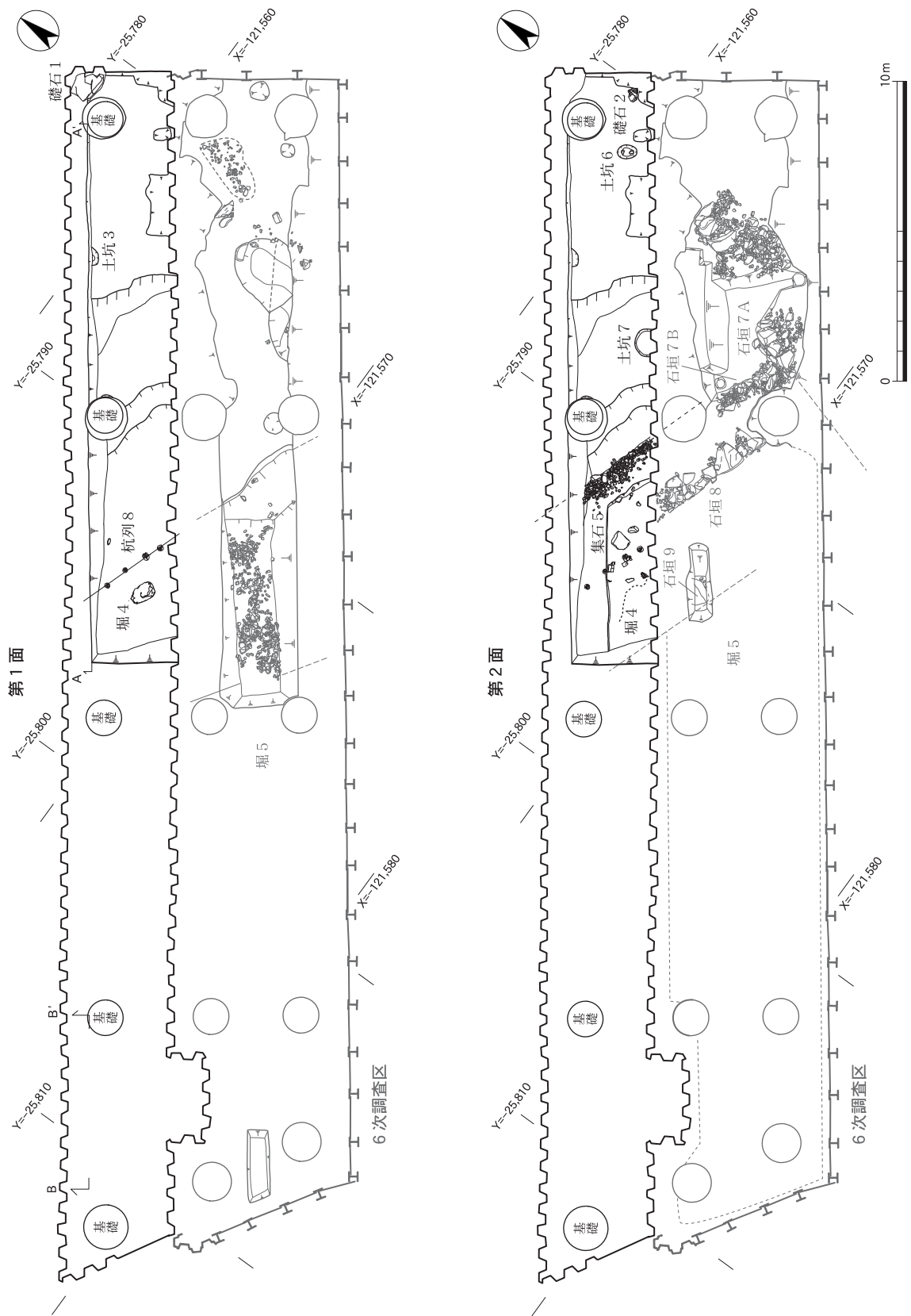


図12 B1区平面図(1:200)

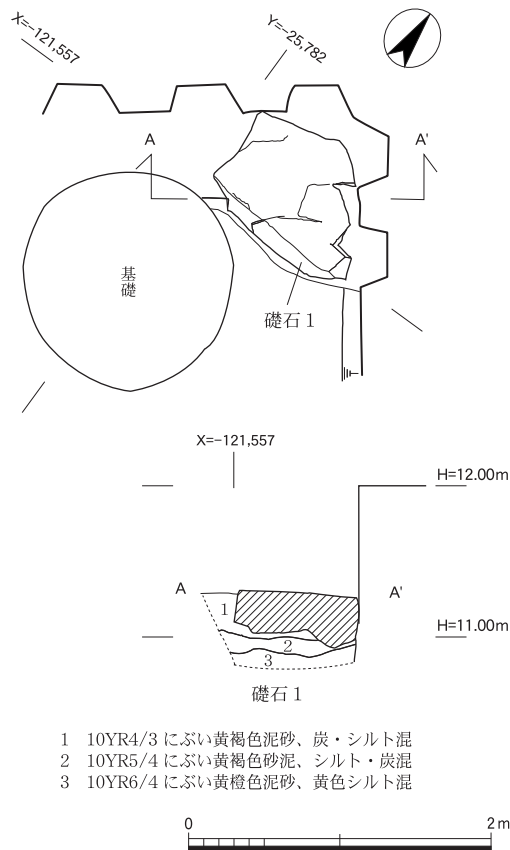


図13 B 1区礎石 1 実測図 (1 : 50)

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭・シルト混
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、シルト・炭混
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂、黄色シルト混

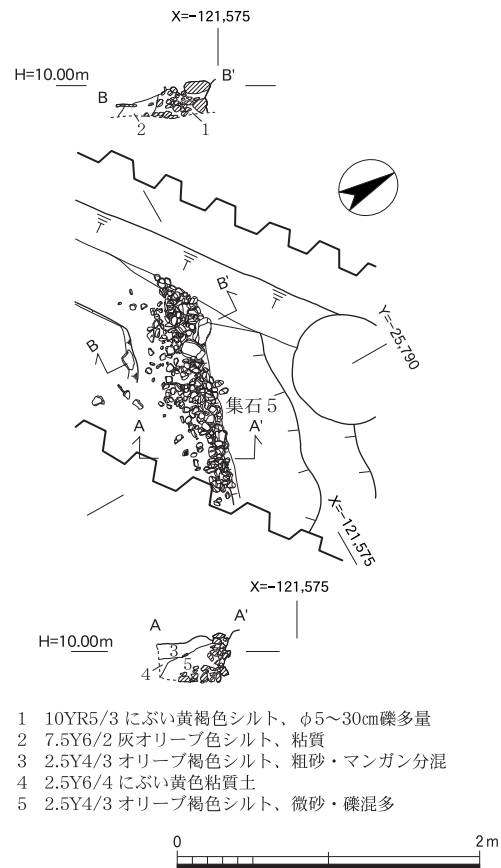


図14 B 1区集石 5 実測図 (1 : 50)

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、 ϕ 5~30cm礫多量
- 2 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト、粘質
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、粗砂・マンガ分混
- 4 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、微砂・礫混多

に位置する。杭は径16~20cmで、0.6~0.8m間隔の丸杭が4本で、さらに調査区外西に続くと思われる。杭列の軸線は東で約19度南偏する。杭上面の標高は9.8~10.1mを測る。検出位置や杭列方向、杭上面の標高などから6次調査石垣8に関連する遺構の可能性がある。

礎石 1 (図13) 調査区北端部で検出した。一部が工用鋼板で断ち切られていたが、東西112cm、南北84cm、厚さ30~40cmを測る大きな角礫で、上面は標高11.30mを測る。掘形は不明瞭である。角礫の南辺が東西方位に沿っていることなどから南の曲輪の建物遺構の一部と考えられるが、対応する礎石は検出していない。

土坑 3 調査区北西部で検出した。埋土は淀城構築土と同系の黄褐色砂泥である。規模は径0.6m、深さ0.4mである。遺物は焼締陶器、軒平瓦などが出土した。

第2面

集石 5 (図14) 調査区中央部北寄りで検出した。6次調査の石垣7Bの西延長線上に位置する。一辺30~40cmの石2石と拳大の石多数をほぼ東西方向に検出しており、さらに調査区外西側に延長するとみられる。検出長3.2m、主軸線は東で約19度南偏し、標高は10.3mを測る。北面した石垣と裏込石の痕跡で、6次調査石垣7Bの西延長部と考えられる。遺物は18世紀中葉に属する。

礎石 2 調査区北端部で検出した。一辺30cm前後、厚さ25cmの角礫で、上面は標高11.1mを測る。掘形は不明瞭である。対応する礎石は検出していない。

土坑 6 調査区北東部で検出した。平面は楕円形を呈し、規模は径0.5~0.7m、深さ0.2mであ

る。底面に径10～20cm大の石が残存しており、礎石の根石の痕跡かと推測される。

土坑7 調査区北東部で検出した。土坑の南東部分は調査区外になる。規模は径0.9m、深さ0.2mである。

(5) B2区の遺構(図15・16、図版2)

調査区は、本丸・天守台の南に位置し、内堀を隔てた南の曲輪にあたる。『京の城 - 洛中洛外の城郭』¹⁸⁾には蔵が記されている。現地表は標高約12.0mで、地表下0.7mの褐色細砂層(1層)上面を第1面(標高約11.3m)とし、地表下約0.9mのにぶい黄橙色粗砂層(17層や12・13・16層)上面を第2面(標高約11.1m)とした。第1面では土坑2基、集石5基、第2面では土坑8基、集石6基を検出した。北西壁沿いに、工事掘削深の地表面下約2.4mまで断割りを行った結果、京都側から2～6m付近の標高10.1mと、京都側から23～31m付近の標高約10.2mにおいて堤状盛土の高まり部分がみられた。

第1面

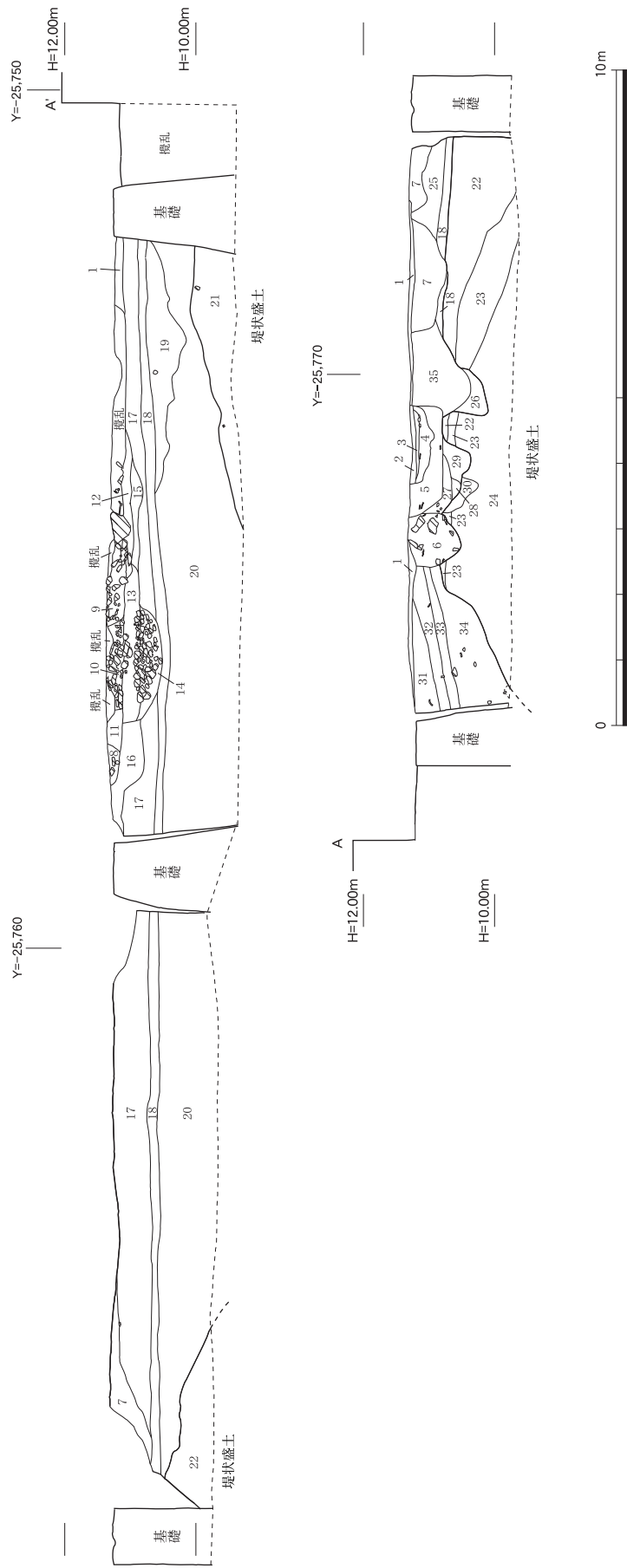
土坑1・2(図17) 土坑1は径0.6m、深さ0.05m、土坑2は、1.1m×0.5m以上、深さ0.2mを測る。江戸時代の遺物が出土した。

建物A(集石3・4・6・7・13)(図18・19、図版6) 集石3・4・6・7・13を含め6次調査で検出した布掘基礎を有する建物の基礎部分と考えられる。それぞれ標高11.1～11.3mで検出した。集石3は、残存2.0m×0.7m、深さ0.3mを測る。径5～20cmの礫が密集する。6次調査布基礎4の北延長線上に位置する。集石4は、1.7m×0.45m、深さ0.3mを測る。径5～10cmの礫が密集する。礎石の根石と考えられる。6次調査の集石2に続くものと思われる。集石6は、1.5m×1.2m、深さ0.6mを測る。径5～15cmの礫が密集する。礎石の根石と考えられる。集石7は、南北3.5m、東西幅1.0～1.2m、深さ0.3mを測る。径5～20cmの礫が密集する。6次調査布基礎5の北延長線上にあたる位置で検出した。染付、瓦などが出土した。集石7の南西端で検出した集石13は、0.6m×0.5m、深さ0.4mを測る。径5～20cmの礫が密集する。

第2面

土坑9～12・17・19～21(図17) それぞれ標高11.0～11.2mで検出した。土坑9は0.7m以上×0.7m、深さ0.3m、土坑10は1.6m以上×1.4m、深さ0.4m、土坑11は1.7m×0.6m以上、深さ0.4m、土坑12は2.3m以上×2m以上、深さ0.5m、土坑17は0.8m×0.7m、深さ0.2m、土坑19は2.5m×1.4m、深さ0.1m、土坑20は1.6m×0.9m以上、深さ0.3m、土坑21は1.9m×1.2m、深さ0.5mを測る。江戸時代の遺物が少量出土した。

建物B(集石5・8・14～16・18)(図18・19、図版6) 集石5・8・14～16・18を含め建物Aに先行する同一規模の建物基礎である。多くは標高11.0～11.2mで検出した。集石5は、標高11.3mで検出した。残存1.1m×0.4m、深さ0.5mを測る。径10～20cmの礫が密集する。集石8は、0.5m×残存0.2m、深さ0.1mを測る。径5～20cmの礫が密集する。集石14は、1.4m×残存0.9m、深さ0.5mを測る。径5～15cmの礫が密集する。礎石の根石と考えられるが、対応する遺



- 1 10YR4/4 褐色細砂、2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂・炭片・焼土混
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 (土坑2)
- 3 10YR4/6 褐色砂泥、10YR5/6 黄褐色砂泥ブロック混
- 4 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥、2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥ブロック混
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、炭粒・黄褐色泥砂・シルト少量混
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
- 8 10YR4/4 褐色粗砂、10YR4/4 褐色砂泥ブロック混
- 9 10YR4/6 褐色粗砂 (集石7)
- 10 10YR3/4 暗褐色砂、中砂～細砂・粘土ブロック混 (集石7)
- 11 10YR4/6 褐色細砂
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 (土坑19)
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 (集石15)
- 14 10YR4/4 褐色細砂 (集石15下層)
- 15 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂、2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥ブロック混
- 16 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
- 17 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂
- 18 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂

- 19 10YR4/4 褐色粗砂、10YR4/3 にぶい黄褐色粘土・2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土・φ2～3cm礫混
- 20 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂、中砂中量混
- 21 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂、10YR4/3 にぶい黄褐色ブロック多量混
- 22 10YR7/4 にぶい黄褐色細砂、中砂中量混
- 23 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、シルト小粒少量混
- 24 2.5Y5/4 黄褐色泥砂、黄褐色シルト中量混
- 25 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂、中砂中量混
- 26 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
- 27 10YR3/3 暗褐色泥砂、炭粒・黄褐色シルト多量混
- 28 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂、黄褐色シルトブロック少量混
- 29 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂、黄褐色シルト・炭少量混
- 30 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、シルト・細砂・炭少量混
- 31 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂、炭粒・土師片中量混
- 32 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂、炭粒・黄色シルト少量混
- 33 10YR4/4 褐色泥砂、炭粒・黄色シルト少量混
- 34 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、炭粒・黄色シルト、φ10cm礫少量混
- 35 10YR4/4 褐色泥砂

図15 B2区断面図 (1:100)

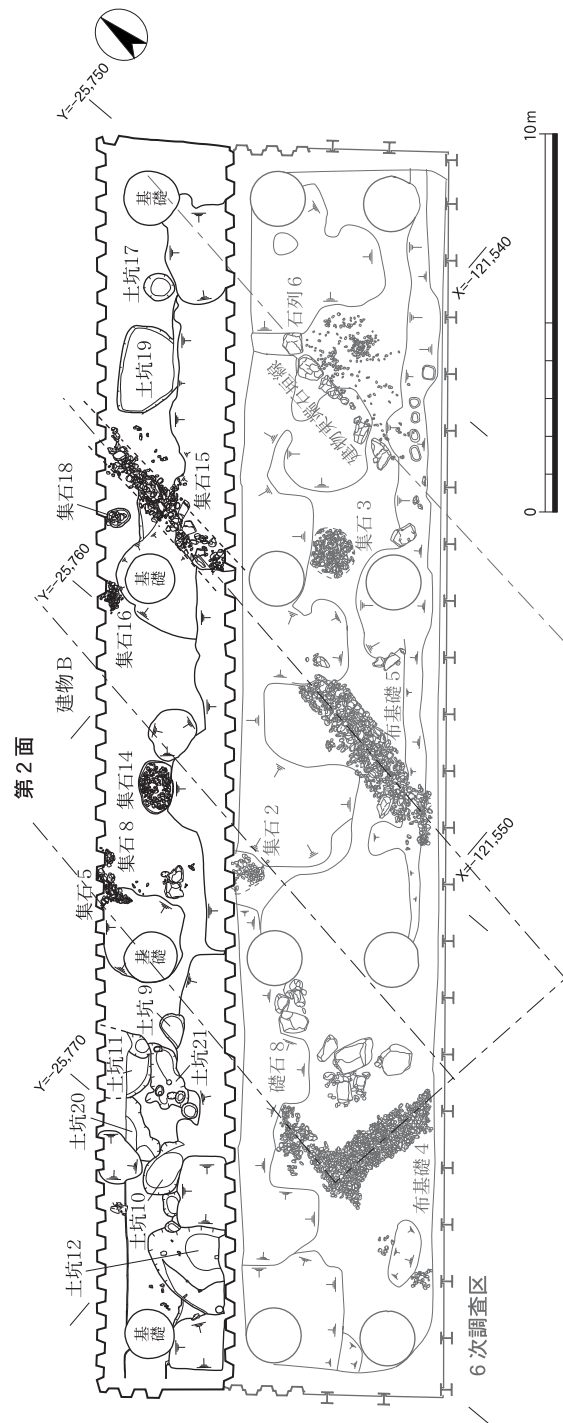
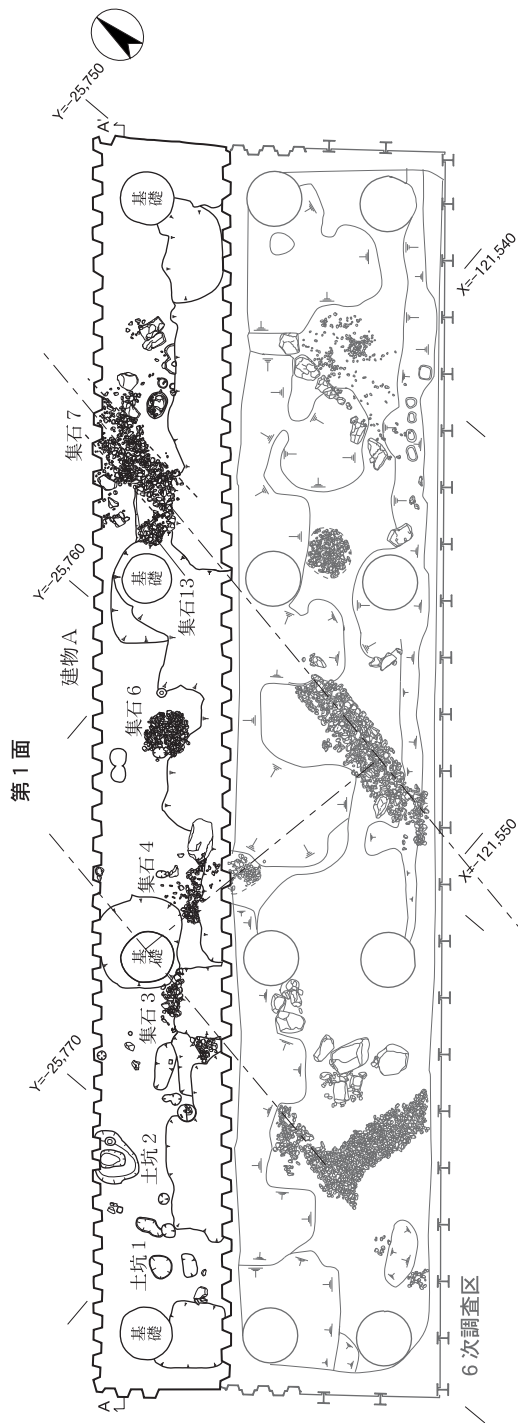


図16 B2区平面図(1:200)

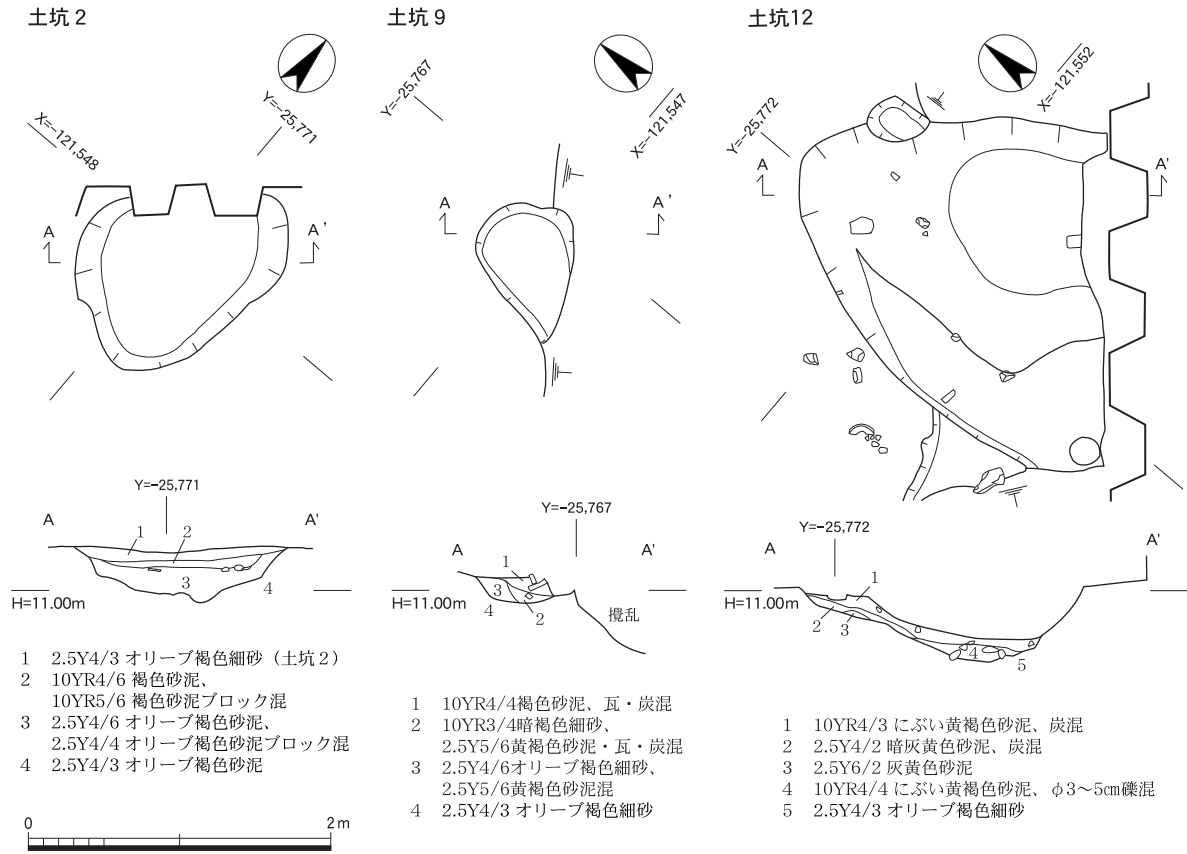


図17 B 2 区土坑 2・9・12実測図 (1 : 50)

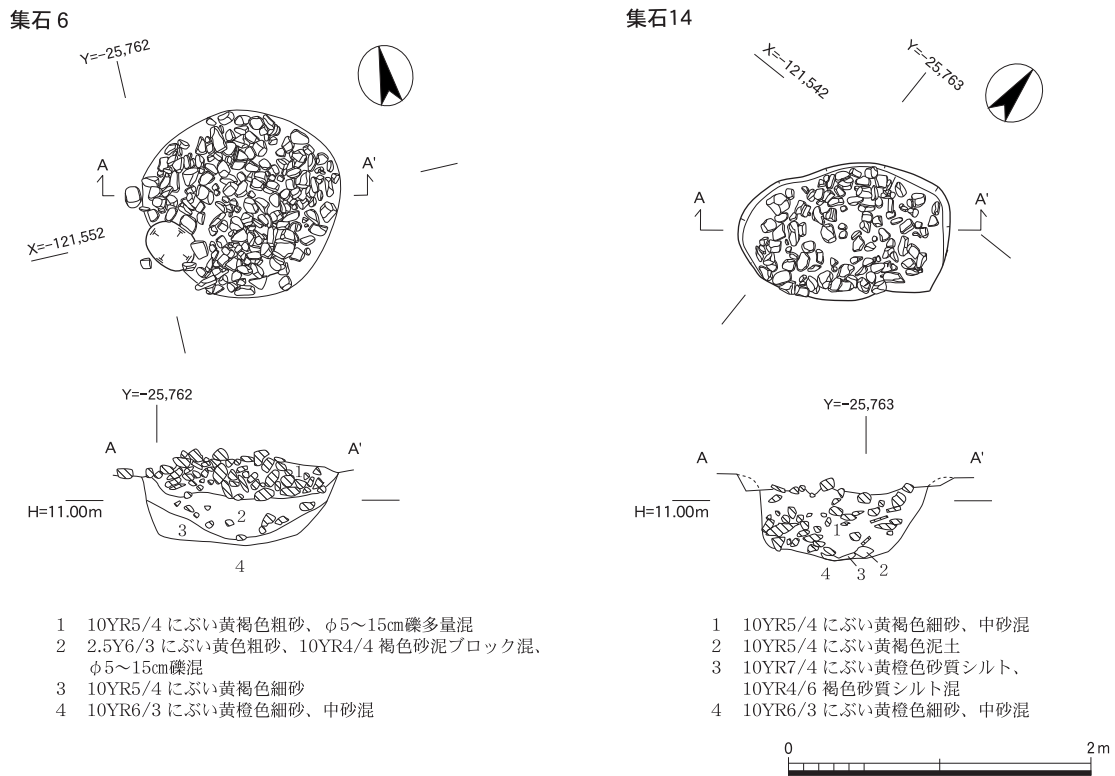
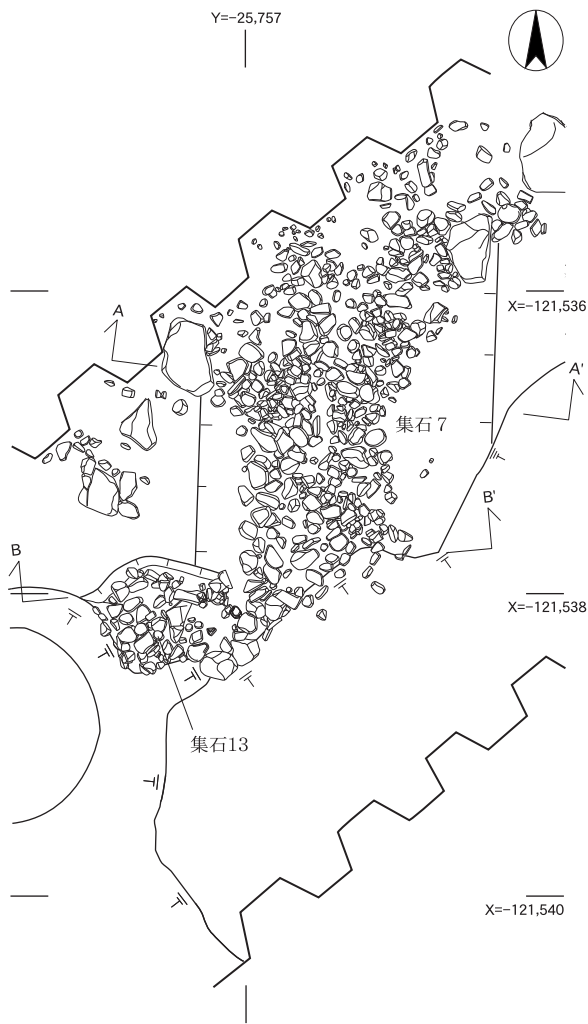
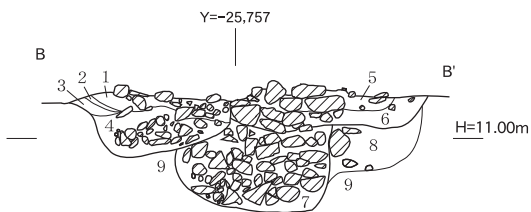
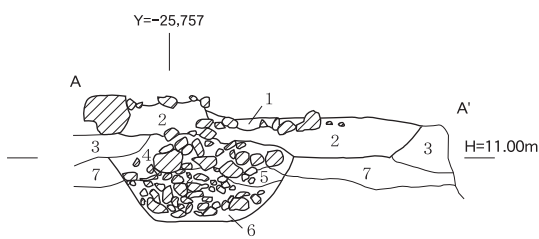
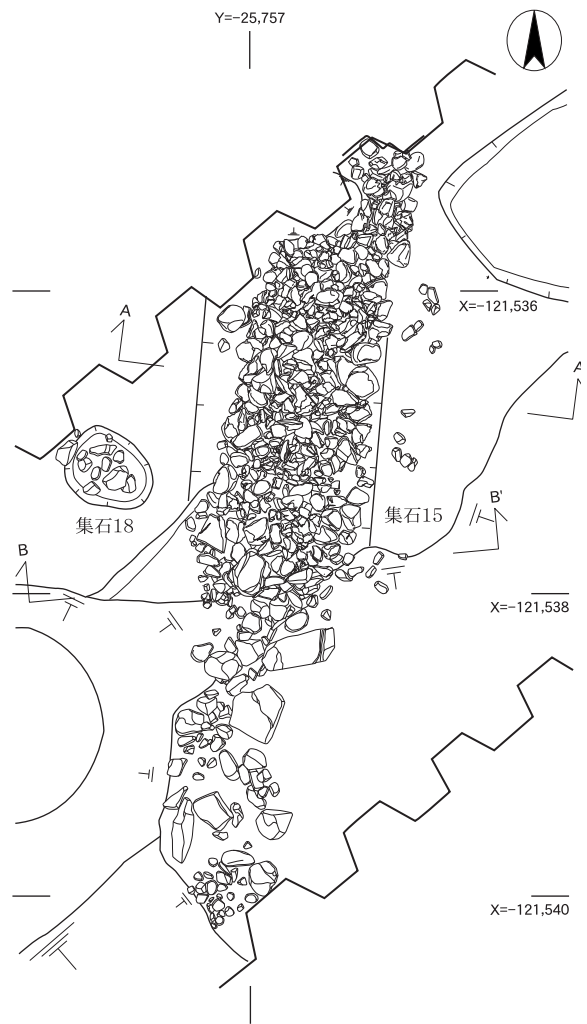


図18 B 2 区集石 6・14実測図 (1 : 50)

集石 7・13



集石 15

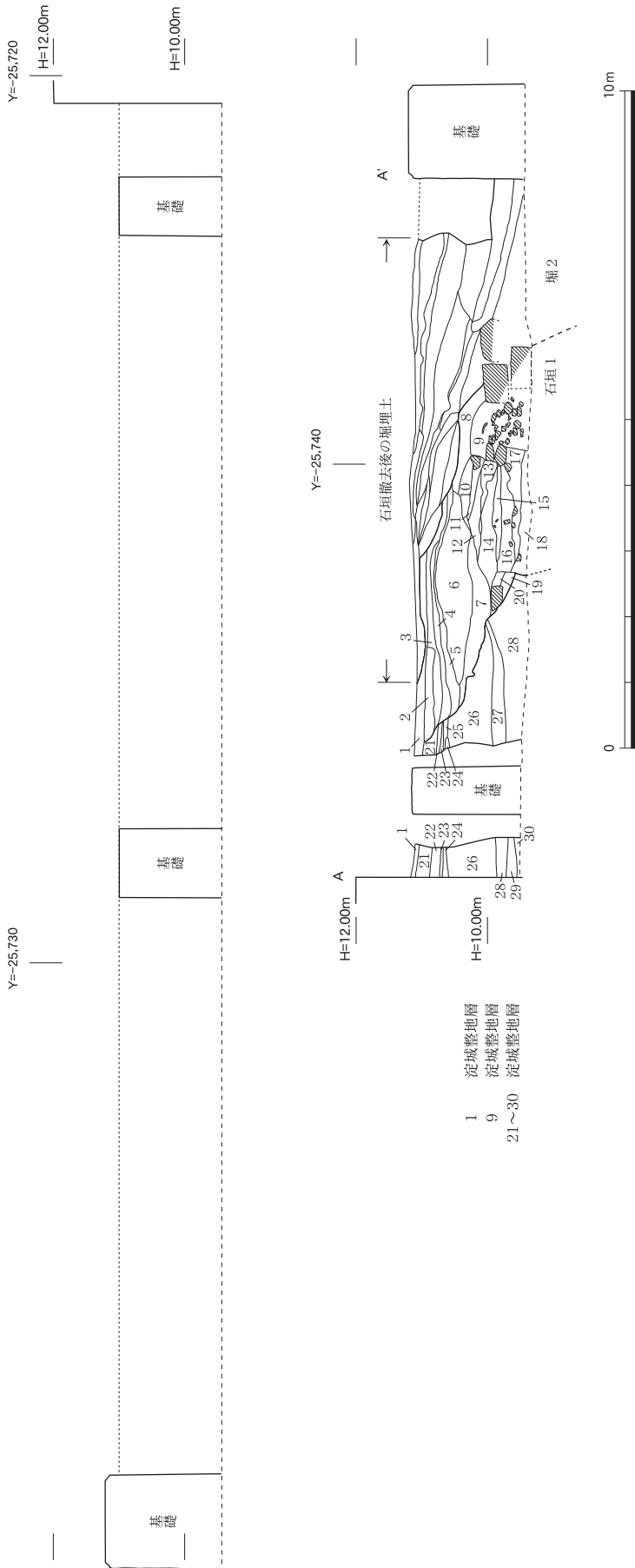


- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 (集石 7)
- 2 10YR3/3 暗褐色泥砂 (集石 7)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂、2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥混 (集石 15)
- 5 10YR5/6 黄褐色細砂 (集石 15)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂、中砂混 (集石 15)
- 7 10YR5/6 黄褐色粗砂、2.5YR5/6 黄褐色砂泥混 (集石 15)

- 1 10YR4/4 褐色微砂、粘質、φ5~15cm礫多混 (集石 13)
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂 (集石 13)
- 3 2.5Y5/6 黄褐色細砂、2.5Y5/3 黄褐色砂泥混 (集石 13)
- 4 2.5Y4/6 オリーブ 褐色砂泥、2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混、φ3~10cm礫多混 (集石 13)
- 5 10YR4/6 褐色細砂、φ3~20cm礫多混 (集石 7)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂、φ5~20cm礫多混 (集石 7)
- 7 10YR5/6 黄褐色粗砂、φ5~20cm礫多混 (集石 15)
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、φ5~15cm礫少混 (集石 15?)
- 9 2.5Y7/4 浅黄色粗砂



図19 B 2区集石 7・13・15実測図 (1 : 50)



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR4/4 褐色粗砂、10YR4/4 褐色砂泥ブロック混 2 2.5Y5/3 黄褐色粘土 3 10YR4/4 褐色粗砂、砂泥・2.5Y6/3 にぶい黄色粘土ブロック混 4 10YR5/6 黄褐色粗砂 5 10YR4/4 褐色粗砂、粘質、炭・瓦混 6 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、10YR5/6 黄褐色細砂多量混 7 10YR4/4 褐色砂泥、粘質、10YR6/6 明黄褐色微砂・10YR4/6 褐色粗砂ブロック混 8 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂、粘質、粗砂・礫混 9 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト、粗砂・角礫混 10 2.5Y5/3 黄褐色粗砂、10YR4/3 にぶい黄褐色粘土ブロック混 11 5Y3/2 オリーブ黒色粗砂、粗砂多量混、炭少量混 12 2.5Y5/4 黄褐色粗砂、5Y5/3 灰オリーブ色砂泥ブロック混 13 10Y5/2 オリーブ灰色シルト、粘質、粗砂ブロック混 14 2.5Y5/3 黄褐色粗砂、7.5Y4/1 灰色粘土ブロック混、東半分マンガン分多含 15 10YR4/1 灰色砂泥、粘質、粗砂・炭混 | <ul style="list-style-type: none"> 16 2.5Y5/3 黄褐色粗砂、7.5Y4/1 灰色砂泥粘質ブロック混 17 10Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粘質、粗砂・炭多混 18 2.5Y5/3 黄褐色粗砂、7.5Y4/1 灰色微砂混 19 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 20 7.5YR3/4 暗褐色粗砂 21 10YR5/6 黄褐色粗砂、10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック混 22 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、粘質、10YR4/4 褐色粘土ブロック混 23 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、砂泥ブロック混 24 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 25 10YR5/6 黄褐色粗砂、10YR5/6 黄褐色粘土ブロック混 26 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、砂泥ブロック混 27 7.5YR3/4 暗褐色粗砂 28 7.5YR4/4 褐色粗砂 29 7.5YR4/4 褐色粗砂、10YR4/4 褐色砂泥粘質ブロック混 30 10YR5/6 黄褐色粗砂 |
|---|---|

図20 B3区断面図(1:100)

構を確認できなかった。集石15は、集石7を除去した下層の標高11.2mで検出した。南北5.2m、東西幅0.7~1.0m、深さ0.5mを測る。径5~20cmの礫が密集する。集石16は、0.8m×残存0.5m、深さ0.2mを測る。径5~20cmの礫が密集している。集石18は、標高11.2mで検出した。0.6m×0.5m、深さは約0.4mを測る。径5~10cmの礫が密集する。集石15で使われた石材の種類はチャート、砂岩、粘板岩などである。いずれの集石も遺物は少なく、焼締陶器、瓦などが出土した。

(6) B3区の遺構(図20・21、図版2)

調査区は、本丸の南に位置し、内堀と本丸南の曲輪部分にあたる。現地表は標高約12.0mである。地表下1.0mまで京阪電車の淀駅ホームの攪乱を受けていた。調査区北東端から20~25mにて東西方向の内堀を検出した。20~30m地点以南は曲輪部分となり、標高11.1mで褐色粗砂(1層)などの淀城構築土を検出し、この面で調査を行った。B2区で見られた整地層面は、B3区では削平され、淀城構築土が見られるが、遺構は検出できず、調査区中央部で石垣1と堀2を検出した。その後、石垣1を南北に断割りを入れ、曲輪部分を標高9.6mまで断ち割りし、淀城構築土の状況を確認した。

石垣1(図22、図版6) 調査区北東端から20~25m以南の標高9.5mで大量の栗石を検出し、標高10.3~9.2mで東西方向で北面する石垣1を検出した。一辺0.4~0.8mの石が上下2段・7石を延長約4mにわたって検出した。ほとんどは花崗岩である。石垣裏込めの5層には径10~25cmの礫が多く混じる。東隣の6次調査から続き西の調査区外に続く。工事の支障となる石に番号を付けて取り上げた。

堀2 調査区北東端から20~25mまでは、標高11.0mで灰色シルト層を検出した。内堀の埋土と考えられる。19世紀末までの遺物が出土した。

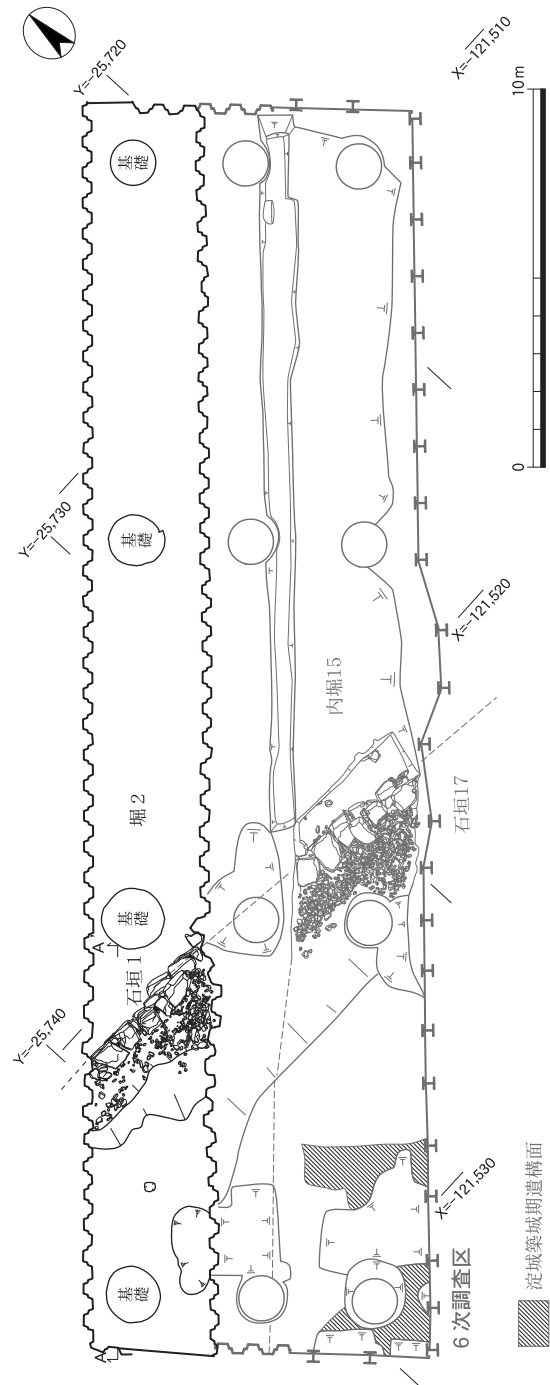


図21 B3区平面図(1:200)

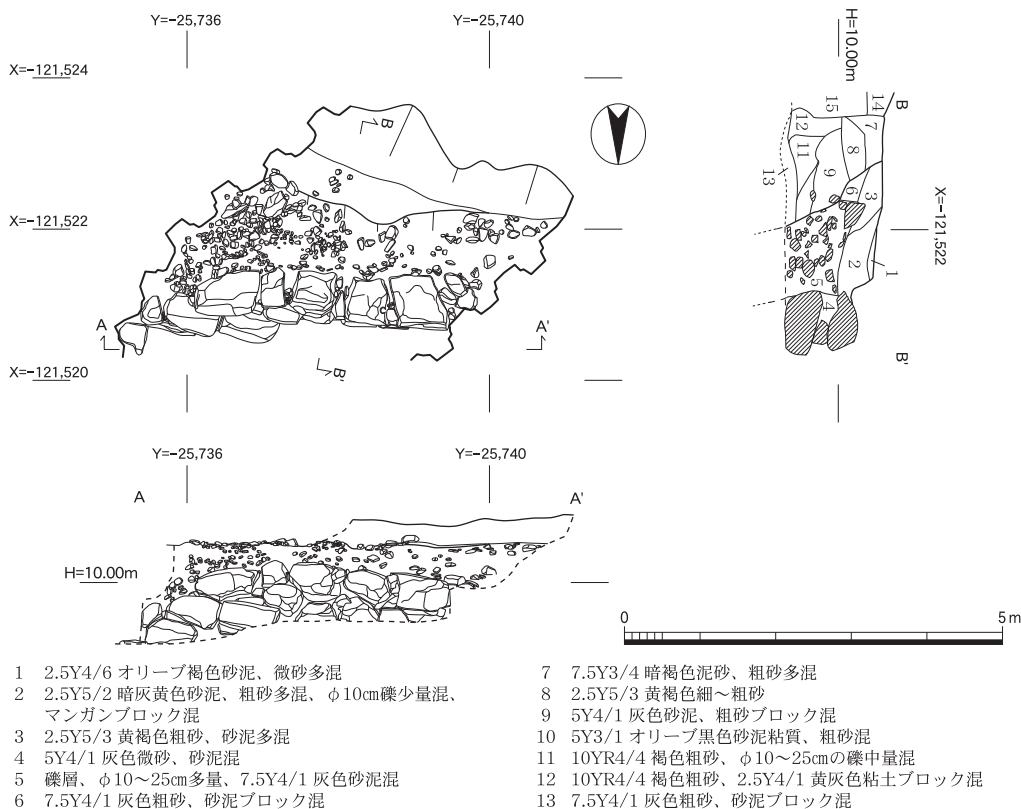


図22 B3区石垣1実測図(1:100)

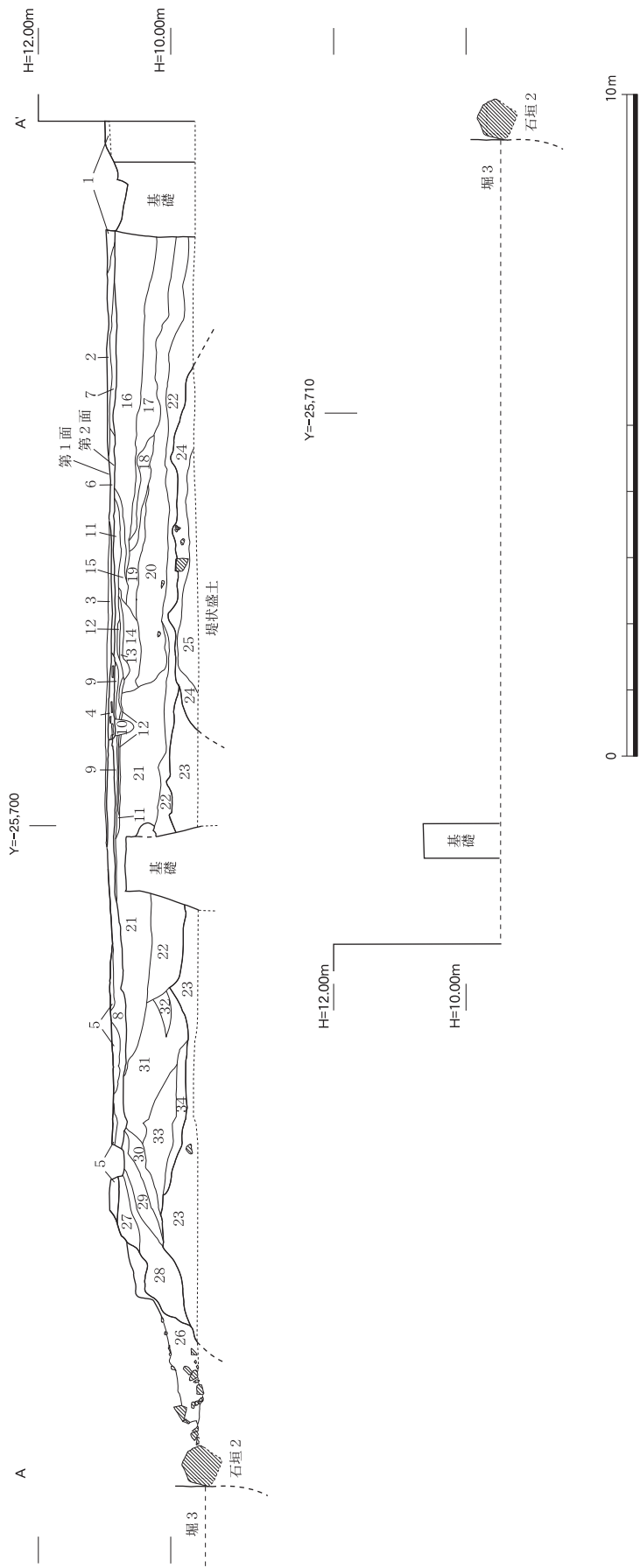
(7) B4区の遺構(図23・24、図版2・3)

調査区は、本丸天守台の南東に位置し、内堀を隔てた東側の曲輪にあたる。現地表面の標高は約12.0mである。地表下1.0m(標高11.0m)のオリーブ褐色砂礫(にぶい黄色細砂ブロック混)(6層や1・2層)を第1面とし、地表下約1.1m(標高10.85m)の暗灰黄色砂泥(9層や7・11層)を第2面とした。整地面(遺構面)は北から南に向かって低くなり、傾斜が見られる。第1面では土坑1・4・5、石列6、石垣2、堀3など、第2面で土坑9・10・12・13、集石14・15などを検出した。北西壁沿いに掘削深度限界の現地表面下2.2mまで断割りを行った結果、京都側から大阪方面へ8m付近、標高9.9m程で堤状盛り土の痕跡がみられた。

第1面

土坑1・4・5(図25) 標高10.9~10.8mで検出した。土坑1は、2.1m以上×1.1m、深さ0.08mを測る。北西端で方向を変え、逆「く」の字状の平面形になると思われる。平瓦の平面を上にして、土坑内に敷いている。6次調査の雨落ち6の北延長線上に位置する。施釉陶器、瓦などが出土した。土坑4は、2m以上×0.7mを測る。上部が削平され、深さは計測できなかった。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。土坑5は、1.9m×0.6mを測る。上部が削平され、深さは計測できなかった。土師器、瓦、鉄製品などが出土した。

石列6 標高10.8~10.9mで検出した。北側の石は長径0.6m、短径0.3mである。南側の石は長径0.25m、短径0.2mである。石の中心間の距離は約1mである。6次調査の柱列11(礎石14



- | | |
|--|--|
| <p>1 5Y6/2 灰オリーブ色微砂、2.5Y5/4 黄褐色砂泥混、マンガン多含有</p> <p>2 5Y7/2 灰白色微砂、5Y5/3 灰オリーブ色砂泥ブロック混</p> <p>3 10YR4/4 褐色砂泥、2.5Y5/4 黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>4 2.5Y5/6 オリーブ褐色砂泥、2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、炭・土器片少混、瓦片多混</p> <p>5 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂、10YR4/4 褐色砂泥混</p> <p>6 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥、5Y6/1 灰色砂泥ブロック混</p> <p>7 2.5Y5/6 黄褐色砂泥、5Y6/1 灰色砂泥ブロック混</p> <p>8 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥ブロック混</p> <p>9 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥</p> <p>10 10YR5/6 黄褐色細砂、2.5Y5/3 黄褐色砂泥混</p> <p>11 10YR3/4 暗褐色砂泥、2.5Y5/3 黄褐色砂泥混</p> <p>12 5Y5/4 オリーブ色細砂</p> <p>13 2.5Y5/4 黄褐色細砂、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>14 10YR4/4 褐色砂泥、2.5Y5/4 黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>15 10YR4/6 褐色細砂、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>16 2.5Y5/6 黄褐色細砂、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>17 2.5Y5/6 黄褐色細砂、2.5Y5/4 黄褐色粘質土ブロック混</p> | <p>18 2.5Y5/4 黄褐色砂泥、2.5Y6/2 灰黄色砂泥ブロック混、マンガン多含有</p> <p>19 10YR4/6 褐色細砂、2.5Y5/4 黄褐色粘質土ブロック混、炭少量混</p> <p>20 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、2.5Y6/3 にぶい黄色細砂ブロック混</p> <p>21 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂、2.5Y5/6 黄色粘質土ブロック混</p> <p>22 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土ブロック混、炭少量混</p> <p>23 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂、2.5Y5/4 黄褐色粘質土ブロック混</p> <p>24 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、2.5Y5/4 黄褐色微砂ブロック・φ2~20mm礫・遺物・炭混</p> <p>25 2.5Y4/6 オリーブ褐色微砂、2.5Y5/4 黄褐色粘質土ブロック混</p> <p>26 7.5Y4/1 灰色砂泥、10Y5/1 緑灰色粘質土ブロック混</p> <p>27 10YR4/4 褐色砂泥、2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥ブロック混</p> <p>28 10YR4/6 褐色細砂、2.5Y6/3 にぶい黄色細砂ブロック混</p> <p>29 10YR4/4 褐色砂泥、2.5Y5/4 黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>30 2.5Y5/3 黄褐色砂泥、炭片少量混</p> <p>31 2.5Y5/6 黄褐色細砂、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥ブロック混</p> <p>32 2.5Y5/6 黄褐色細砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土ブロック混</p> <p>33 2.5Y5/6 黄褐色細砂、2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥ブロック混</p> <p>34 2.5Y4/6 オリーブ褐色微砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土ブロック混</p> |
|--|--|

図23 B4区断面図(1:100)

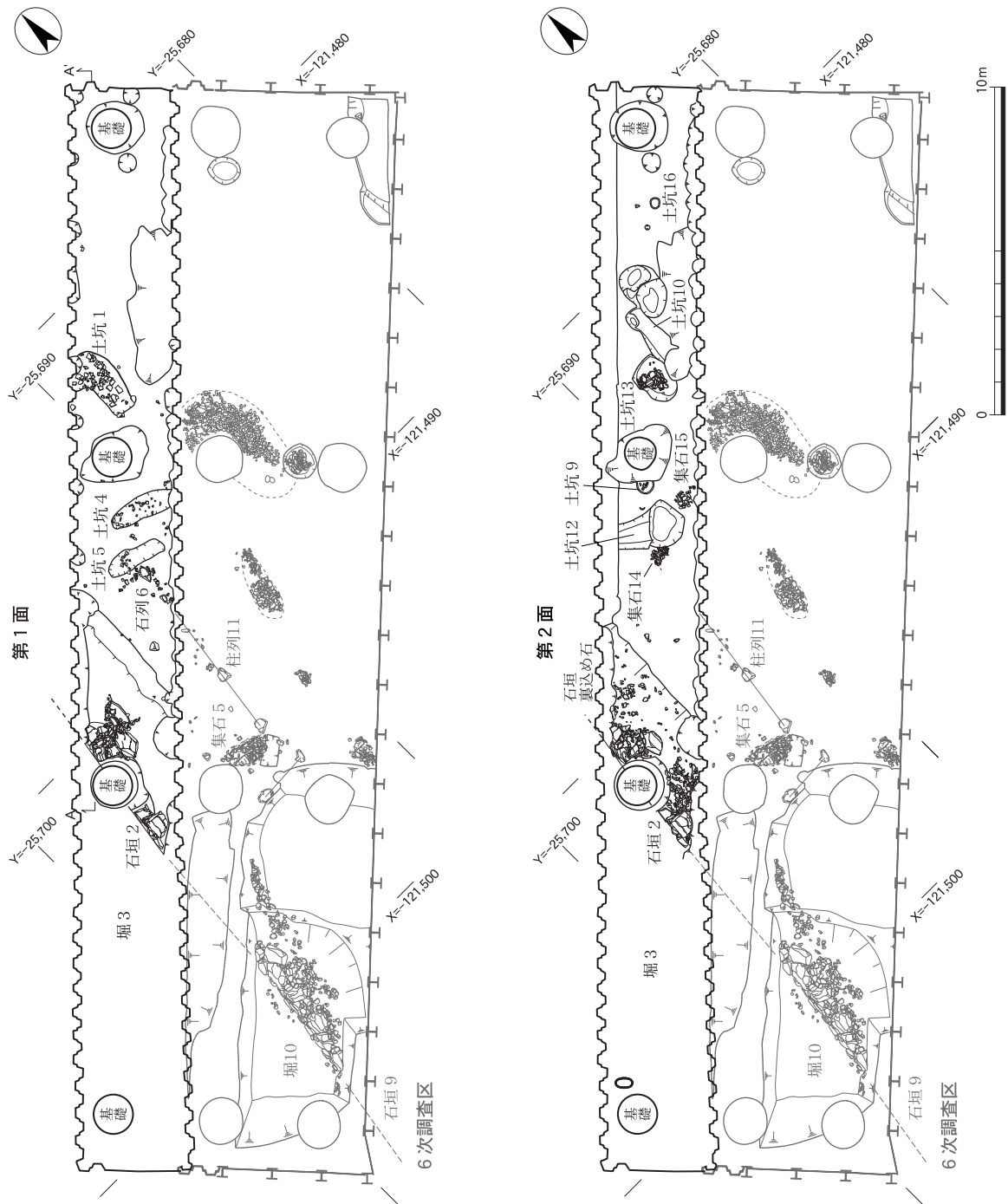


図24 B4区平面図(1:200)

~16)の北延長線上に位置する。

石垣2(図26) 調査区の北端から20~24mの地点で、残存する南北方向の石垣を標高10.2~9.3mにて、橋脚基礎杭で分断されていたが、南北4.5m、高さ0.9mの規模で検出した。一辺0.3~0.6mの石を東西に4石以上、上下に2石検出し、掘削深以下に続くことを確認した。6次調査の石垣9に続くものである。

堀3 標高10.9mで検出した。石垣2に伴う堀で、明治時代になって石垣2を取り崩して埋め

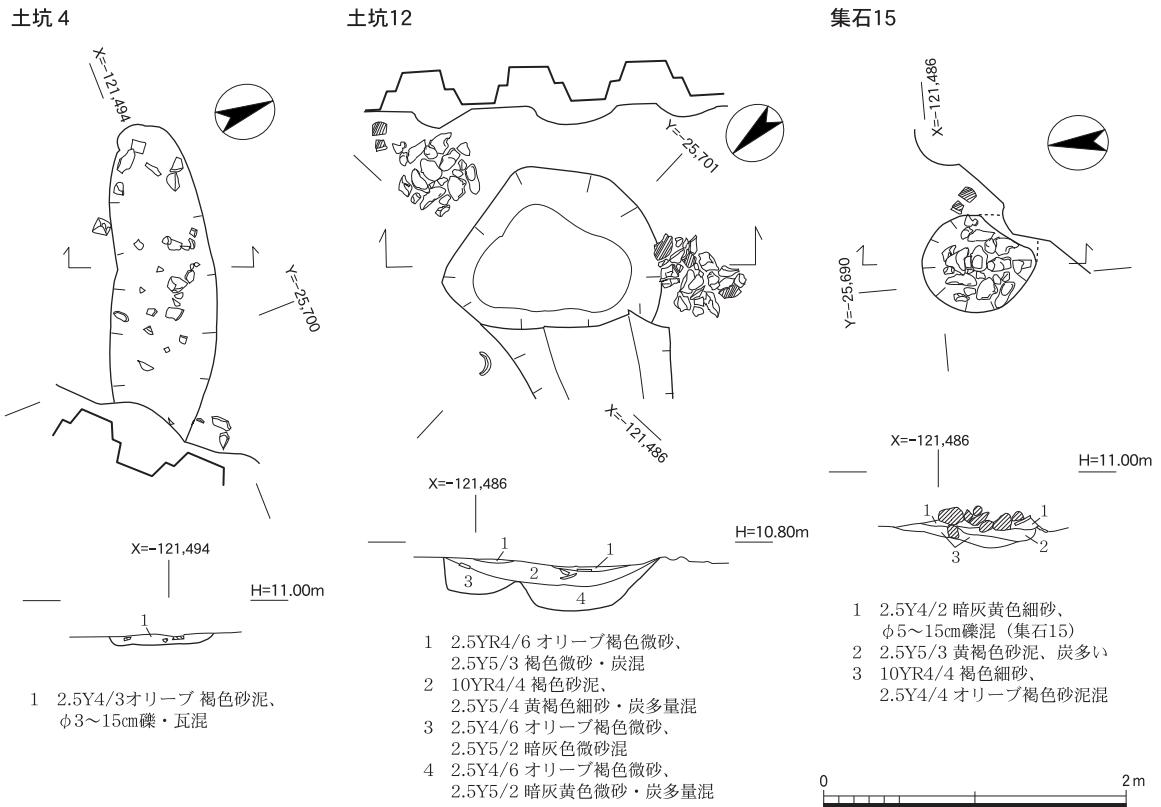


図25 B4区土坑4・12、集石15実測図（1：50）

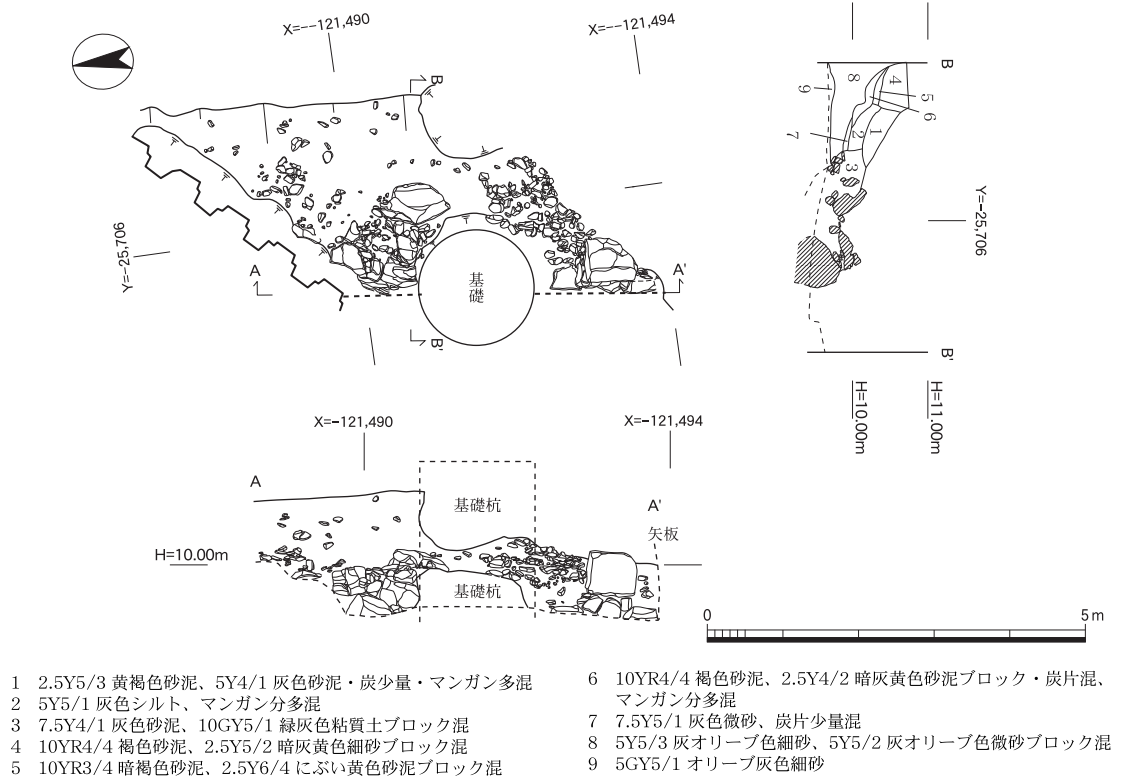
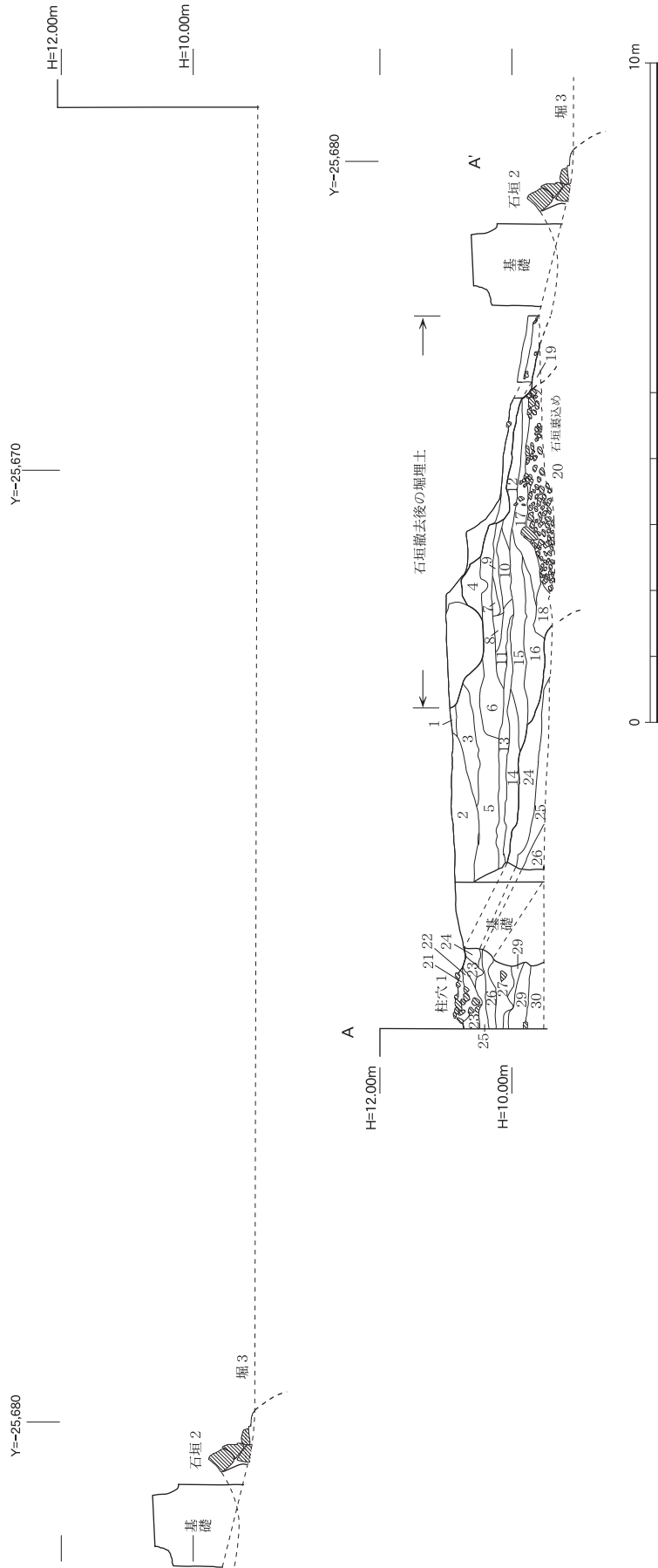


図26 B4区石垣2実測図（1：100）



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR5/6 黄褐色細砂、2.5Y6/3 にぶい黄褐色細砂混 2 10YR5/6 黄褐色細砂、10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土混 3 10YR5/6 黄褐色細砂、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混 4 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混 5 10YR3/4 暗褐色砂泥、10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥・10YR6/4 にぶい黄褐色細砂混 6 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト、微砂・10YR3/4 暗褐色砂泥・10YR5/6 黄褐色細砂混 7 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土、7.5Y4/1 灰色グラライ化粗砂混 8 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、微砂混 9 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、5YR3/6 暗赤褐色マンガン粒混 10 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂、10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混 11 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、10YR4/4 褐色シルト混 12 5Y3/2 オリープ黒色シルト、2.5Y4/4 オリープ褐色微砂混 13 10YR5/6 黄褐色細砂、10YR3/4 暗褐色砂泥少量混 14 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂、10YR3/4 暗褐色粘質土少量混 15 7.5YR4/6 褐色粗砂～微砂、10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混 16 10YR5/6 黄褐色粘質土、7.5YR4/6 褐色粗砂混、下半分グラライ化 | <ul style="list-style-type: none"> 17 2.5GY4/1 暗オリープ灰色シルト、粘質、粗砂・φ5～15cm 礫中量混 18 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、7.5YR4/6 褐色粗砂礫φ～0.5cm・7.5YR4/4 褐色粗砂混 19 10Y3/2 オリープ黒色粘質土、細砂・φ2～10cm 礫混 20 7.5Y4/2 暗オリープ褐色粘質土、細砂混 21 2.5Y4/6 オリープ褐色粘質土、φ5～15cm 礫多量混 22 10YR4/4 褐色粘質土、細砂・φ10～15cm 礫混 23 2.5Y5/3 黄褐色粘質土、微砂・φ10～15cm 礫混 24 10YR5/6 黄褐色細砂 25 10YR5/2 暗灰黄色細砂、2.5Y6/2 灰黄色粘質土・10YR3/4 暗褐色粘質土斑状混 26 2.5Y7/2 灰黄色粘質土、微砂・鉄分斑状混 27 10YR5/6 黄褐色粘質土、微砂・2.5YR5/2 暗灰黄色粘質土斑状混 28 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂、2.5Y5/2 暗灰黄色微砂混 29 2.5Y4/1 灰黄色シルト、2.5Y5/2 暗灰黄色微砂混 30 2.5Y6/2 灰黄色微砂、10YR3/4 暗褐色微砂混 31 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂、鉄分含有 |
|---|---|

図27 B5区断面図(1:100)

戻したものである。埋土からは江戸時代から明治時代の遺物が出土した。6次調査の堀10に続くものである。

第2面

土坑9・10・12・13(図25) これらは標高10.7~10.8mで検出した。土坑9は、0.5m×0.4m以上、深さ0.01m、土坑10は、3.1m以上×1.6m、深さ0.3m、土坑12は、1.5m×1.4m、深さ0.35m、土坑13は、1.5m×1.0m、深さ0.06mを測る。江戸時代前半の遺物が出土した。

集石14・15(図25) とともに、標高10.7mで検出した。集石14は0.7m×0.5m以上、集石15は0.6m×0.5mを測る。ともに、径10~20cmの石に瓦などが混入する。上部が削平され、深さは計測できなかった。建物礎石の根石と推定する。江戸時代の遺物が出土した。

(8) B5区の遺構(図27・28、 図版3)

調査区は、本丸の東側、大手門のある「東の曲輪」の南方に位置し、東の曲輪の外側の中堀、北端は東曲輪が推定された。地表面は標高約12mで、ほとんど京阪電車敷設時の盛土である。隣の6次調査を参考に、南1/3部分を掘り下げ、調査区中央部の地表下1.0mで黄褐色細砂(1・2層)などを検出した。これらの土層は淀城構築土で、その表層を覆う淀城期の整地層は削平されて残っていない。調査区南端にて柱穴1、中央南側で石垣2と堀3を検出した。その後、断割りを行い、下層遺構の確認に努めたが、工事掘削深までに下層遺構面はなかった。

柱穴1 標高10.9mで検出した。鋼矢板で削られているが、断面から直径約0.8mの円形と推定する。10~20cmの礫が多く、建物の根石と考えられる。対応する柱穴は見られなかった。

石垣2(図29、図版6) 北から20~24m地点の、標高9.7~9.2mで検出した。南北方

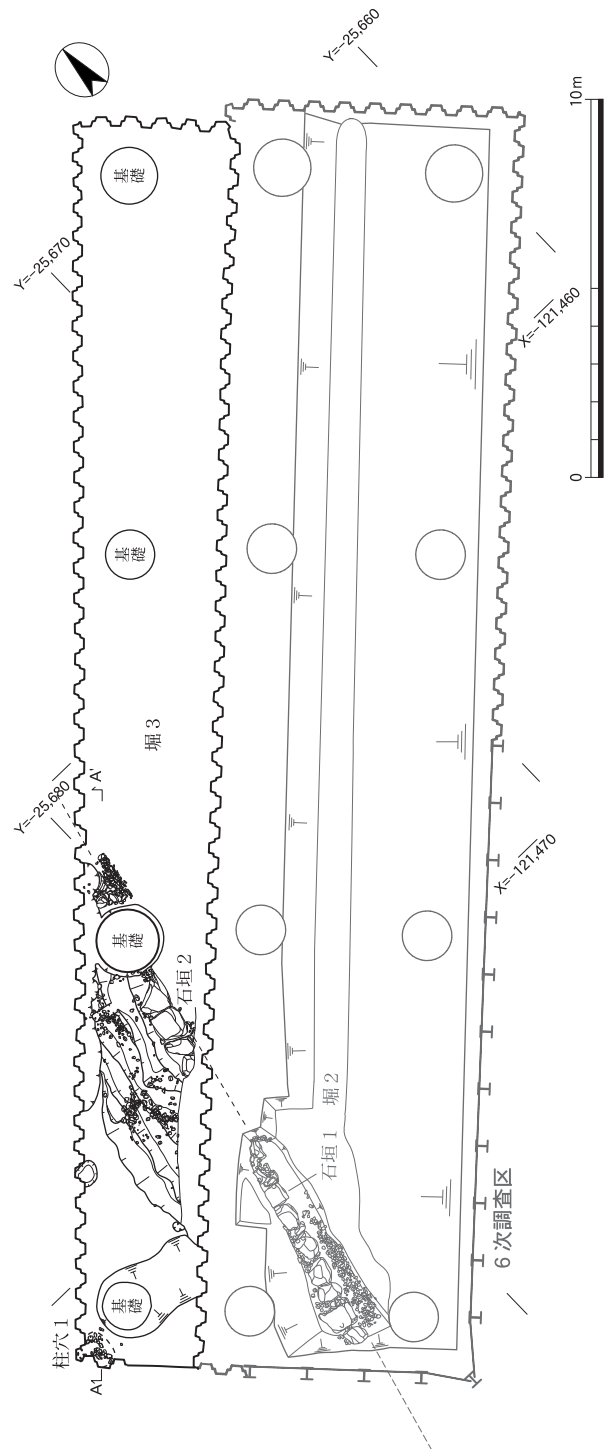


図28 B5区平面図(1:200)

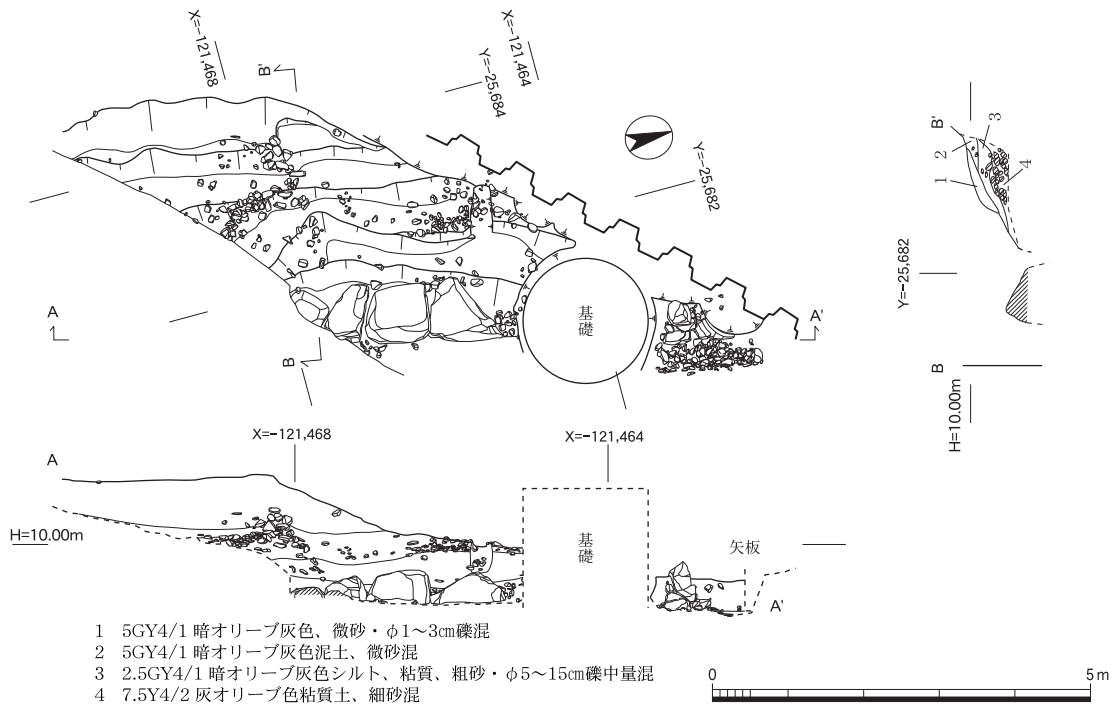


図29 B 5区石垣2実測図(1:100)

向で東面する。基礎杭で分断されていたが、東西5石、1段の石垣を、東西5.5m検出した。さらに下に石のあることを確認した。一辺0.6~1.0mの花崗岩が多い。北の調査地外に続く。この石垣2を東西方向に断ち割りして断面を観察した。6次調査の石垣1の続きである。

堀3 石垣2から北側は中堀にあたる。標高9.2mまでで堀の底面は検出できなかった。埋土から江戸時代から明治時代の遺物が出土した。6次調査の堀2の続きである。

(9) C1区の遺構(図30・31、図版3・4)

調査区は、淀城本丸の東側で内堀・大手門のある曲輪・中堀を挟んで、東曲輪に位置する。また、淀城期以前の大坂街道の街道筋に推定された。現地表面は約12.2mである。地表下0.8~0.9mのにぶい黄褐色シルト層(小礫混、固く締まる路面層)(2-1層)を第1面(標高11.4~11.3mと南西方向に低くなる)として調査した。江戸時代の地表面と考える。さらに地表下1.2~1.4m(標高11.0~10.8m)の黄褐色シルト~暗灰黄色粗砂層(3-2・3-3層)は、路面状に締まっていないが、約5m北東のC2区第2面路面の標高11.0mとほぼ同じなので、淀城築城時の整地面と考えられる。さらに、地表下1.5m(標高10.7m)の灰色シルト層(小礫混)(5層)を第2面として調査した。以下は調査の都合上、調査区の幅を狭めて、地表下1.7~1.9m(標高10.5~10.3m)の灰色シルト層(6層)を第3面として調査した。最期に断割りを入れ、地表下2.3m(標高9.9m)のオリブ黒色シルト層(7層)の第4面を確認した。遺構は、第1面の路面、石垣13、堀1、第2面の地業2、土坑3~10・12、溝11、路面14・15、第3面の路面16、土坑17、溝18、石列19~24、第4面の石列25がある。

なお、調査区の土層断面図は、第1・2面の南半が雨水の浸入により崩壊したため、石垣13の

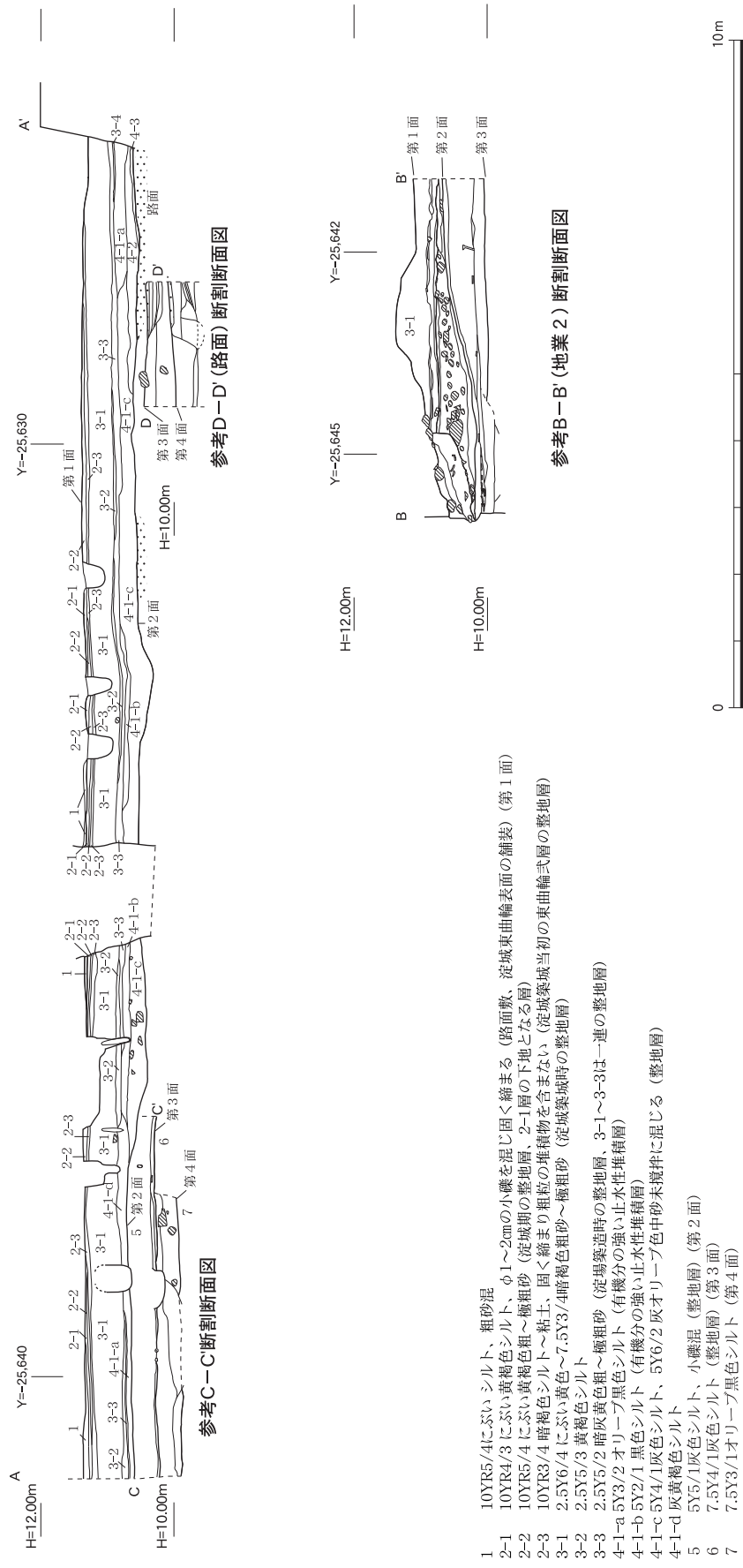


図30 C1区断面図(1:100)

- 1 10YR5/4にぶいシルト、粗砂混
- 2-1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、φ1~2mmの小礫を混じり固く締まる(路面敷、淀城東曲輪表面の舗装)(第1面)
- 2-2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗~極粗砂(淀城期の整地層、2-1層の下地となる層)
- 2-3 10YR3/4 暗褐色シルト~粘土、固く締まり粗粒の堆積物を含まない(淀城築城当時の整地層)
- 3-1 2.5Y6/4 にぶい黄色~7.5Y3/4暗褐色粗砂~極粗砂(淀城築城時の整地層)
- 3-2 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 3-3 2.5Y5/2 暗灰黄色粗~極粗砂(淀城築造時の整地層、3-1~3-3は一連の整地層)
- 4-1-a 5Y3/2 オリーブ黒色シルト(有機分の強い止水性堆積層)
- 4-1-b 5Y2/1 黒色シルト(有機分の強い止水性堆積層)
- 4-1-c 5Y4/1 灰色シルト、5Y6/2 灰オリーブ色中砂未腐拌に混じる(整地層)
- 4-1-d 灰黄褐色シルト
- 5 5Y5/1 灰色シルト、小礫混(整地層)(第2面)
- 6 7.5Y4/1 灰色シルト(整地層)(第3面)
- 7 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト(第4面)

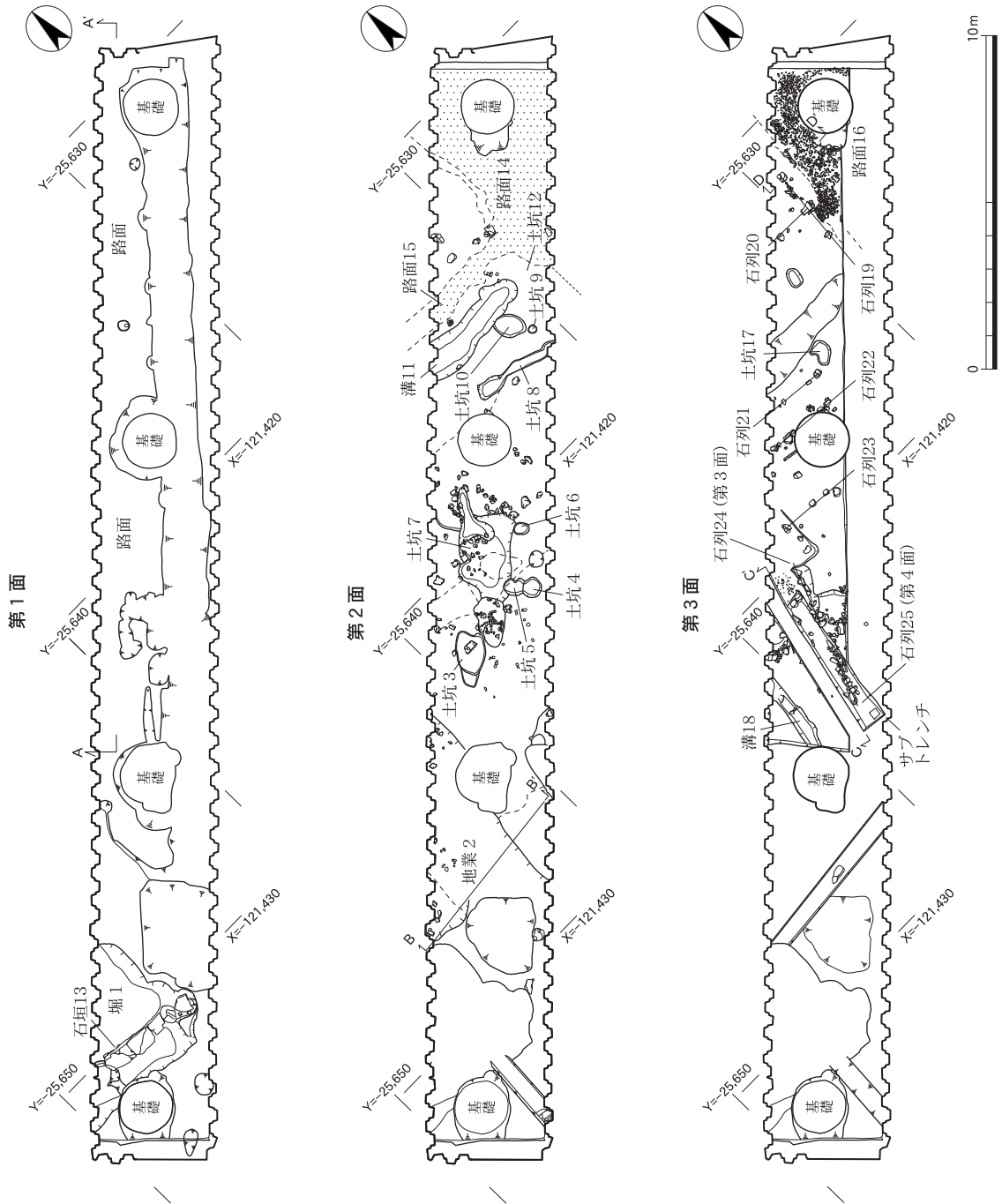


図31 C1区平面図(1:200)

断割り断面 B - B'、地業2の断割り断面 C - C' で代用している。また、第3面の平面調査後、断割り断面 D - D'、路面断割り断面 E - E' によって、下層の第4面の存在を確認して調査を終了した。

第1面

堀1 調査区南端の、標高11.2mで検出した、南北4.0m以上、東西4.5m以上、深さ1.3mの堀である。調査区外の北西方向に広がる。中堀に面した堀の一部である。東曲輪西側の中堀で、南側肩口は、東曲輪から三ノ丸方面に通じる土橋部分である。土橋側には後述する石垣13が残るが、

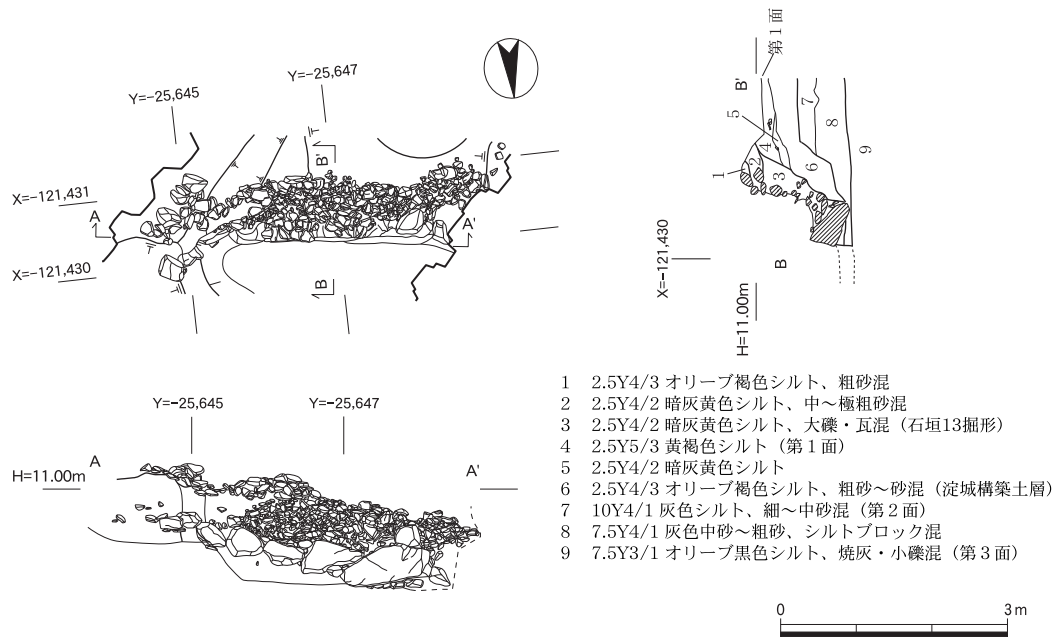


図32 C1区石垣13実測図（1：100）

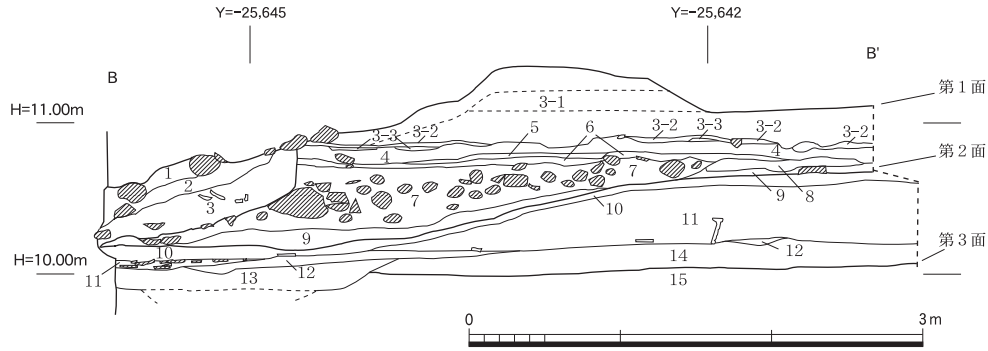
東曲輪側には石垣は残存していない。石垣は基底部の一石分のみ残存する。埋土の上層からは近代から現代の遺物が、下層からは江戸時代の遺物が出土した。

石垣13（図32、図版7）堀1西側の石垣である。地表下1.0mで検出された堀1の南肩部分には径10～50cmの石垣裏込めの栗石が多量に見られ、地表下1.9m（標高10.3m）で、石垣を東西3.3m、6石で1段分を確認した。石垣13は、標高10.9mの第1面を成立面とし、底面は灰シルト層の第3面（町屋整地層）まで達している。石垣裏込め埋土の1～3層から軒平瓦、鬼瓦が出土した。土層断面から、石垣13は造り直されたことが判明している。淀城築城時には4～6の淀城構築土を積み上げると同時に、石垣の構築が行われている。その後、淀城期にその石垣を積み直し、新たに1～3層からなる栗石を多く含む裏込め土を作り直している。裏込めからは淀城期の瓦類が出土している。残存する石垣石材は自然石で、他の調査区で見られた加工痕のある花崗岩はなかった。近代以降に取り崩されるまで、石垣13は標高11.2mの堀1肩部まで積まれていたと考えられる。

第2面

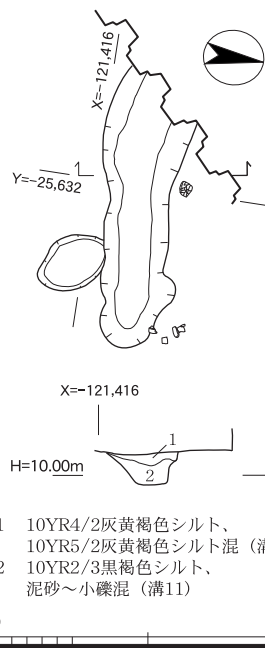
地業2（図33）堀1の北側の標高10.8mで検出した。南北6m、東西4m以上を測り、底面は4m西で標高10.2mと西方に低くなる。埋土の7層には径10～40cmの礫がぎっしり詰まる。これは、標高10.7mで成立していた第2面（町屋面）（10層）が西に低くなっていた部分をにぶい黄褐色シルト（大礫～巨礫多量混）（7層）を盛土して、標高10.8mまで高くして新たな町屋面（6～8層）を築いたものである。埋土から、平安時代から江戸時代初頭までの遺物が出土した。

土坑3～10・12 調査区北半の標高10.6m前後で検出した。土坑3は、1.4m×0.9m、深さ0.14m、土坑4は、径0.6mの円形、深さ0.09mを測る。西隣の土坑5は、0.6m×0.5m、深さ0.1m、土坑6は、0.5m×0.4m、深さ0.9m、土坑7は、3.0m×1.5mの不定形、深さ0.3m、土



- 1 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト、粗砂～極粗砂多い (石垣13掘形か)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、粗砂～極粗砂混 (石垣13掘形か)
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、大礫・瓦混 (石垣13掘形か)
- 3-1 2.5Y6/4 にぶい黄色～7.5Y3/4暗褐色粗砂～極粗砂 (淀城築城時の整地層) (第1面)
- 3-2 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 3-3 2.5Y5/2 暗灰黄色粗～極粗砂 (淀城築城時の整地層、3-1～3-3は一連の整地層)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (4-1層)
- 5 10YR4/4 褐色中砂～粗砂 (流水性、4-2層)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (町屋整地層)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、大礫～巨礫多量 (地業2埋土)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (町屋整地層)
- 9 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂～極粗砂 (流水性)
- 10 5Y4/2 灰オリーブ色シルト、固く締まる (町屋整地面)、上部は酸化し5YR4/4 にぶい赤褐色となる (第2面)
- 11 7/5Y4/1 灰色シルト
- 12 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト (止水性堆積)
- 13 10YR7/3 にぶい黄褐色粗砂、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混
- 14 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、7.5Y7/1 灰白色粗砂ブロック混
- 15 7.5Y4/1 灰色シルト (路面状) (第3面)

図33 C1区地業2断ち割り断面図(1:50)



- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト、10YR5/2 灰黄褐色シルト混 (溝11)
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト、泥砂～小礫混 (溝11)

図34 C1区溝11実測図(1:50)

坑8は、東西に細長く2.7m×0.5m、深さ0.15mを測る。土坑9は、径0.25m、深さ0.05m、土坑10は、0.95m×0.7m、深さ0.14m、土坑12は、2.5m×4.0m、深さ0.05mを測る。土坑からは江戸時代初頭までの遺物が少量出土した。

溝11(図34) 3.4m×幅1.0m、深さ0.27mを測る。南北方向の大坂街道路面14に直交する東西路面15の南側に位置することから、西方への排水用の溝とも考えられる。埋土から、江戸時代初頭までの遺物が出土した。

路面14・15(図版7) 路面14は、調査区北端の標高10.6mで検出した。南北約5m以上、東西約4m以上を測る。路面はオリーブ黒色砂礫(シルト混、径1～7cmの礫を固く敷きつめる)層で、淀城期以前の南北方向の大坂街道路面と考える。5次調査と今回のC2区調査から、調査区外の南・北方と東方に広がるのが明らかとなった。路面15は、幅0.5～0.8m、東西3.2m以上を測る。大坂街道とほぼ直交しており、町屋裏へ抜ける路地か建物内の土間敷と考えられる。

第3面

路面16(図36) 地表下1.8m(標高10.4m)で路面を検出した。灰色シルト(径5～20cmの礫が多く固く締まる)層で、南北3.5m、東西3.0mを測る。路面14と同様に、調査区外の南・北方

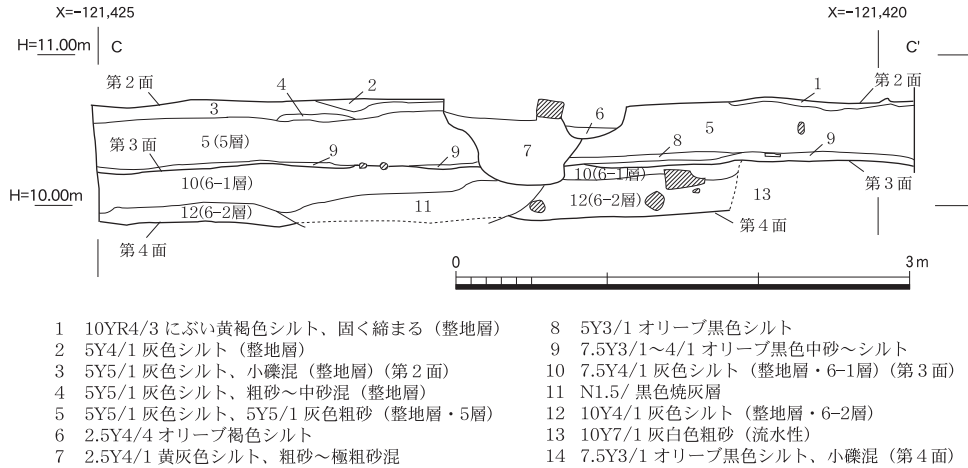


図35 C1区サブレンチ断面図(1:50)

と東方に続く。路面から西側の第3面整地層は、標高10.3mと緩やかに低くなる。

土坑17 標高10.3mで検出した。0.6m x 0.6mの不定形で、深さ0.1mを測る。遺物は出土していない。

溝18 石列より西側の標高10.2mで検出した。東西2.5m以上、幅0.4~0.5m、深さ0.25mを測る。底面は東から西に0.17m低くなる。丸瓦が出土した。

石列19~24 石列19・20は、標高約10.4mで検出した。一辺が0.2~0.35m角の川原石を並べたもので、石列19は、3石が路面14の西側に路面と平行に、間隔は1.1m、1.2mを測る。その南北軸線は北で約5度東に振れる。石列20は、石列19と直交し、1.1mの間隔を測る。石列21~23は、標高約10.3mにて検出した。一辺が0.1~0.3mの川原石並べたもので、街道沿いの石列19とほぼ直交して検出した。石列21は0.9m、石列22は1.1m、1.8m、1.7m間隔、石列23は0.5m、1.1m間隔で並ぶ。石列24は、標高10.3mで検出した縁石状の石列で、一辺0.1~0.3mの川原石列を南北約2m検出した。南北軸線は北で約20度東に振れ、下層の石列25を引き継

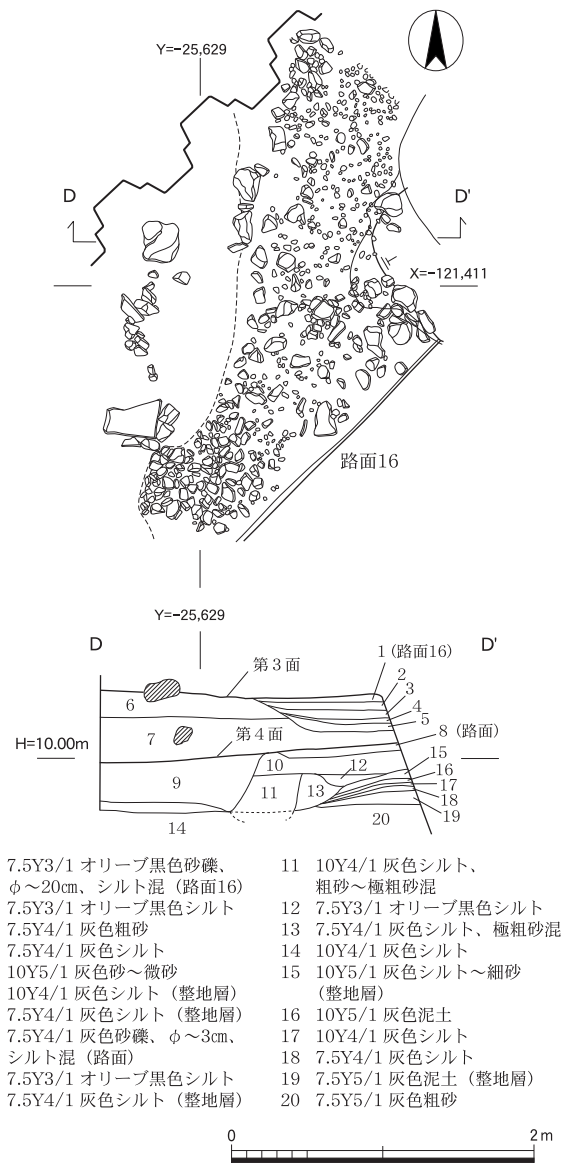


図36 C1区路面断ち割り実測図(1:50)

いでいるものと考えられる。大坂街道から約8m奥に位置し、町屋の奥壁にあたるものと考えられる。また、大坂街道から約10mの位置に溝18があり、敷地の奥行きを示すものと考えられる。これらは街道沿いの町屋建物の礎石や境界列と考えられるが、狭い面積のため、町屋建物を復元できていない。

第4面

調査区中央のサブトレンチC - C'での第4面整地層は標高9.9m、調査区北端の路面断割り断面D - D'で確認した第4面整地層は標高10.0m、北側の第4路面は標高10.1mで確認した。第4面は東の街道路面から西に向かって緩やかに低くなっていたことがわかる。整地層はオリブ黒色シルト層(小礫混)(7層)は堅く締まる町屋の最下層面で、さらに下層に続く可能性が高い。

石列25 サブトレンチ内の標高9.9mで検出した縁石状の石列で、一辺0.1~0.3mの川原石を並べる。南北約2m検出した。南北軸線は北で約20度東に振れ、第3面石列24とほぼ同方向に並ぶ。

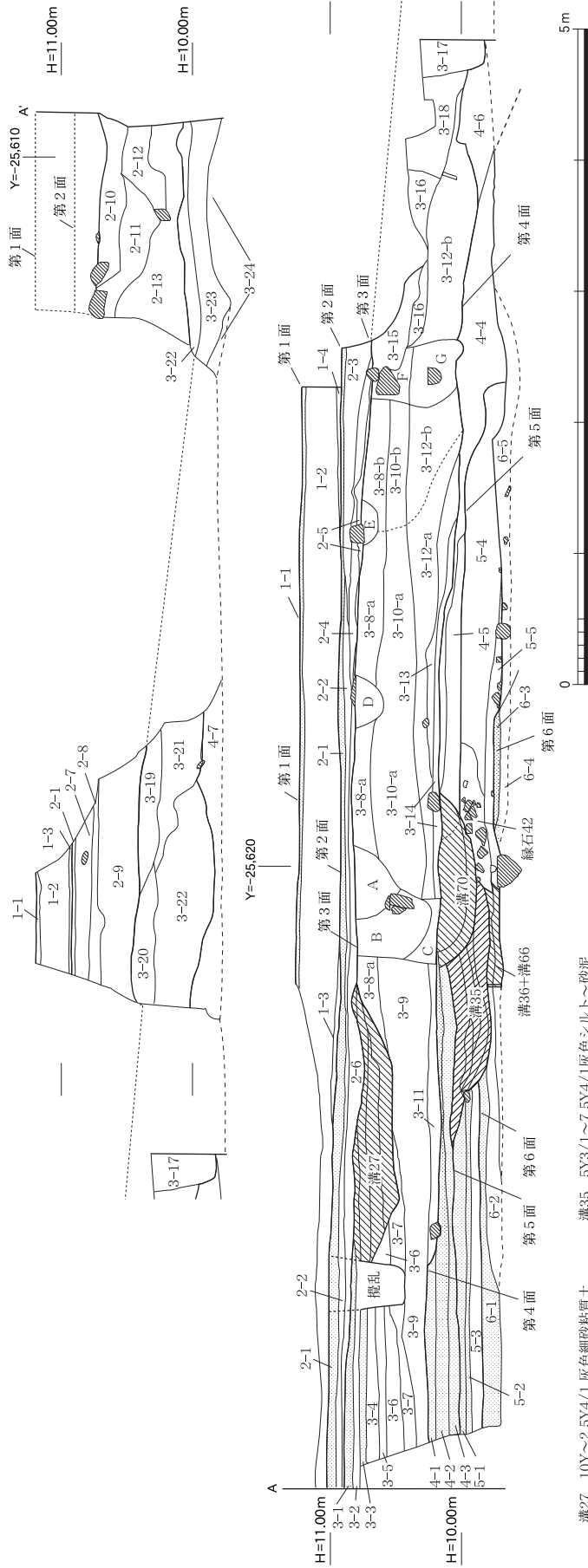
(10) C2区の遺構(図37・38、図版4・5)

調査区は、C1区と同様に淀城本丸の東側で内堀・大手門のある曲輪・中堀を挟んで、東曲輪に位置する。また、淀城期以前の大坂街道の街道筋にも推定された。現地表面は標高約12.2mである。まず、地表下約0.9m(標高11.3m)の暗褐色砂泥(固く締まる)(1-1層)を第1面として調査し、さらに地表下1.3m(標高10.9m)のにぶい黄色細砂(固く締まる)(2-2層)を検出した。これを淀城築城時の第2面とした。その下層からは真っ赤な焼土層や炭層があり、その下層の地表下1.4m(標高10.8m)の灰色シルト(粘質)(3-1、3-8層)を第3面として調査した。この面は、5次調査などから、淀城期以前の整地層と考えている。地表下2.0m(標高10.2m)のオリブ黒色シルト層(粘質)(4-4層)を第4面として、地表下2.2m(標高10.0m)の灰色シルト層(粘質)などの(5-1~5-4層)を第5面として、地表下2.4m(標高9.8m)のオリブ黒色シルト層(粗砂・炭混)などの(6-1~6-3層)を第6面として調査した。遺構は、江戸時代後半の第1路面、集石1、土坑2、江戸時代前半の第2路面、土坑3、石垣4、江戸時代初頭の第3面の石列5、柱穴6~26・28、溝27、路面31、第4面の礎石54~56、溝70、路面69、第5面の柱穴30・32・61、縁石42、溝35、路面34、桃山時代末期の第6面の溝36・64・66、路面63、小径67、空閑地68、落込み62などがある。工事深度の制約で、それ以下の層は調査できていない。

第1面

淀城構築土である明黄褐色粗砂(1-2層)の上面に、路面状の小礫敷がある。淀城期の大手門前の路面の標高を示すものである。

路面 調査区全体に攪乱が大きくあるが、調査区全体の19m×3mの範囲の地表下約0.9m(標高11.3m)で検出した。南西から北東に少し低くなる暗褐色砂泥層が固く締まっており、上面には黄灰色砂層が薄くある。大手門に通じる空閑地と考える。現在の地形と異なり北東方向の堀に向かって低くなっていたことが判明した。



- 1-1 10YR3/4 暗褐色砂泥、固く締まる (第1面踏面)
- 1-2 10YR6/6 明黄褐色粗砂
- 1-3 10YR6/4 にぶい黄褐色
- 1-4 7.5Y6/1 灰色粗砂
- 2-1 2.5Y6/3 にぶい黄褐色、固く締まる (第2面踏面)
- 2-2 7.5YR4/4 褐色砂、上面は固く締まる
- 2-3 10YR4/4 褐色砂、粘土粒アロップ混
- 2-4 5YR5/6 明赤褐色砂泥 (焼土層、建物焼失後の整地層)
- 2-5 黒色炭腐 (建物焼失後の整地層)
- 2-6 5Y5/1 灰色シルト
- 2-7 2.5Y6/3 にぶい黄褐色、褐色粗砂、固く締まる
- 2-8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、細砂混
- 2-9 2.5Y6/4 にぶい黄褐色細砂、微砂
- 2-10 10YR3/4 暗褐色微砂粘質、遺物・礫混
- 2-11 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、炭・遺物含む
- 2-12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、粘質、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混
- 2-13 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、粘質、固く締まる (第3面踏面)
- 3-1 5Y4/1 灰色シルト、粘質、固く締まる (第3面踏面)
- 3-2 10YR3/4 暗褐色粗砂、φ<3cm
- 3-3 10YR4/2 灰黄褐色細砂~微砂、固く締まる (第3面踏面)
- 3-4 5Y4/1 灰色細砂、φ1~3cm 礫少量混
- 3-5 10Y4/1 灰色粗砂、φ<2cm 礫混、泥砂混
- 3-6 5Y4/1 灰色粗砂、φ3cm、砂泥混
- 3-7 5Y4/1 灰色シルト、粘質
- 3-8 10Y4/1 灰色粗砂、φ<1cm 礫少量混
- 3-8a 10Y4/1 灰色シルト、粘質、微砂混、シルト混
- 3-8b 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 (第3面整地層)
- 3-9 5Y4/1 灰色シルト、粗砂礫~2cm混
- 3-10a 2.5Y4/1 暗オリーブ灰色シルト、粘質
- 3-10b 10YR3/3 暗褐色粘土
- 3-11 10Y4/1 灰色粗砂
- 3-12a 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、粘質
- 3-12b 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、微砂多量混
- 3-13 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 3-14 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂
- 3-15 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土、炭、焼け壁土多い
- 3-16 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、粘質、焼土、炭混
- 3-17 10YR4/4 にぶい黄褐色微砂粘質、10YR 黒褐色シルト混
- 3-18 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土、炭、焼土多量混、2.5Y3/1 黒褐色シルト粘質、炭混
- 3-19 10YR4/2 灰黄褐色微砂粘質、遺物・焼土、炭混
- 3-20 2.5Y5/3 黄褐色シルト粘質、遺物混
- 3-21 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト粘質、焼土、遺物・小礫混
- 3-22 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
- 3-23 10YR3/3 暗褐色粘土粘質、炭、焼土少量混
- 3-24 5Y4/1 灰色粘土粘質、炭、土器、焼土少量混
- 4-1 7.5Y4/1 灰色粗砂、φ3cm (第4面踏面)
- 4-2 7.5Y4/1 灰色粗砂、φ1~5cm 多量、固く締まる (第4面踏面)
- 4-3 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂礫、φ0.5~3cm、固く締まる (第4面踏面)
- 4-4 7.5Y3/1 オリーブ黒シルト粘質、整地層上面は2.5Y3/2 黒褐色シルト粘質、固く締まる (第4面整地層)
- 4-5 5Y3/1 オリーブ黒砂泥、粘質、炭混
- 4-6 10YR4/1 灰色粘土、炭、焼土少量混
- 4-7 7.5Y2/1 オリーブ黒色砂泥、粗砂礫~0.5cm
- 5-1 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粗砂多、固く締まる (第5面踏面)
- 5-2 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粗砂礫φ1~3cm混、固く締まる (第5面踏面)
- 5-3 10Y3/2 オリーブ黒色砂泥、粘質 (踏面基盤層)
- 5-4 7.5Y4/1 灰色シルト、粘質 (第5面整地層)
- 5-5 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、粘質
- 6-1 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粘質、粗砂多量混 (第6面踏面)
- 6-2 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
- 6-3 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粗砂・炭少量混、表面固く締まる (第6面整地層) (空欄地68)
- 6-4 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、粗砂多量混
- 6-5 10Y4/1 灰色シルト、粘質、粗砂礫~0.5cm、炭、焼土少量混
- A 7.5Y5/1 灰色シルト、粘質、礫~1cm 少量混
- B 10Y4/1 灰色シルト、粘質、礫~3cm 少量混 (柱六11)
- C 5Y2/1 灰色シルト、粘質、礫~1cm 少量混
- D 7.5Y4/1 灰色シルト、粘質 (柱六8)
- E 10Y4/3 にぶい黄褐色粘土 (柱六8)
- F 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、微砂混 (石列5)
- G 10YR4/2 灰黄褐色シルト、粘質、2.5Y4/1 黄灰色粗砂礫~1cm混

図37 C2区断面図(1:50)

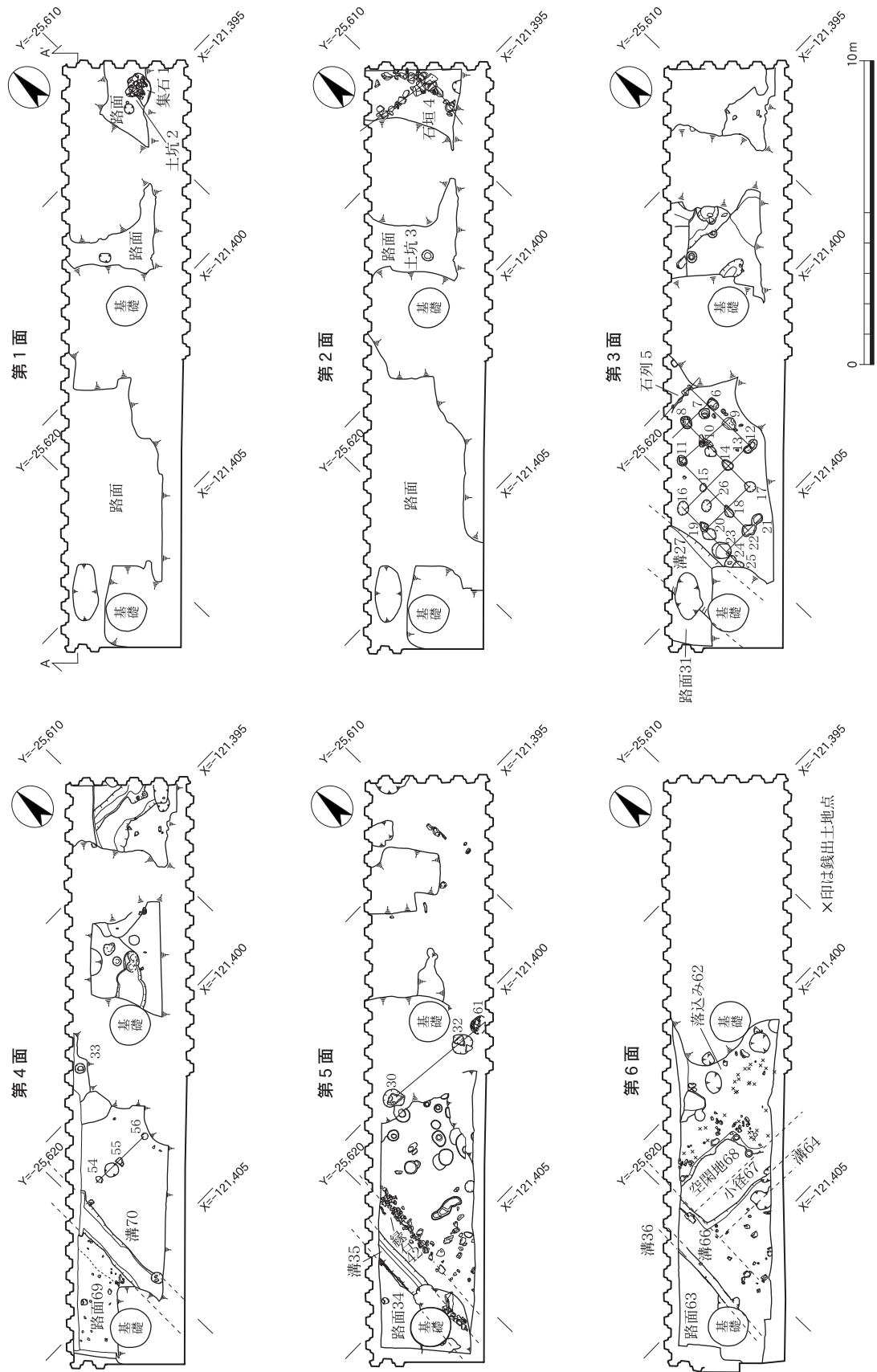


图38 C2区平面图(1:200)

集石 1 0.8m×0.5m、深さ0.2m、径0.1～0.2mの石が詰まっていた。礎石の下の根石状である。

土坑 2 集石 1 に隣接する。径0.3mの半円形である。この 2 つの遺構は空閑地であるはずの道路内に位置しており、性格は不明である。

第 2 面

地表下約1.2～1.3m（標高11.0～10.9m）で検出した。南西から北東にやや低くなるにぶい黄色細砂層が固く締まっており、上面にはにぶい黄橙色粗砂層が一部薄くある。この面は、第 3 面となる淀城以前の遺構面の上に焼土層・焼土炭層（2-3・2-4 層）を整地しており、既存建物を焼却・撤去して淀城を築城した可能性がある。

土坑 3 径0.35m、深さ0.4mを測る。周囲が攪乱され、関連する遺構は検出されなかった。遺物も出土していない。

石垣 4 地表下1.3～1.5m（標高10.9～10.7m）で検出し、南北1.5m、東西2.0mで、直角に曲がっている。石材は、一辺0.2～0.4mの花崗岩が多い。また、鋼矢板沿いは、工事に伴い動いているようである。

第 3 面

第 4 面から0.5～0.6mの盛土・整地して、建物が建てられている。路面は補修されて、0.1m高くなっている。淀城築城直前の江戸時代初頭に、淀が再び栄えてきた頃に相当すると考えられる。出土遺物も多くみられた。

路面 31 地表下1.4mで検出した第 3 面は標高10.8～10.7mと東側に低くなる。対応する路面は、基礎杭で攪乱されていたが、南北 2 m、東西 1 m 検出した。路面層は標高10.9mの灰色シルト（粘質、上面に瓦多、固く締まる）と10.8mの灰黄褐色細砂～微砂（固く締まる）の 2 面あり、補修されていることがわかった。北・南・西方の調査区外に続く。

溝 27 標高10.8mで検出した。杭基礎で攪乱され、幅1.8m、深さ0.3m、南北約 2 m 検出した。灰色細砂・粘質土・粗砂などの埋土から、室町時代までの遺物が混入して出土した。

石列 5（図 39）道路面から東方向に低くなり、調査区中央部の地表下1.6m（標高10.6m）で検出した東西方向の石列で、一辺0.2～0.4mの石を約 1 m 検出した。西側は調査区外に延び、東側は基礎工事の攪乱で削平されている。南北方向の路面・溝とほぼ直交するので、町屋の区画を示すものとする。

柱穴 6～26・28（図 39）標高10.8mで検出した柱穴群で、直径0.3～0.6m、深さ0.2～0.4mを測る。柱穴列は石列 5 と同様に、溝と直交する東西・平行する南北方向に並ぶ。間隔は約 1 m 間隔で町屋建物跡と考える。その南北軸線は北で約 3 度東に傾く。柱穴 6～14・18・19・28は一辺0.2～0.4mの礎石・根石が残り、堀掘形内部には、石の底面や周囲に石を安定させるための粗砂礫が詰められている。粗砂礫は直径0.5cmまでで、柱穴15～17・20～26は石は抜き取られ、掘形内に粗砂礫が残る。重複している部分があり、作り替えがあるようである。埋土からは、少量の平安時代から室町時代の遺物が出土している。

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色泥土、10YR4/3にぶい黄褐色砂泥混
- 2 5Y4/2 灰オリブ色砂泥
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、微砂・φ5~10cm礫多量混
- 4 10YR3/4 褐色粘土
- 5 7.5Y4/1 灰色粘土
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、微砂混
- 7 10YR3/2 黒褐色砂泥、粘質、微砂混
- 8 2.5Y4/1~4/2 黄灰~暗黄灰色粗砂、φ~0.5cm礫混
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土、10YR4/1褐色砂泥混
- 10 2.5Y4/1 黄灰色粗砂礫、φ~0.5cm
- 11 10YR4/2 灰黄褐色粗砂、φ~1cm礫混
- 12 5Y4/1 灰色粗砂礫、φ~0.5cm
- 13 10YR4/2 灰黄褐色粗砂礫、φ~0.5cm
- 14 5Y4/1 灰色粘土
- 15 2.5Y5/3 黄褐色礫、φ2~5cm
- 16 10YR4/1 灰色粗砂
- 17 10YR3/1 黒褐色砂泥、7.5Y4/1灰色砂泥ブロック混
- 18 10YR4/2 灰黄褐色粗砂、φ~0.5cm礫混
- 19 7/5Y4/1 灰色シルト、粘質
- 20 7.5Y4/1 灰色粗砂礫、φ~1cm
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂、φ~0.5cm礫混
- 22 7.5Y3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土・焼壁土多量混
- 23 2/5Y5/3 黄褐色細砂、粘質、焼土混
- 24 10YR4/4 褐色砂泥
- 25 2.5Y5/3 黄褐色泥砂、シルト混)

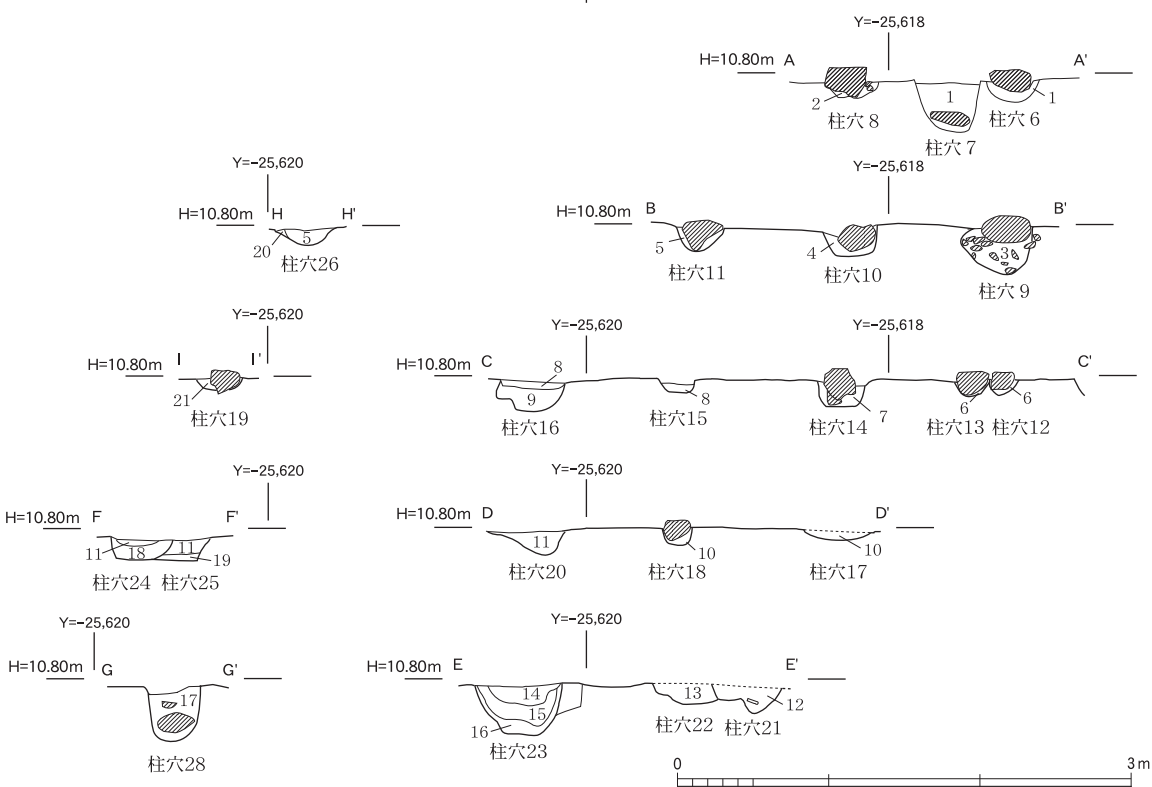
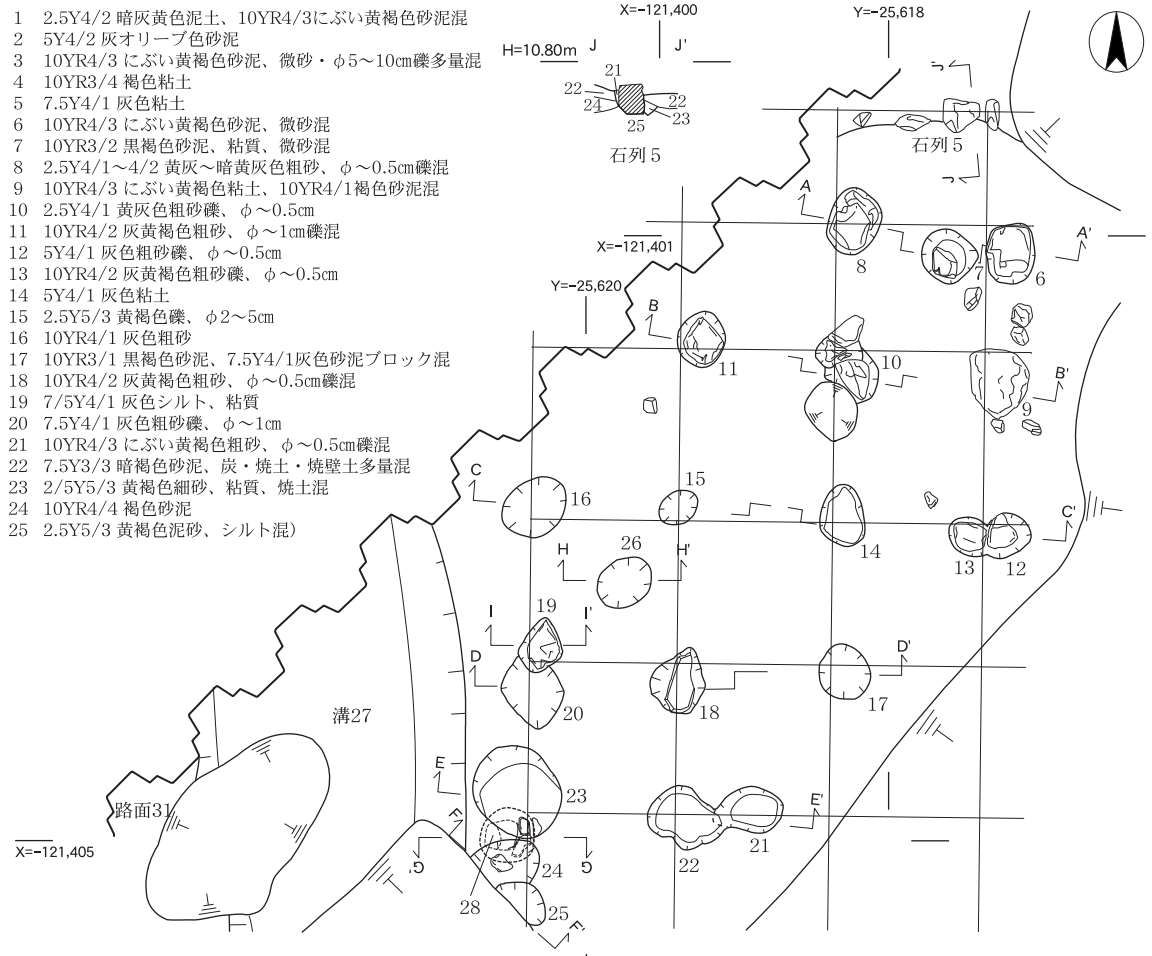


図39 C 2区石列5、柱穴6~26・28実測図(1:50)

第4面

第5面から約0.2m盛土している。しかし、町屋には柱穴が少ない。

路面69(図版8) 地表下1.95m(標高10.25m)以下で検出した路面層で、灰色粗砂礫(1~5cm。固く締まる。)(4-1・2・3層)の路面で、第4面整地層(4-4層)に伴うものである。南北2.5m以上、東西2.2m以上を測る。北・南・西方の調査区外に続く。断面観察から3回補修され、溝70も掘り直されていることが判明した。

溝70(図版8) 標高10.2mで、路面69の東側で検出した。南北3.7m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。北・南方の調査区外に続く。断面観察から、路面69に伴い掘り直されていることが判明した。遺物は出土していない。

礎石54~56(図40) 標高10.2mで検出した一辺0.2~0.3mの石列である。間隔は1.0~1.1m。その軸線は、南北溝70とほぼ直交する。南側には礎石がなく、3m北側の柱穴33とで建物を考えられるが、町屋の敷地境界石とも考えられる。

第5面

第6面から約0.2~0.3m盛土している。その盛土から犬形土製品・釘・刀子・角絞棘などが出土している。縁石・側溝がしっかり築かれている。

路面34(図版8) 地表下2.2m(標高10.0m)で検出した。南北2.0m、東西1.7m、北・南・西方の調査区外に続く。オリブ黒色砂泥(粗砂多い。固く締まる。)(5-1・2層)などで作り替えがある。

溝35(図版8) 基礎杭で攪乱されていたが、路面34の東側で、南北2.3m、幅0.6m、深さ0.3mの規模で検出した。路面34との境界には木製の土留めがある。北・南の調査区外に続く。路面に伴い作り替えがあり、灰色シルト(微砂混)~砂泥の埋土からは、桃山時代末期までの遺物が出土した。

縁石42(図版8) 溝35の東側に、南北2.5m、幅0.5mで検出した。一辺0.1~0.2mの石や瓦が密集して、町屋側の標高とほぼ同一の高さで検出した。側溝に対する町屋整地層の護岸とも考えられる。

柱穴30・32・61(図41) 第5面は西の路面から東側に向かって低くなる。道路近くには小穴・柱穴が数個あるが、復元できていない。調査区中央の地表下2.4m(標高9.8m)で、ほぼ東西に並ぶ柱穴30・32・61を検出した。柱穴30・32は掘形径約0.6m、深さ0.3mを測り、間隔は約3m。掘形内には~1cmの粗砂礫を詰め、その上に一辺0.4~0.6mの礎石がある。柱穴61は、

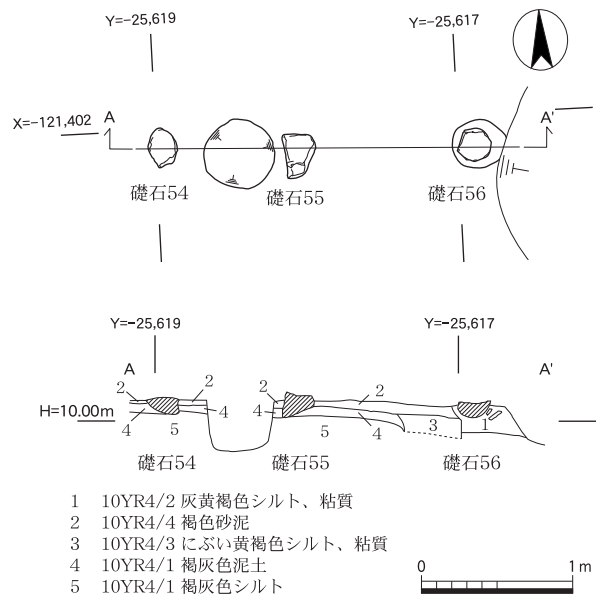


図40 C2区礎石54~56実測図(1:50)

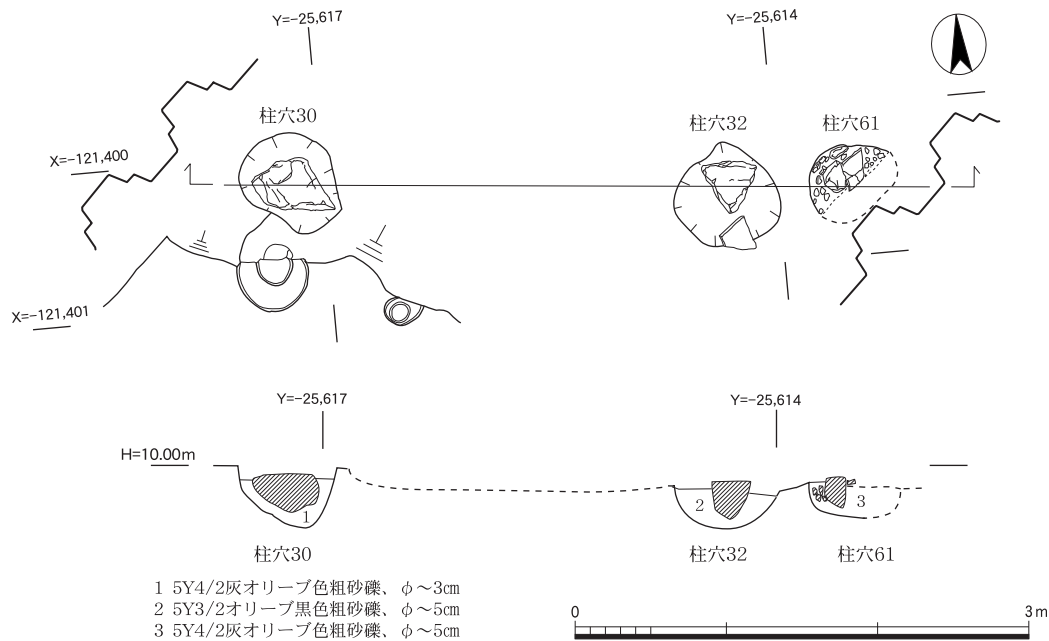


図41 C2区柱穴30・32・61実測図(1:50)

柱穴32の東0.6mで検出した。桃山時代の焼締陶器が出土した。この柱穴列から北側は、基礎杭工事で攪乱されている。

第6面

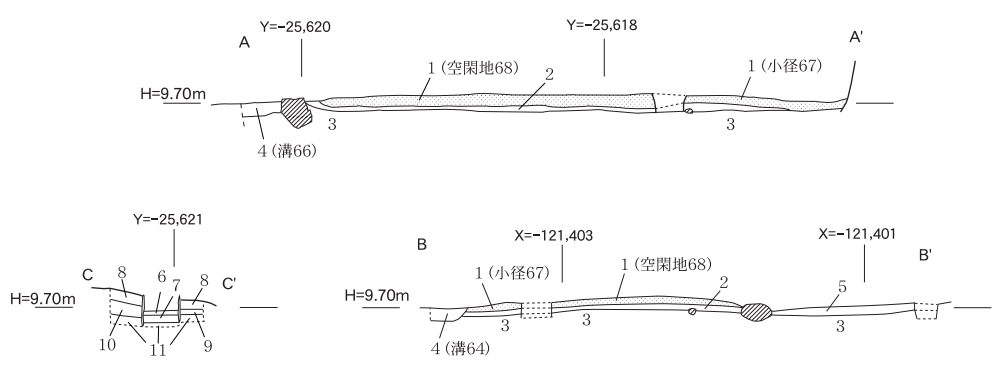
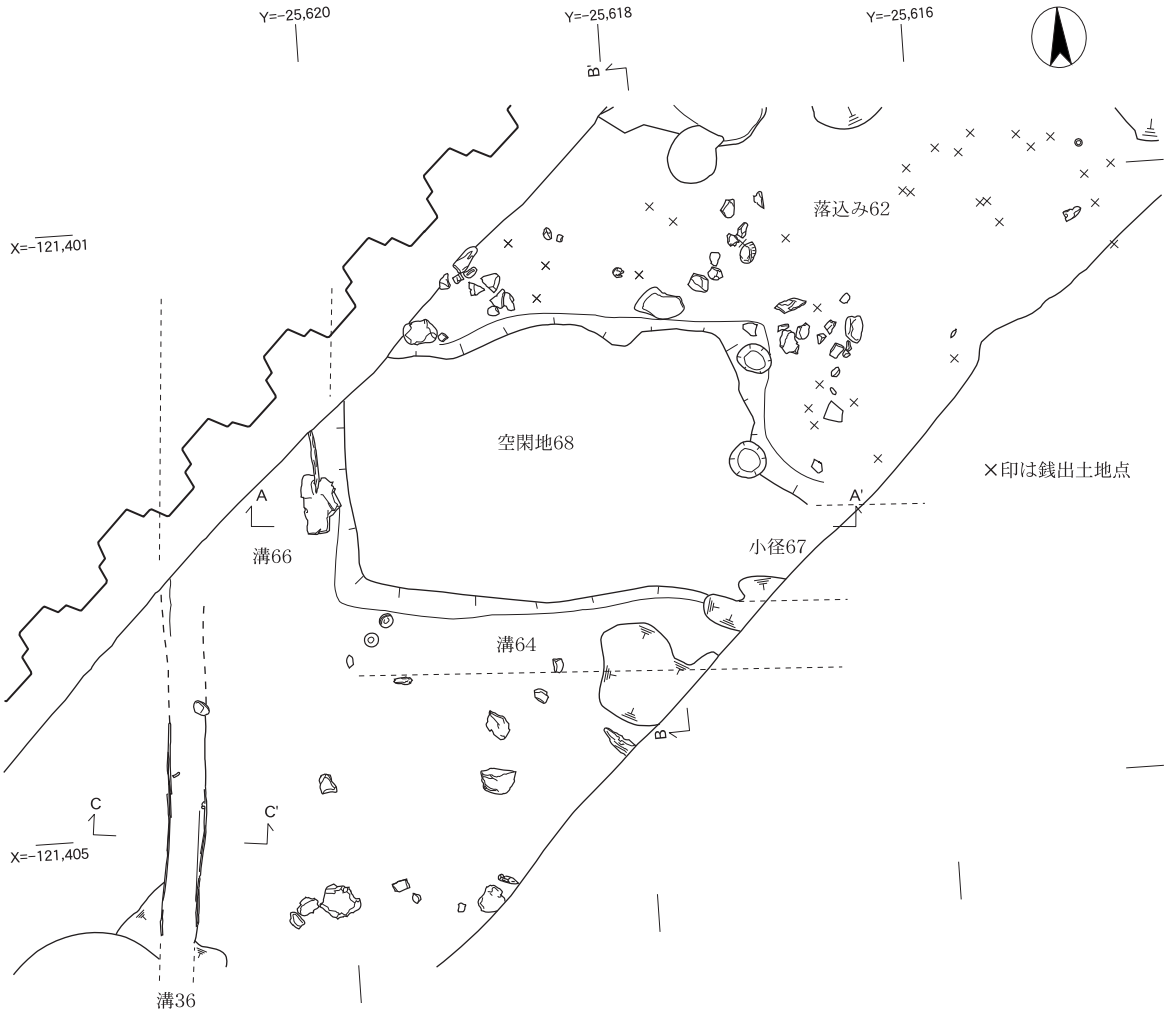
大坂街道から溝を隔てて、溝と湿地に囲まれた部分を整地して空地を形成している。

路面63(図版8) 地表下2.4m(標高9.8m)で検出した。南北4.0m、東西2.0mを測り、北・南・西の調査区外に続く。構築土はオリブ黒色砂泥層(粗砂混)である。

溝36・64・66(図版8) 路面63の東側に溝36・66を検出した。溝66は、標高9.8mで検出した。南北4.5m、幅0.9m、深さ0.05mを測り、北・南方の調査区外に続く。埋土は灰黄色粗砂とオリブ黒色砂泥で大変軟質な土層で、東側の溝64などとの境界が不明である。この溝66と路面63との間に、溝36を検出した。南北1.4m、幅0.2m、深さ0.15mを検出した。北方には設置されていなかったようである。溝の両壁には木材が擁壁となり、長さ0.6~0.9m、幅13cm、厚さ0.5~1.0cmの板材を、溝幅の0.2mの溝の両側におき、内側を径1cmほどの細い杭を打って支える構造になっていた。埋土の灰色シルト・粗砂層からは桃山時代末期の土師器、瓦器、天目椀のミニチュアが出土した。溝64は溝66と直交する。幅0.3mで東西1mほど確認できた。

小径67 南北溝66の東側、東西溝64の北側で検出した東西方向の小径で、幅0.6m、東西3.5m検出した。オリブ黒色シルト層(粗砂・炭混、表面は固く締まる)で、空地68に取り付く。

空地68・落込み62(図42、図版8) 空地68は標高9.75mで、南北1.2m×東西2.7mの長方形の平坦面を形成する。オリブ黒色砂泥(混礫 ~3cm、表面は固く締まる)(6-3層)で、小径67と一体化している。西端の溝66内に0.2m×0.4mの礎石状の石があり、大坂街道から空地にわたる橋脚の基礎とも考えられる。この角地の北・東方は落込み62で、北東方向に広がる湿地状堆積である。埋土は、灰色シルト層(粘質、粗砂礫 ~0.5cm・炭・焼土混)(6-5層)で、



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、φ~3cm礫混
(空地68・小径67) 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、φ1~3cm粗砂礫混 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、粗砂混 4 10Y4/1 灰色シルト、粘質 (溝64・溝66) 5 10Y3/1 オリーブ黒色シルト、炭・小礫混 | <ul style="list-style-type: none"> 6 10YR4/1 灰色シルト、粗砂混 (溝36) 7 7.5Y4/1 灰色粗砂、シルト混 (溝36) 8 5Y4/1 灰色粗砂、シルト混、固く締まる 9 10Y4/1 灰色シルト、粘質 10 7.5Y4/1 灰色粗砂、シルト混 11 10Y4/1 灰色シルト、粗砂混 |
|---|---|



図42 C2区空地68実測図(1:50)

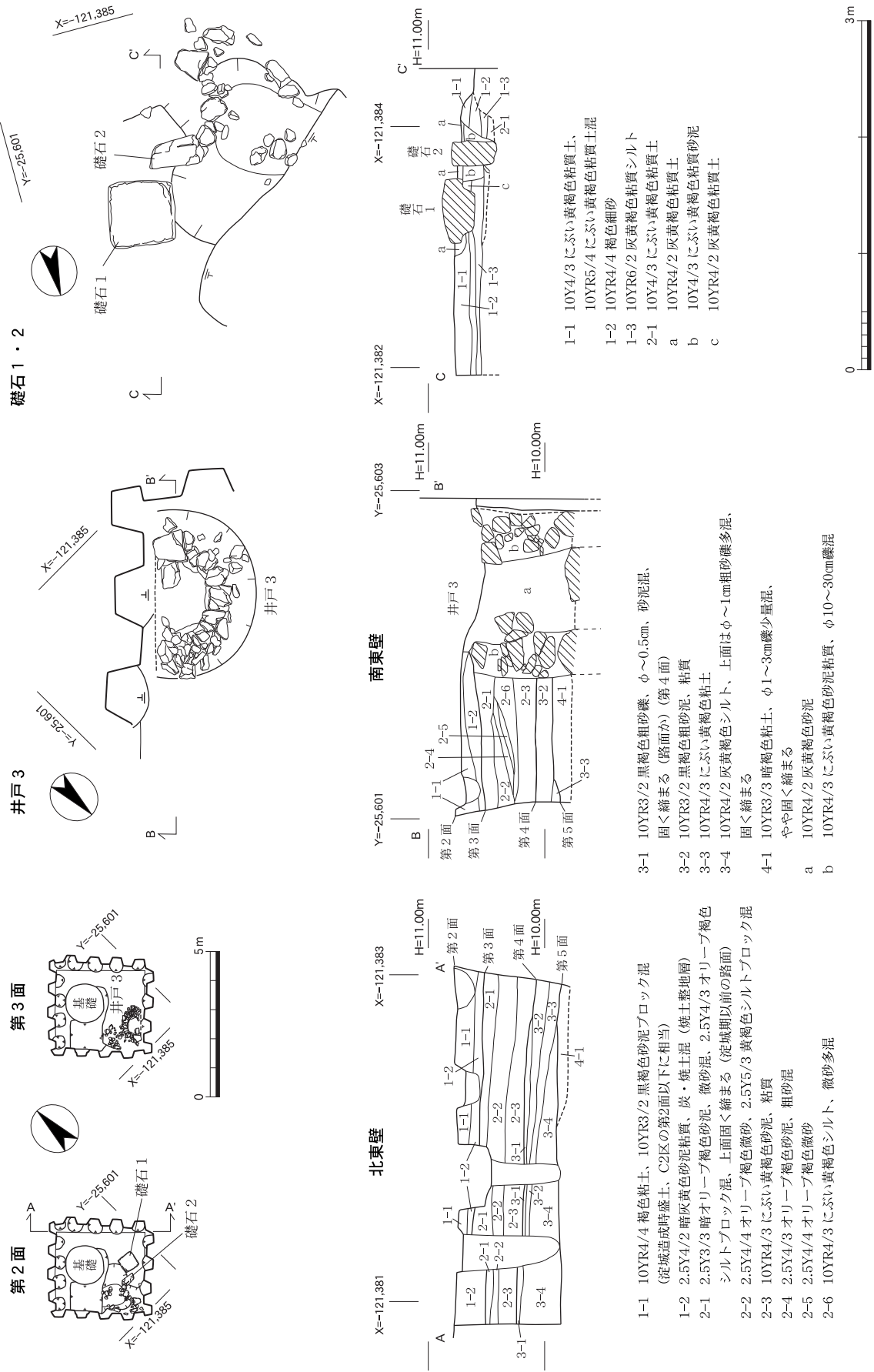


図43 Cs 2 区測図 (1 : 200、1 : 50)

工事掘削深度の関係で底面は確認できなかったが、少なくとも標高9.6mまでは堆積土である。この落込みから、桃山時代末期の土師器皿や水滴とともに、46枚の北宋銭などが出土した。また、第6面の遺構面を検出中、溝64上面で桃山時代末期の土師器皿が完形で出土した。これらのことから、桃山時代末期には、空閑地68には祠のような信仰施設があり、出土した銭は裏銭の一部ではないかと考える。

(11) Cs 2 区の遺構 (図43、図版 5)

C 2 区とC 3 区間の3 m × 3 mの調査区である。立会調査の予定であったが、基礎杭以外の遺構残存状況が良好であり、2面調査した。現地表は標高約12.5mである。第1面は削平されていて不明である。C 2 区と面を一致させて、地表下1.7m (標高10.8m) の褐色粘土層 (1-1 層) を、江戸時代前期の第2面として調査し、焼土整地層の下の標高10.5mの暗オリーブ褐色砂泥 (微砂混、上面固く締まる) (2-1 層) を淀城期以前の第3面として調査した。断面調査から、標高10.2mの黒褐色粗砂礫層 (0.5cm、固く締まる) (3-1 層) を第4面、標高9.9mの暗褐色粘土層 (混礫 1 ~ 3 cm、やや固く締まる) (4-1 層) を第5面とした。第2面で礎石 1・2、第3面で井戸 3 を検出した。

第2面

礎石 1 (図43) 標高10.9mで検出した花崗岩で、0.55m × 0.55m、厚さ0.3mを測る。掘り上げてみると多重石塔の石材の屋根一層を裏返し礎石として使用していたことが判明した。

礎石 2 (図43) 標高10.8mで検出した花崗岩で、0.4m × 0.2m、高さ0.4mを測る。礎石 1 と近接している。

第3面

井戸 3 (図43) 淀城期以前の焼土層に埋められた井戸を標高10.6mで検出した。円形、石積みみの井戸で、内径0.7m、深さ約1mまで確認した。径0.1 ~ 0.4mの石を積み上げている。掘形は径1.5mである。井戸埋土は灰黄褐色砂泥層で、平安時代から室町時代の土師器、須恵器、瓦器、青磁、焼締陶器、施釉陶器、瓦、壁土が出土した。淀城造成時に埋められたものと考えられる。

(12) C 3 区の遺構 (図44・45、図版 5)

全長約13mの調査区で、南西側の地表面は標高12.4m、北東側は12.6mと高くなっている。復元図から、ほぼ、堀の中と考えられ、長軸方向に断ち割り、北西壁断面の観察を行った。その結果、北西壁断面は全て堀埋土であることが判明した。南西壁断面の地表下1.1m (標高11.3m) のオリーブ褐色砂泥層 (混礫 7 ~ 20cm多量混) (1-1 層)、灰黄褐色砂泥 (1-2 層) にぶい黄褐色砂泥粘質 (1-3 層)、褐色粘土層 (1-4 層) などが標高10.0mまで残存していた。これらは淀城構築土層で、礫の多い土層は石垣裏込めの可能性が高く、ここから北側に石垣があったものと考えられるが、確認できなかった。

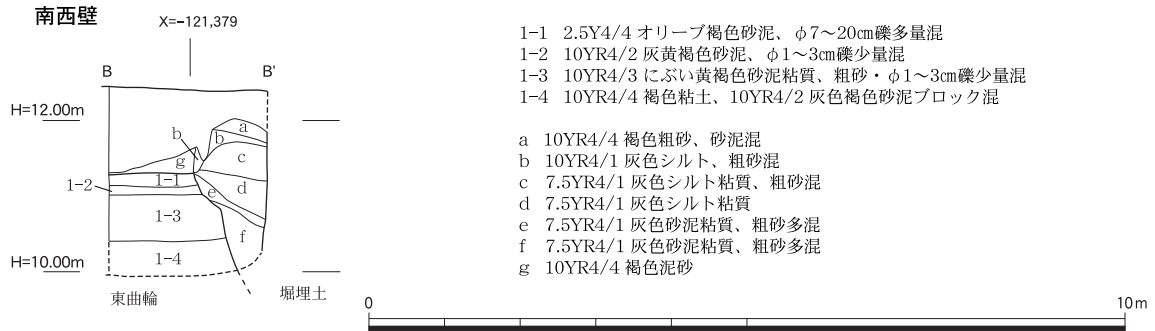
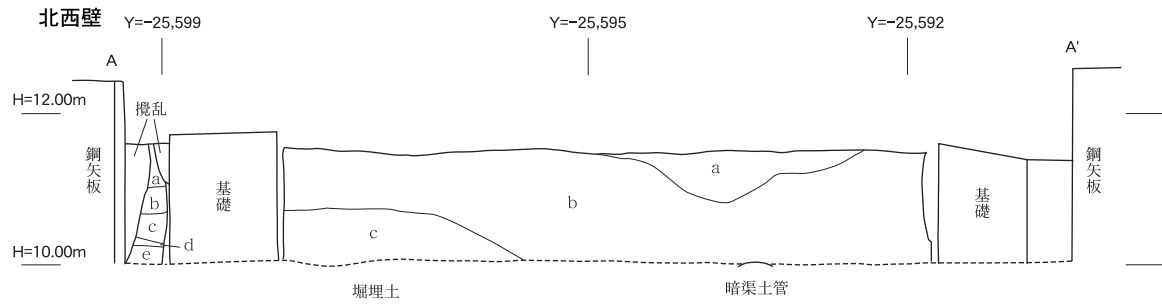


図44 C3区断面図(1:100)

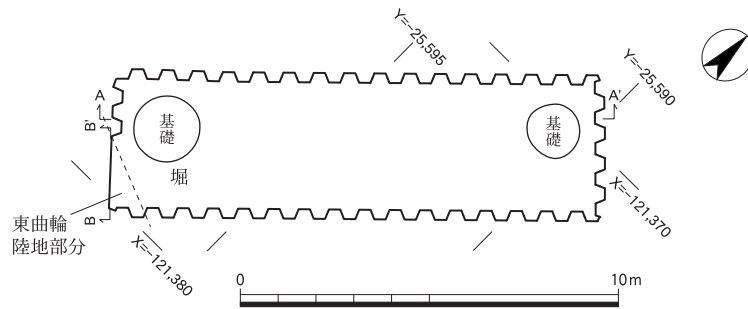


図45 C3区平面図(1:200)

3. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は整理箱に87箱出土した。内訳は土器類、瓦類、金属製品、骨製品、木製品、土製品、石製品がある。土器類には、土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、染付、輸入磁器がある。出土遺物は江戸時代の土器類、瓦類が多く出土した。残りは、堀の埋土や京阪電車敷設時の盛土から明治期以降の陶磁器類などが出土した。平安時代から中世の遺物は、C1・C2・Cs2区の淀城期以前の層に混入して出土し、その他に、淀城造成時の客土などから少量出土した。平安時代から中世の遺物には、土師器皿、須恵器、瓦器椀、輸入青磁、瓦類などがある。以下にこれらの遺物について概説する。

(2) 土器類

土器類は江戸時代の国産陶磁器が中心で、とくに唐津の皿・椀が多くを占める。土師器は少量であるが、平安時代や中世の皿が混入として出土している。ここでは各区ごとに出土した土器を記述する。

A1区出土土器

京阪線盛土の中より、江戸時代以降の土師器皿、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦、木製品などが出土した。淀城造成時の堤状盛土からは平安時代から中世の土師器や須恵器、瓦器小片が出土した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～室町時代	土師器、緑釉陶器、須恵器、黒色土器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、銭貨、木製品		土師器22点、瓦器8点、銭貨38点、木製品1点	3箱	0箱
桃山時代～江戸時代初頭	土師器、瓦器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、角鮫棘、木製品、土製品、石製品、石造物		土師器10点、瓦器1点、瓦質土器2点、施釉陶器29点、輸入陶磁器2点、瓦類14点、金属製品9点、角鮫棘2点、木製品4点、土製品6点、石製品1点、石造物1点	26箱	7箱
江戸時代	土師器、土師質土器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、金属製品、銭貨、木製品、土製品、石製品、石造物		土師器11点、土師質土器2点、瓦質土器1点、施釉陶器19点、焼締陶器4点、磁器8点、瓦類13点、金属製品1点、銭貨1点、木製品1点、土製品1点、石製品2点、石造物2点	41箱	10箱
合計		102箱	216点(15箱)	70箱	17箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。京阪電気鉄道株式会社が保管する大型の石造品は、上記の点数に含んでいない。

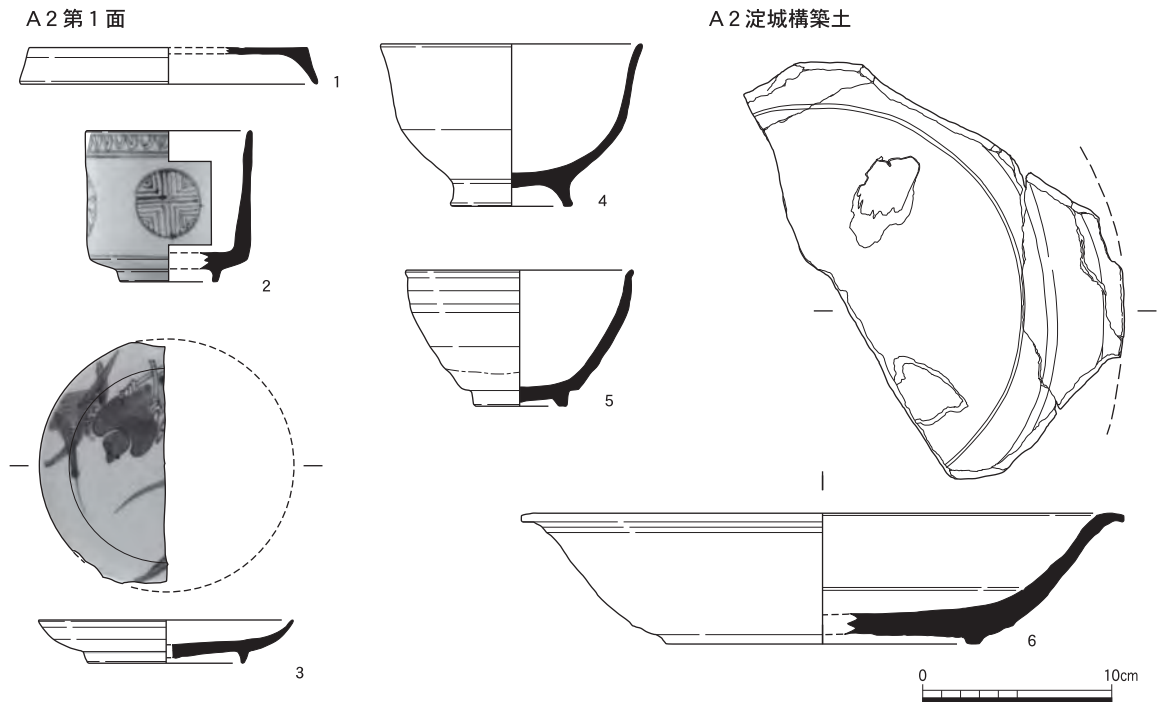


図46 A2区出土土器実測図(1:4)

A2区出土土器(図46)

淀城造成時の堤状盛土より、平安時代から中世の須恵器、土師器皿、瓦器、軒平瓦などが出土した。各遺構から土師器皿、施釉陶器椀・皿、焼締陶器鉢、瓦、染付椀、土製品の人形、銭貨、キセルなどが出土した。

A2区には第1面と淀城構築土の出土土器がある。第1面では土師器蓋(1)がある。口径15.8cm、高さ1.9cmの胞衣壺の蓋で、ロクロ成形である。施釉陶器には京焼椀(4)、瀬戸美濃鉄釉天目椀(5)がある。4は口径13.6cm、高さ8.5cmある大振りの呉器手椀で、体部のやや下部で屈曲して口縁部は外反する。内外面に透明釉を施す。磁器には肥前染付半筒椀(2)、皿(3)がある。2は口径8.6cm、高さ8.0cmで、外面には円形の窓に線描を施す。3は口径13.2cm、高さ2.3cmで、見込みに鳥を描く。高台は断面が三角形を示し、肥前磁器でも古い時期であることを示す。時期は17世紀中頃に属する。淀城構築土の出土土器は瀬戸美濃灰釉折縁大皿(6)がある。口径31.8cm、高さ6.9cmで、体部は上部で外反する。削出高台で全面に灰釉を施す。見込みに目痕が付く。時期は江戸時代初頭に属する。

B1区出土土器(図47、図版9)

京阪線盛土から、土師器皿、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦、土製品などが出土した。堀4埋土からは江戸時代の施釉陶器、染付鉢、土製品、刻印のある平瓦などが出土した。各遺構からは、平安時代から江戸時代の土師器皿、須恵器、瓦器、施釉陶器椀、焼締陶器挿鉢、染付椀・蓋、輸入青磁皿、土製品、碁石、瓦などが出土した。

B1区には堀4・集石5・淀城構築土から出土した土器がある。堀4では土師器皿(7)、肥前染付蓋(8)がある。7は口径7.2cm、高さ1.3cmの小皿で器壁は薄く、固く焼き締まる。8は口

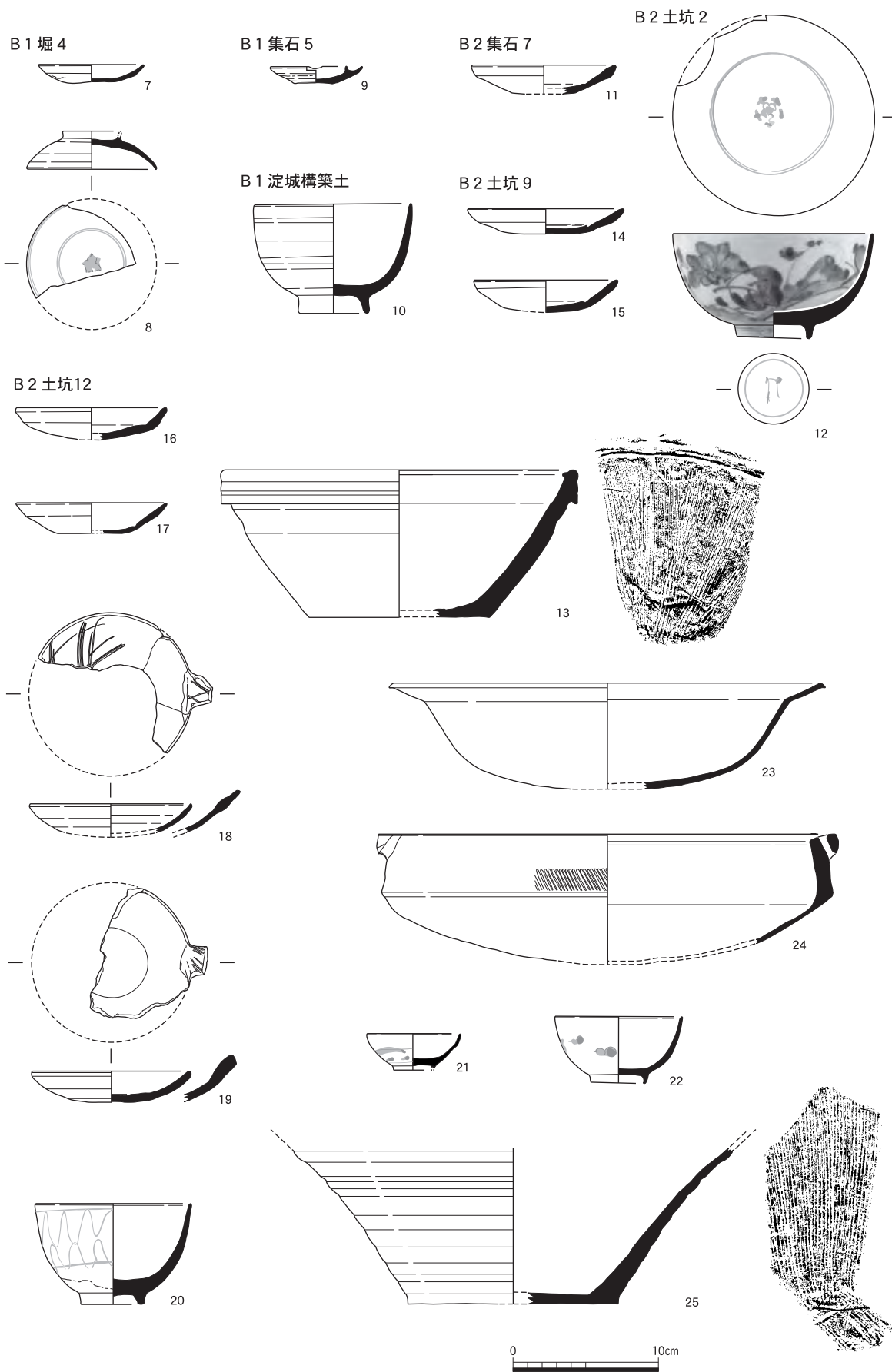


图47 B1·B2区出土土器实测图(1:4)

径8.8cm、高さ2.6cmあり、外面に草花文を描き、内面天井部に五弁花文がつく。時期は江戸時代（18世紀前）に属する。集石5では陶器の灯明皿受け（9）がある。口径6.2cm、高さ1.2cmと小型で外面灰釉を施す。時期は18世紀に属する。淀城構築土では唐津椀（10）がある。口径10.7cm、高さ7.4cmある呉器手椀で全面に黄釉を施す。時期は17世紀初頭に属する。

B 2区出土土器（図47、図版9）

建物跡が推定されていたが、遺物は少なく、集石面からの遺物は少ない。建物西側の土坑2・9・10・11・12などからは、土師器皿、施釉陶器、焼締陶器、肥前系染付椀、土師質土器、瓦などが出土した。その他に、京阪線敷設時の盛土から江戸時代の土師器、陶磁器類が出土した。

B 2区には集石7・土坑2・土坑9・土坑12出土土器がある。集石7では土師器皿（11）がある。口径10.0cm、高さ2.0cmで、口縁部は厚く肥大し底部には圈線がつく。土坑2では焼締陶器播鉢（13）、肥前染付椀（12）がある。13は堺・明石産で口径23.6cm、高さ10.1cmあり、播目は12本単位で底部外面に離れ砂を施す。12は口径13.6cm、高さ7.3cmあり、外面に草花文、高台内に記号を描き、見込みにコンニャク版の五弁花文がつく。土坑9では土師器皿（14・15）がある。14は口径10.6cm、高さ1.8cm、15は口径9.9cm、高さ2.3cmあり、ともに圈線がつく。時期は18世紀前半に属する。土坑12では土師器皿（16・17）、土師質土器焙烙（23・24）がある。16・17は口径10.4cm、高さ2.1cm前後で圈線がつき、表面は磨滅が激しい。16は全体に器壁が厚く口縁は肥大する。17は器壁が薄く体部中程で屈曲して開く。ともに京内では見られない形で、近郊の皿であろう。23は口径30.0cm、高さ7.3cmあり、体部は台型成形で口縁部を継ぎ足す。口縁端部は外に小さく突き出す。24は口縁は口径31.0cm、高さ約9cm、底部を台型成形し、やや内に屈曲する口縁部を継ぎ足し、外面にタタキを施す。底部の器壁は口縁部と比較すると非常に薄い。口縁外側2箇所穿孔がある。施釉陶器には、京都産の灯明皿（18・19）がある。口径11cm・高さ2cm前後あり、ともに把手がつき、褐色釉を施す。把手と18の内面に櫛描がある。焼締陶器（25）は信楽産の播鉢で口縁部は欠損する。播目は6本1単位で底にも播目がつく。肥前染付では椀（20・21）がある。20は口径10.8cm、高さ6.9cmで高台内は無釉、外面に網目文を描く。21は口径8.8cm、高さ4.6cmの小椀で外面に瓢を描く。22は杯で、口径6.4cm、高さ2.5cmある。時期は17世紀末から18世紀前期に属する。

B 3区出土土器（図48）

大部分は堀埋土や石垣抜き取り跡から出土した。淀城構築土からは、中世の土師器皿、施釉陶器皿、焼締陶器、染付、白磁、青磁椀、瓦などが出土した。また、石垣抜き取り跡や堀埋土から、土師器、須恵器、施釉陶器、染付、磁器、瓦、伏見人形などが出土した。

B 3区にはあげ土・石垣抜き取り跡出土土器がある。あげ土では軟質施釉陶器灯火具（26）がある。口径4.8cm、高さ1.7cmで、真中に穴を開けた粘土板を渡し、内面に透明釉を施す。時期は18世紀後半に属する。石垣抜き取り跡では肥前青磁皿（27）がある。口径13.4cm、高さ3.6cmで、体部は内湾し口縁部が外反する。高台内は無釉で、内面は釉ハギされる。時期は17世紀前半に属する。

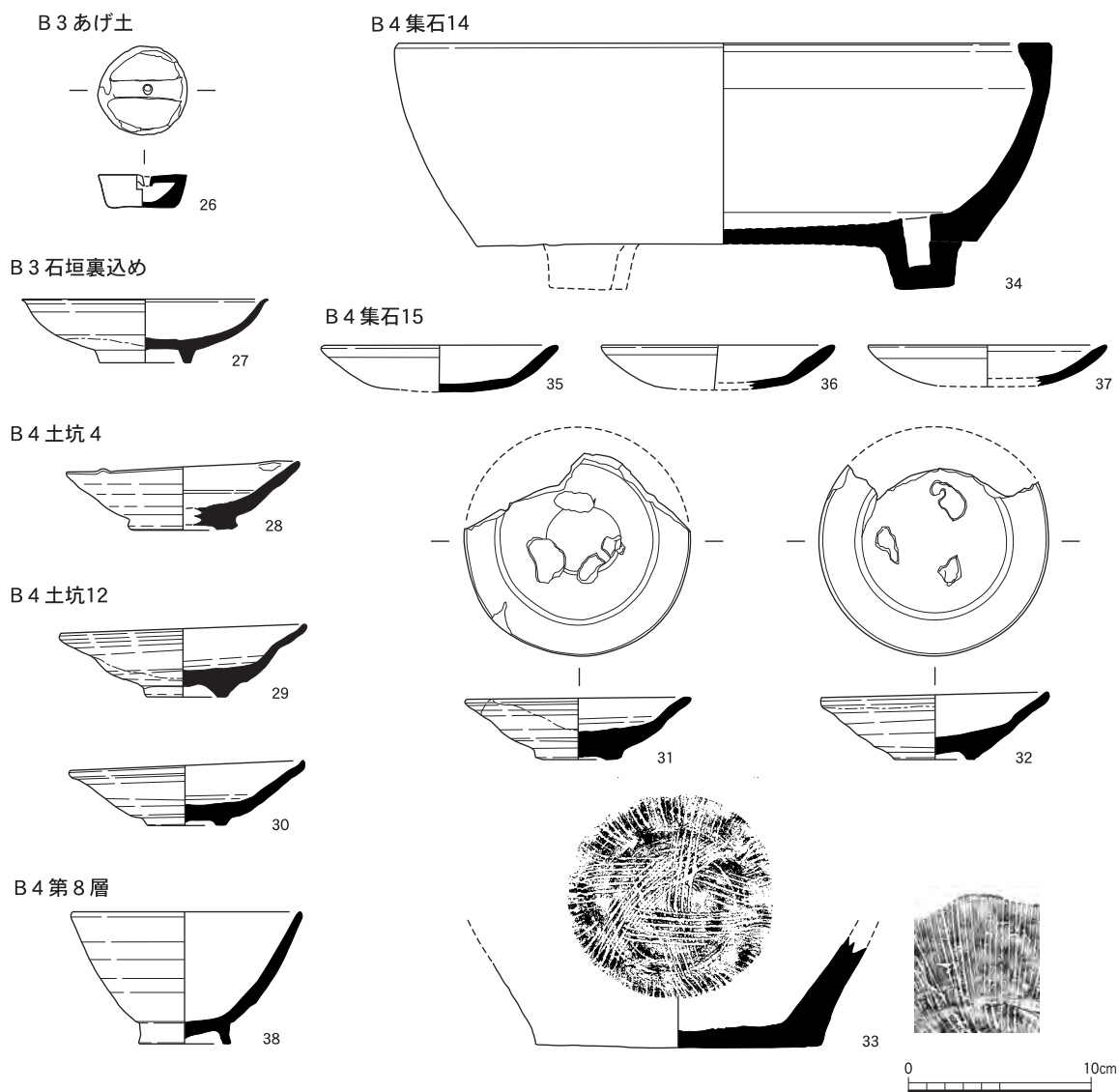


図48 B3・B4区出土土器実測図(1:4)

B4区出土土器(図48、図版9)

第1面検出時に、土師器皿・焙烙、須恵器、瓦器、施釉陶器椀・皿、焼締陶器鉢、染付椀、磁器、瓦などが出土した。各遺構から、土師器皿、須恵器、瓦器椀、施釉陶器椀・鉢、焼締陶器、染付、瓦、塩壺、砥石土が出土している。第1面の土坑1からは瓦が多く出土した。第2面の集石15からは江戸時代前期の土師器皿や焙烙が出土している。

B4区には集石14・集石15・土坑4・土坑12・第8層出土土器がある。集石14では瓦質土器盤(34)がある。口径36.0cm、高さ13.5cmあり、体部は内弯し口縁上端は平坦面をなす。底部は3箇所中空の脚が付く。集石15では土師器皿(35~37)がある。口径12.7cm、高さ2.5cm前後で、口縁に煤が付着する。時期は16世紀末~17世紀初頭に属する。土坑4では施釉陶器唐津皿(28)がある。口径12.6cm、高さ3.3cmあり、灰釉を施す。削出高台で体部中程が屈曲し段をもつ。口縁部にヘラ押えで輪花を施す。内面に砂目跡がつく。土坑12では施釉陶器唐津皿(29~32)、焼締陶器(33)がある。29~32は口径12.1~13.2cm、高さ3.4~4.0cmあり、灰釉を施す。29は松灰を

施した青唐津である。内面には砂目跡がつく。33は信楽産播鉢で、体部上から口縁部が欠損している。播目は6本単位で、底部にも播目がつく。第1面では施釉陶器瀬戸美濃椀(38)がある。口径12.1cm・高さ7.3cmあり、体部は直線的に開き内外面に織部釉を施す。土坑4・土坑12・第8層の時期は17世紀前半に属する。

B5区出土土器

ほとんどが、京阪線盛土と堀埋土からで、土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、染付、磁器、瓦などが出土した。淀城構築土からは、平安時代から中世の土師器、須恵器、瓦器椀・脚、施釉陶器、焼締陶器、瓦などが少量出土した。

C1区出土土器(図49、図版10)

C1区には堀1・溝11・地業2・第1面・第2面・第3面出土土器がある。堀1では土師器、陶磁器がある。土師器小皿(39)は口径5.6cm、高さ1.0cmある。ロクロ成形で底部はヘラ切り、内面に圈線がつく。口縁に煤が付着する。京内にはみられない近郊産の皿である。施釉陶器には京都産灯明皿(40・41)・蓋(43)・唐津皿(42)がある。40・41は口径10.5cm、高さ2.4cm前後で、内面にトチン跡がつく。42は口径13.1cm、高さ3.4cmあり、削出高台で体部は緩やかに内弯する。内面に胎土目跡がつく。肥前染付にはツマミのつく蓋(44)がある。表面に草花文を描く。時期は17世紀前半～19世紀前半にわたる。溝11では土師器皿(45)がある。口径9.2cm、高さ1.7cmあり、器壁は薄く焼き締まる。京の近郊産である。瓦質土器火入れ(46)は口径10.6cmあり、脚部は欠損する。外面には花の押型文がつく。施釉陶器には瀬戸美濃の菊皿(47)・唐津皿(51)・大皿(48・49)・片口鉢(50)がある。47は口径12.0cm、高さ2.5cmで、内外面に花卉の彫り込みがあり、長石釉を施す。51は口径11.2cm、高さ3.5cmあり、体部は緩やかに内弯する。48・49は唐津大皿で、48は口径18.0cm、高さ5.2cm、49は口径20.6cm、高さ4.5cmある。ともに削出高台で体部は緩やかに内弯し、口縁部が屈曲する。内面には胎土目跡がつく。49は絵唐津内面に鉄釉で鉢を葉に見立てて葉脈を描く。50は体部下部が膨らみ緩やかに外反し、口縁端部は丸く収める。口縁部に注口をつけ、片口とする。底部は欠損する。輸入陶磁器では明染付椀(52)がある。口径11.0cm、高さ5.3cmあり、底部内面は丸く盛り上がり、見込みに「王」、外面に草花文を描く。地業2では施釉陶器唐津皿(53)がある。口径12.8cm、高さ4.8cmあり、ハケ目で釉を施す。体部は緩やかに内弯し、内面に砂目痕がつく。第1面では施釉陶器の美濃絵志野皿(54)・唐津椀(55・56)・焼締陶器備前の播鉢(57)がある。54は口径11.6cm、高さ2.3cmあり、見込みに鉄釉で植物を描く。55は口径11.0cm、高さ6.0cm、56は口径10.2cm、高さ6.0cmである。ともに削出高台で体部は緩やかに内弯する。55に透明釉、56には灰釉を施す。57は口径33.0cm、高さ11.5cmあり、口縁は折り返され、幅広の帯状を呈する。縦に5本単位の播目を入れた後、斜めに強い播目を施す。口縁部を外に折れ曲げて注口を作る。第2面では土師器小壺(58)・皿(59～61)がある。皿は口径8.1～10.4cm、高さ1.5～1.9cmある。施釉陶器には瀬戸美濃灰釉折縁ソギ皿(62)・菊皿(63)・志野皿(66)・唐津皿(64・65・67・69)・椀(68)がある。62は底部に輪トチン跡がつく。66は内面に鉄釉で円と草文を描き長石釉を施す。底部に輪トチン跡がつく。唐津

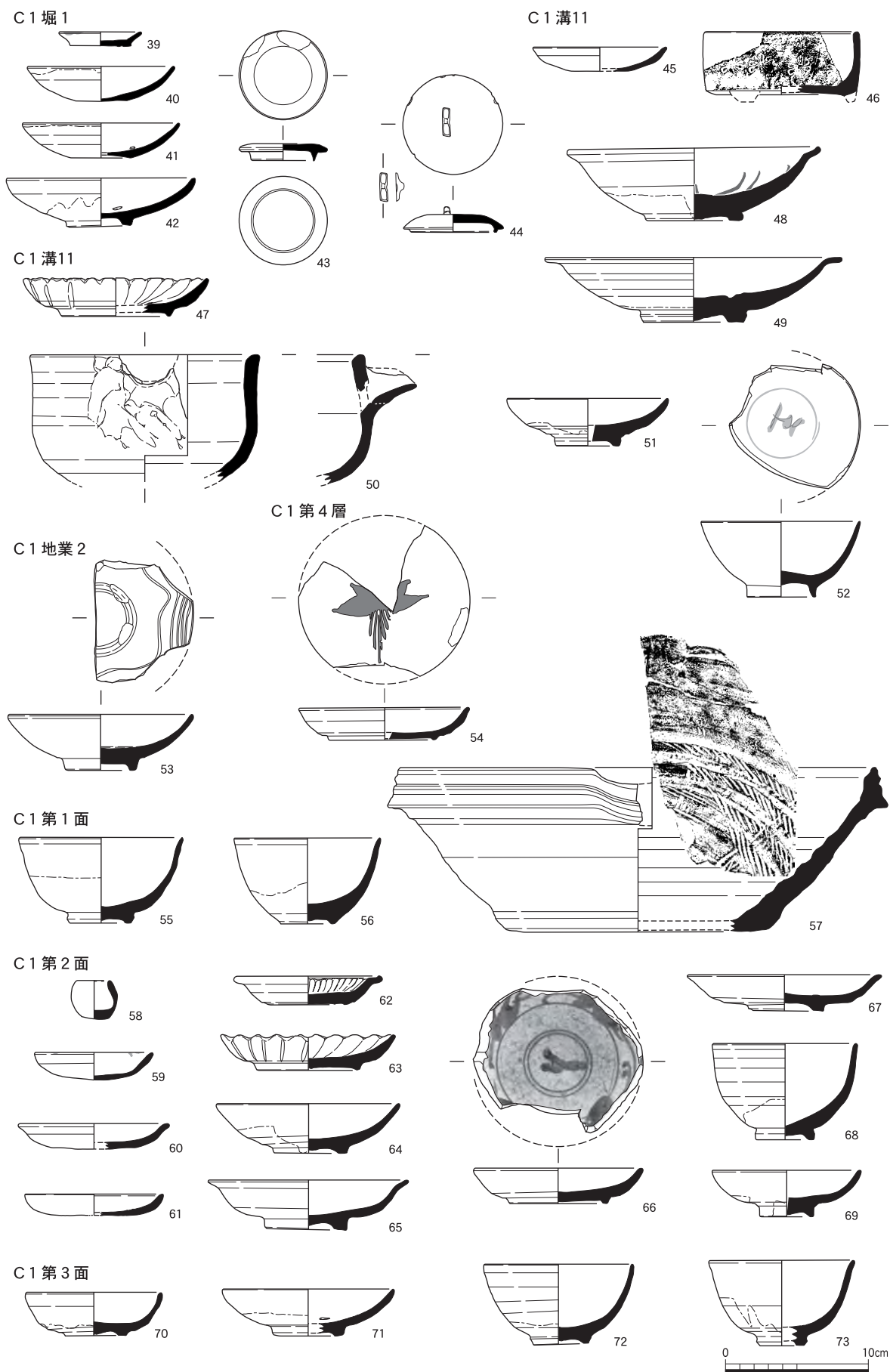


图49 C1区出土土器实测图(1:4)

皿は体部が緩やかに内弯するもの(64)、口縁部が屈曲するもの(65)、体部が開くもの(67)、高台が高いもの(69)などがある。いずれも内面に砂目跡がつく。68は褐釉を施し、底部内面には茶だまりがみられる。第3面では唐津皿(70・71)・椀(72・73)がある。70は口径9.4cm、高さ3.1cmあり、器高が高い。72は内外面に灰釉を、さらに口縁上端に鉄釉を施す。73は口縁が外反し、透明釉を施す。第1面の時期は17世紀中頃、溝11・地業2・第2面・第3面の時期は16世紀末～17世紀前半に属する。土師器皿45は室町時代、60は平安時代後期、61は鎌倉時代に属し、混入品である。

C2区出土土器(図50、図版10)

第1面・第2面では、平安時代から江戸時代までの土師器皿、須恵器、瓦器椀・鍋、施釉陶器、焼締陶器播鉢、染付、青磁、瓦、泥メンコ、銭貨などが出土した。第3面から第6面の淀城期以前の面からは、平安時代から17世紀初頭までの土師器皿、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器椀、施釉陶器皿・天目椀、焼締陶器播鉢、磁器、軒瓦、瓦、犬形土製品、刀子、多数の銭貨などがある。

C2区には柱穴32・溝36・落込み62・第3面・第4面・第5面・第6面出土土器がある。柱穴32では瀬戸美濃灰釉皿(74)がある。口径10.6cm、高さ2.8cmあり、体部下部が屈曲して開き、口縁端部は丸く収まる。時期は16世紀末～17世紀初頭に属する。溝36では瀬戸美濃の小型天目椀(75)がある。口径6.6cm、高さ3.2cmで、鉄釉を施す。落込み62では土師器皿(76・77)がある。

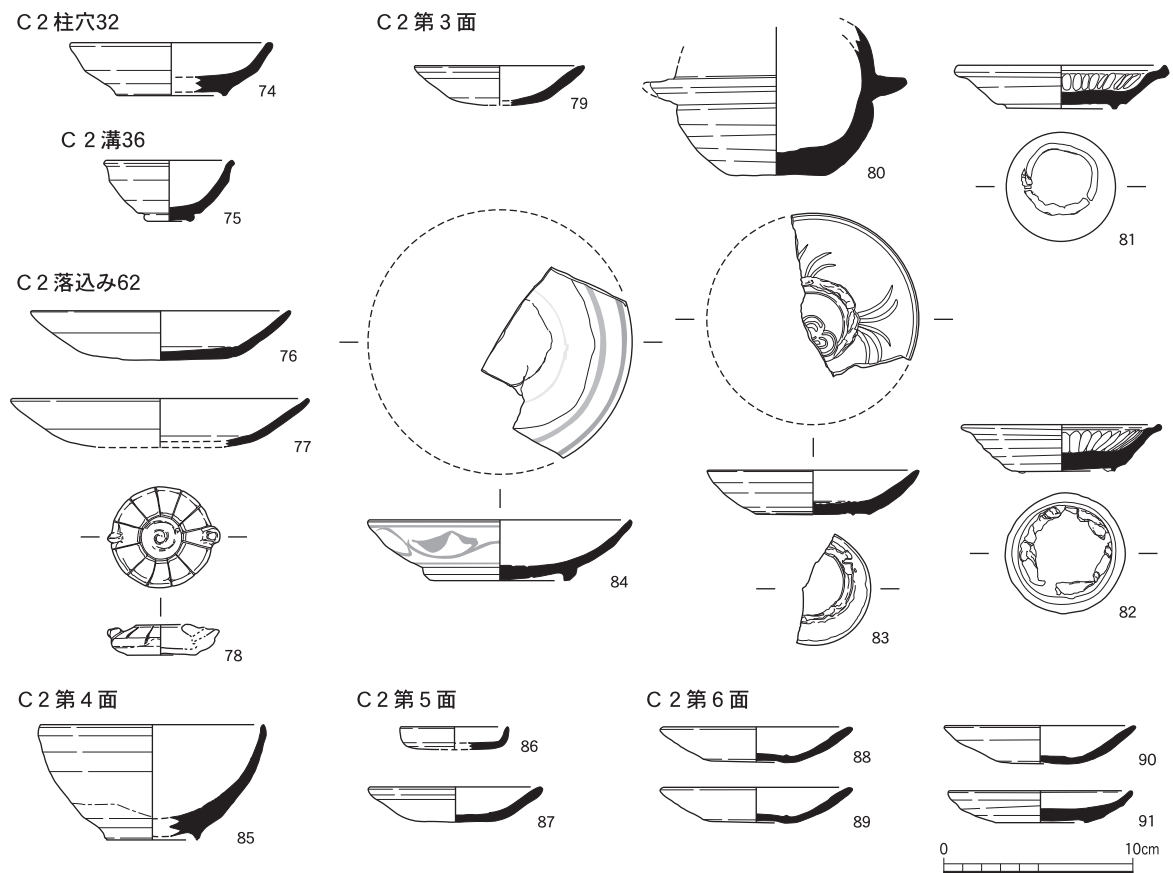


図50 C2区出土土器実測図(1:4)

76は口径13.6cm、高さ2.6cm、77は口径15.6cm、高さ2.6cmある。立ち上がり部ナデ際の泥漿が盛り上がりその外側に凹みをもつ圈線となる。施釉陶器では瀬戸美濃水滴(78)がある。口径2.1cm、高さ1.6cmの扁平な形のロク口成形、糸切り底である。上面に6本の分割線を切り込みを入れ、注口とツマミを付け、鉄釉と3箇所に褐釉を施す。時期は16世紀末～17世紀初頭に属する。土師器はそれよりやや古い。第3面では土師器には皿(79)がある。口径8.8cm、高さ2.1cmあり、丸底皿である。瓦器ではミニチュア羽釜(80)がある。ロク口成形で体部のやや上部に鐔を付ける。口縁部は欠損しており、器壁は厚い。施釉陶器では瀬戸美濃灰釉皿(81～83)がある。81・82は折縁ソギ皿、83の皿は内面に草花文を掘り込む。ともに底部と83は内面にも輪トチン跡がつく。輸入陶磁器には明染付(84)がある。口径13.8cm、高さ3.2cmで、外面に草花文、内面に二重の線を描く。内面に釉ハギがみられる。時期は桃山時代末から17世紀初頭に属する。第4面には唐津椀(85)がある。口径11.7cm、高さ6.1cmで灰釉を施す。17世紀初頭に属する。第5面では土師器皿(86・87)がある。86は口径5.6cm、高さ1.2cmの小型で体部は直に立ち上がる。蓋とも考えられる。87は口径8.9cm、高さ1.9cmの丸底皿で端部は肥厚する。第6面では土師器皿(88～90)がある。口径10.2cm、高さ2.0cm前後ある。丸底タイプで、口縁部に沿って内面を底部近くまでナデた後、底部中央に指先で小さくナデた痕跡を残す。口縁に煤が付着する。施釉陶器には瀬戸美濃の灰釉皿(91)がある。口径9.8cm、高さ1.7cmで底部には輪トチン跡がつく。時期は16世紀末に属する。

Cs2区出土土器(図51)

狭い面積であるが、土師器皿、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器椀・釜、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、瓦、滑石製石鍋、土錘、銭貨など、平安時代から江戸時代の遺物が出土している。室町時代までの遺物は混入である。

Cs2区には井戸3埋土・井戸3掘形・第2面・第3面・第4・5面出土土器がある。井戸3埋土では土師器皿(92～94)がある。92は口径8.8cm、高さ1.6cmあり、口縁端部はつまみ上げる。鎌倉時代に属する。93は口径9.4cm、高さ2.1cmあり、口縁部は外反する。室町時代に属する。94は口径10.0cm、高さ1.4cmあり、口縁は強く屈曲し端部は小さくつまみ上げる。平安時代後期に属する。瓦器には皿(95)・椀(96・97)・播鉢(98)がある。96は口径13.0cmあり、内面の口縁端部直下に沈線をつける。97は口径16.8cmでかなり大振りの椀である。ともに底部は欠損する。皿には内面に、椀には内外面にミガキ調整が施される。98の播鉢は播目が1単位11本以上ある。瓦器類の時期は鎌倉時代である。井戸3掘形では土師器皿(99～103)がある。99は底部が欠損するがヘソ皿と考えられる。99・102は室町時代、100・101は鎌倉時代に属する。103は平安時代後期の皿である。瓦器には椀(104～106)がある。104・105には内面の口縁端部直下に沈線を施し、口縁は外反する。106は口径17.0cmある。ともに内外面にミガキ調整が施される。時期は鎌倉時代に属する。これらの井戸3出土土器は混入品として出土したもので、埋土・掘形は客土と考えられる。第2面では瓦質土器火入れ(107)がある。外面に花の押型文がつく。C1区溝11で同じものが出土している。時期は16世紀末～17世紀初頭に属する。第3面では土師器皿

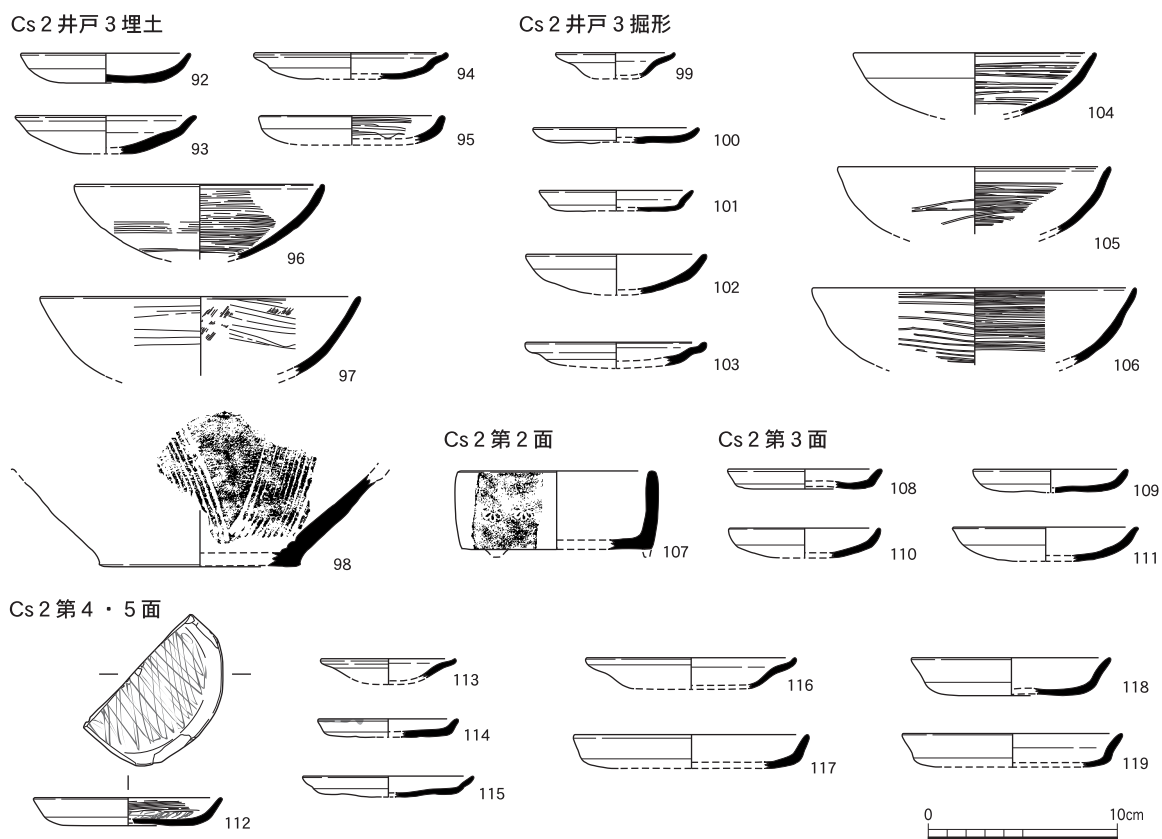


図51 Cs2区出土土器実測図(1:4)

(108~111)がある。口径7.8~9.6cm、高さ1.1~1.8cmあり、時期は鎌倉時代に属する。第4・5面整地層では土師器皿(113~119)がある。113は底部が欠損しているがヘソ皿である。瓦器皿(112)は内面に斜め格子のミガキを施す。113・116は室町時代に属する。114・115は口径7.2cm、高さ1.0cm、口径9.0cm、高さ1.2cmある。112・117~119は口径10.4~12.2cm、高さ1.8~2.0cmある。鎌倉時代に属する。第3・4・5面整地層出土の土器類は客土からの混入品である。

C3区出土土器

堀埋土から、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器椀・釜、施釉陶器、焼締陶器、染付、軒瓦、瓦、土製品、寛永通寶の四文銭など、平安時代から江戸時代までの遺物が出土した。

(3) 瓦類

瓦類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・刻印瓦・棧瓦・道具瓦などが出土している。大半が江戸時代以降のものである。ここでは桃山時代から江戸時代の軒瓦を中心に概略を記す。

軒丸瓦(図52、図版11)

120・121は菊花文の棟丸瓦である。120は無周縁の8弁二重菊で中房はボタン状である。瓦当部裏面上部にカキメを施す。B3区淀城構築土から出土した。121は無周縁で花卉は16弁以上ある。中房はボタン状である。B2区土坑12から出土した。

122~127は右巻き三巴文軒丸瓦である。外区に珠文が巡る。122は珠文を15個配する。B2区

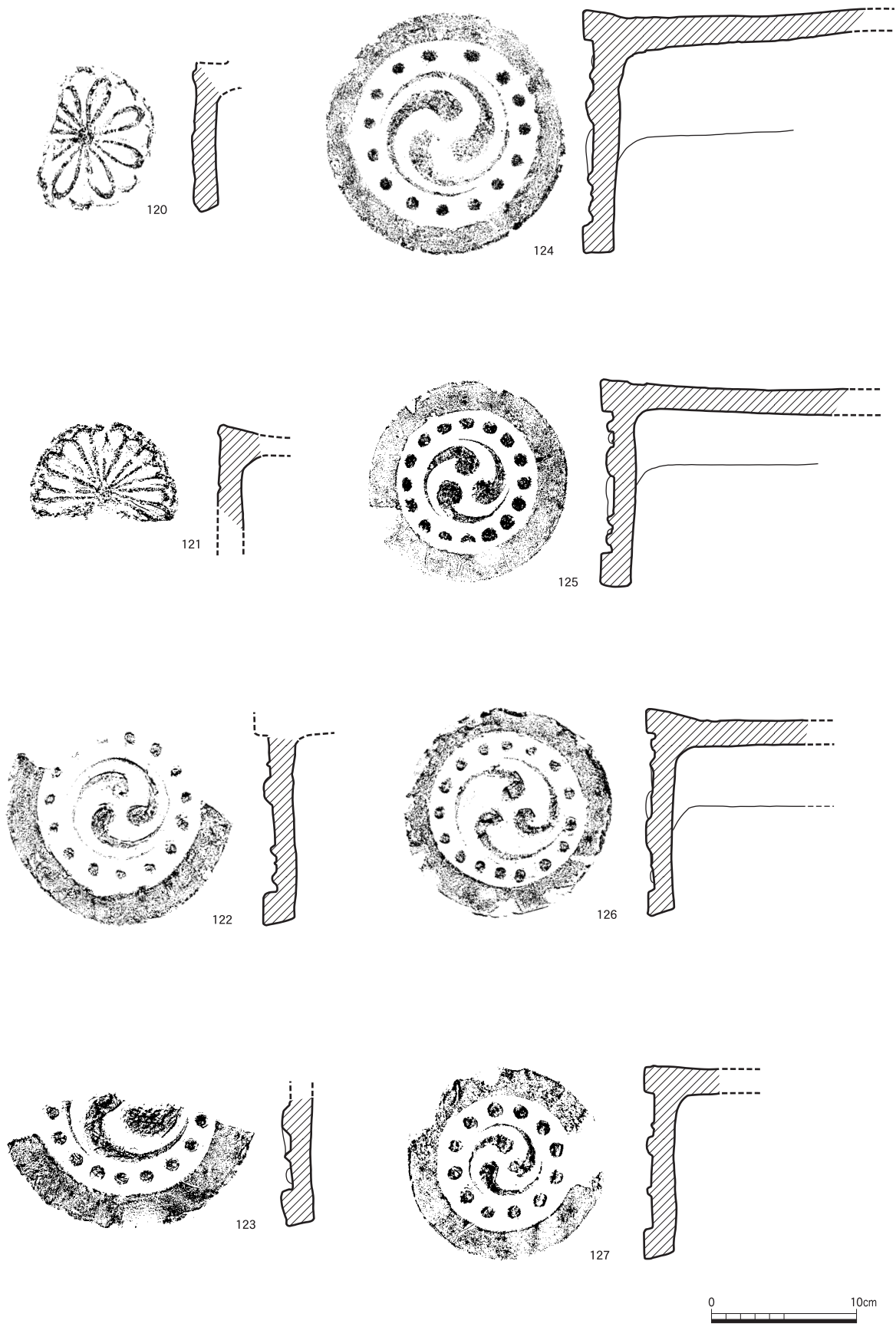


图52 軒丸瓦拓影・実測図(1:4)

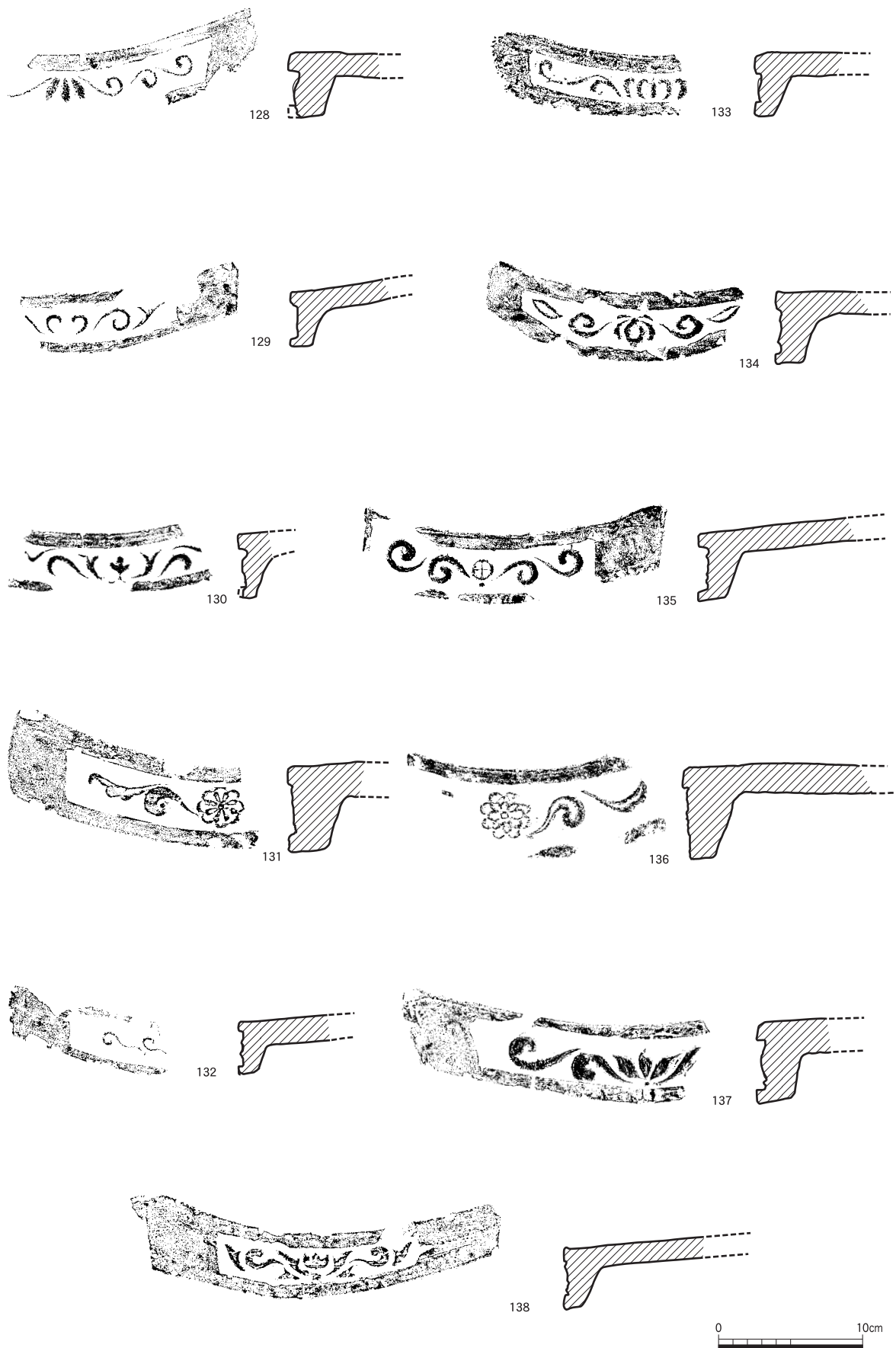


图53 軒平瓦拓影·实测图(1:4)

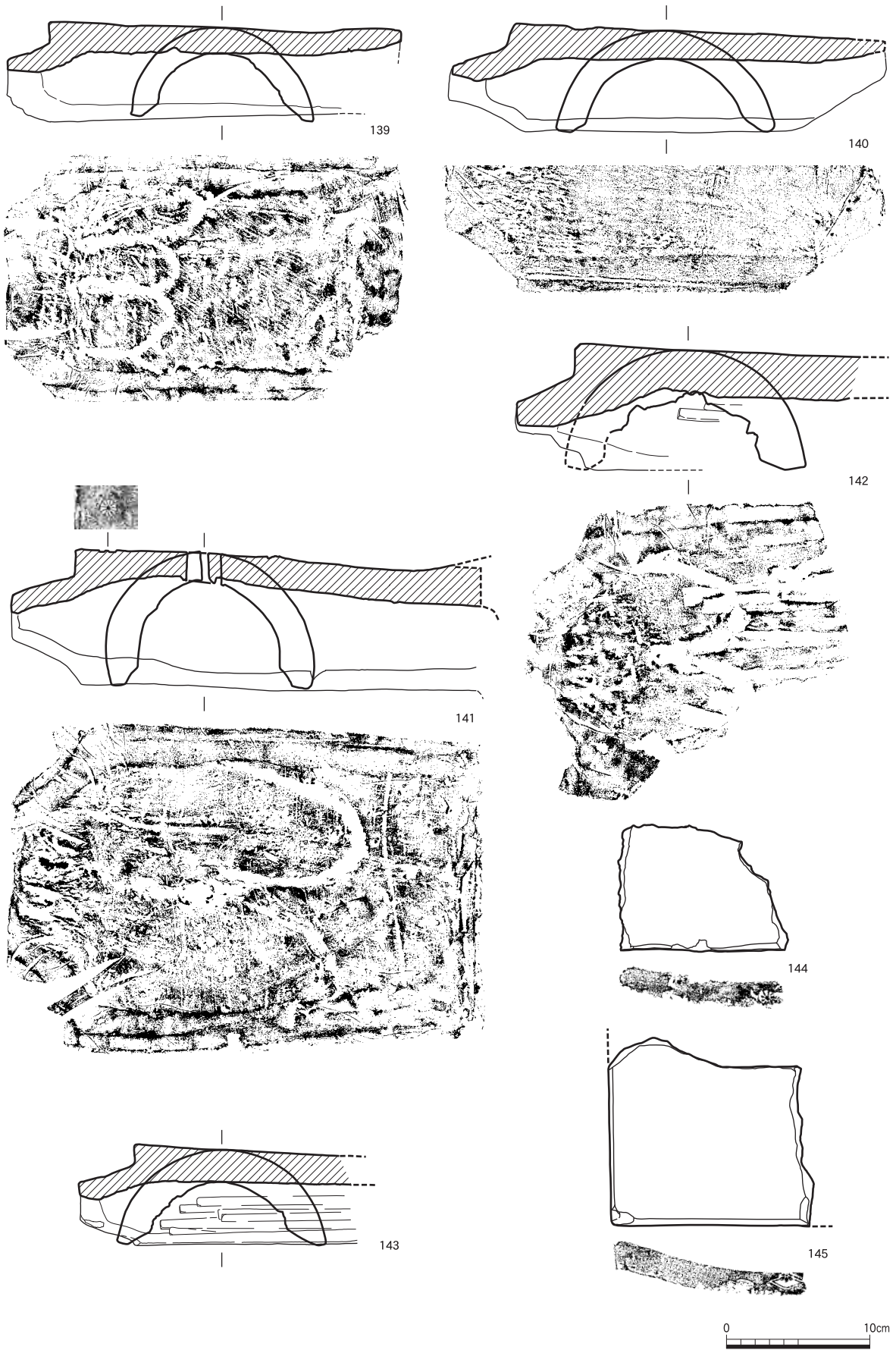


图54 丸瓦・刻印瓦拓影・实测图(1:4)

断割から出土した。123はC 2区縁石42から出土した。124は珠文を15個配し、瓦頭面にはなれ砂が残る。125は珠文を16個配し、瓦頭面にキラコが残る。ともにC 1区堀 1から出土。126は珠文を16個配し、瓦頭面にはなれ砂が残る。A 2区淀城構築土出土。127は珠文を12個配する。B 4区第 1面から出土。出土遺構から、120・123・126は16世紀末～17世紀初頭、121・122・124・125・127は17世紀前半～18世紀に属する。

軒平瓦（図53、図版11）

128～138は均整唐草文軒平瓦である。128は中心飾りが下向き三葉、唐草が3回反転する。瓦頭面にはなれ砂が残る。C 1区第 2面出土。129は中心飾りが二葉、唐草が2回反転する。瓦頭面にキラコが残る。B 1区土坑 3出土。130は中心飾りが上向き三葉、唐草が2回反転する。瓦頭面にキラコが残る。C 1区堀 1出土。131は中心飾りが花、唐草が2回反転する。瓦頭面にはなれ砂が残る。C 1区石垣13裏込め出土。132は中心飾りは欠損する。唐草が2回反転する。C 1区堀 1出土。133は中心飾りが上向き五葉、唐草が2回反転する。瓦頭面にはなれ砂が残る。C 2区井戸 3掘形出土。134は下向き五葉、唐草が2回反転する。C 1区堀 1出土。135は中心飾りは+の記号、唐草が2回反転する。B 3区石垣抜取跡出土。136は中心飾りが花、唐草が2回反転する。B 4区土坑13出土。137は中心飾りが上向き三葉、唐草が2回反転する。B 4区土坑13出土。138は中心飾りが上向き三葉、唐草が2回反転する。B 3区石垣抜取跡出土。出土遺構から、128・131・133・136は16世紀末～17世紀初頭、129・130・132・134・135・137・138は17世紀～18世紀に属する。

丸瓦・刻印瓦（図54）

丸瓦（139～143）の成形は粘土板 1枚作りである。139は凹面に糸切り離し痕跡がつき、その上に布目残り、布目には取り付けられた3つ螺旋の抜き縄痕跡がつく。凸面は縦ナデのヘラミガキを施す。C 1区第 2面出土。140は凹面に鉄線切り離し痕跡がつき、その上に布目残り。抜き縄痕跡は見られない。凸面は縦ナデを施す。C 1区石垣13裏込め出土。141は凹面に鉄線切り離し痕跡がつき、その上に布目残り、布目には取り付けられた2つ螺旋の抜き縄痕跡がつく。凸面は縦ナデのヘラミガキを施す狭端部の凸面に菊花の刻印が

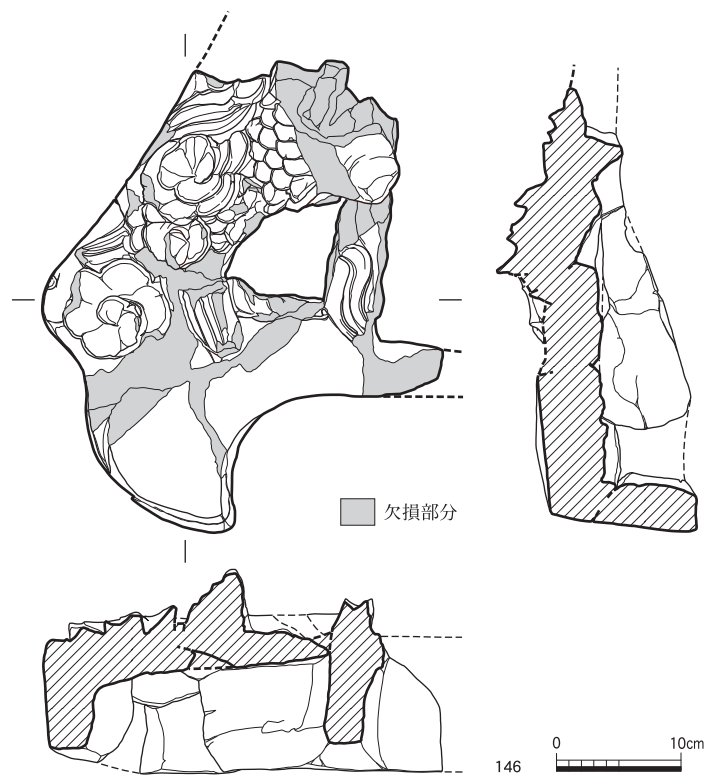


図55 鬼瓦実測図（1：6）

あり、その付近に釘孔を開ける。A2区淀城構築土出土。142は凹面に布目が残り、2つ螺旋の抜き縄痕跡がつく。その上から押さえつけたような跡が幅1.2cm・0.4cmの筋になって残る。凸面は縦ナデのヘラミガキを施す。C1区第2面整地層出土。143は凹面に布目が残り、幅0.7cmの筋が6筋ほど残る。凸面は縦ナデのヘラミガキを施す。C1区第3面整地層出土。

刻印瓦(144・145)はともに平瓦で、144は端面に菊花の刻印がある。C1区石垣13裏込め出土。145は端面に菱形と花の刻印がある。B1区堀4出土。

出土遺構から、139~144の時期は16世紀末~17世紀初頭、145は17世紀~18世紀である。

鬼瓦(図55、図版11)

146は鬼瓦の一部分で魚の鱗や尾びれ、花びら、水流などが表現されている。C1区石垣13裏込め出土。16世紀末~17世紀初頭。

(4) その他の遺物

金属製品(図56、図版13)

出土した金属製品には真鍮製品、銅製品、鉄製品などがある。147は銅製の匙で、皿部分は欠損する。148は真鍮製のキセル、149は銅製の鈴である。遺構年代は、16世紀末~17世紀初頭であ

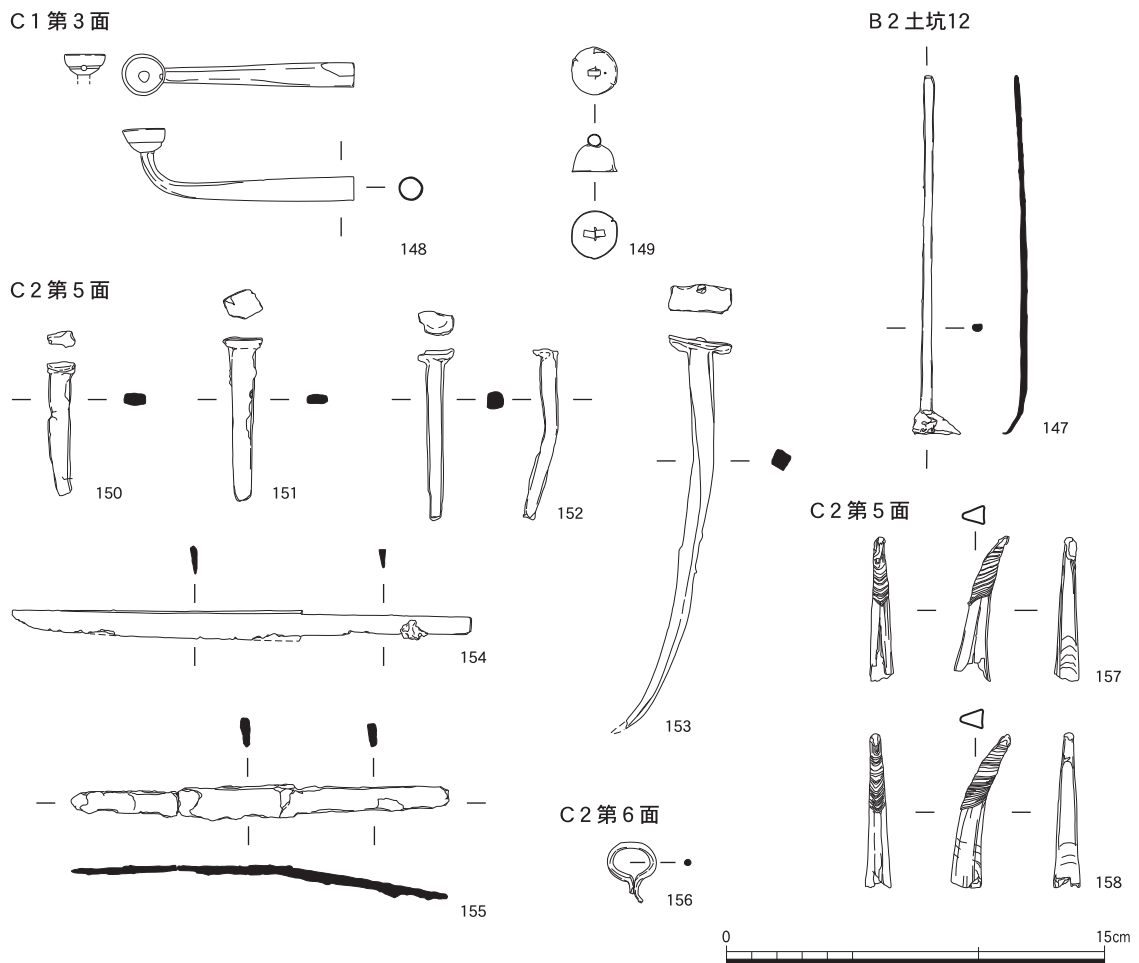


図56 金属製品・骨実測図(1:3)

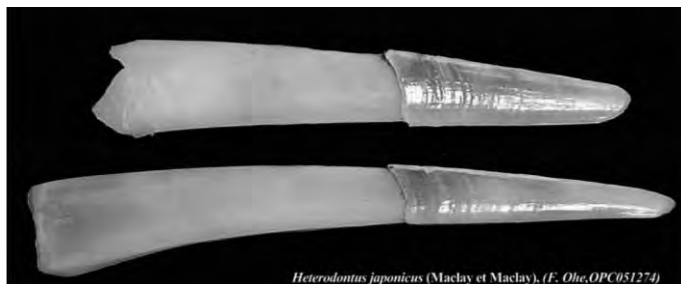


図57 参考資料 ネコザメ背鱗棘（側面）
上：第一棘、下：第二棘

る。150～153は鉄製の釘で頭部平面形・断面ともに方形である。16世紀末期。154・155は鉄製の刃子で、155は錆による損傷が激しく脆い。156は銅製の金具である。遺構年代は16世紀末～17世紀初頭。

骨（図56・57、図版14）

157・158は、ネコザメ科ネコザメの背びれの前にある背鱗棘である¹⁹⁾。断面は三角形を呈し、前方の二面には貝の年輪のような成長線が付く。中空である。ネコザメは1頭に背びれが2枚ある。ネコザメは沿岸部の海底近くに生息する。現代では練り製品として食べられており、食用にされたか、鮫皮として利用されたかと考えられる。C2区第5面から出土した。

銭貨（図58、表4、図版12）

出土銭貨は70枚である。初鑄年代を記したが、国内での模鑄銭の区別はしていない。唐銭は6枚、北宋銭は53枚、明銭は2枚、江戸時代は3枚、明治時代1枚、不明5枚。掲載以外には、北宋の咸平元寶（998）、寛永通寶（1636）などがある。元豊通寶は8枚、開元通寶は5枚と枚数の多い銭貨がある。C2区から、6面の落込み62から46枚、他の面から17枚の計63枚出土した。その他には、A2区・B1区・C1区・C3区から出土した。そのうち状態の良いもの39枚を図示した。

木製品（図59、図版13）

出土木製品は毬打・漆椀・棒状製品などがある。198は毬打（ぎっちょう）（毬杖）の槌の部分である。直径5.5cm、長さ14.5cmあり、両端はやや細く削り、円柱を八角形に加工する。長さの1/4付近に柄を差し込むための幅0.5cm、長さ4.0cmの穴を開ける。木口の両面には赤漆が残存する。毬打は、槌形の杖で毬を打ち合う遊戯である。材はヒノキ科。地表下4～5mで出土したもので、淀城構築時以前の層となる。時期は桃山時代以前。199は円盤状の木製品で中央に穴を開け、陶器製の花を金属で留める。これらは一体で出土した。壺などの蓋としての使用が考えられる。材は二葉マツ。B4区出土。時期は江戸時代。200は棒状の部材である。断面は長方形で片側の先端は臍に加工し、もう一方は細く削る。材は杉。桃山時代。漆椀201・202がある。201は内面赤色、外面は黒色で赤色で梅を描く。材はトチノキ。202は内外面赤色で底部に黒色で記号を入れる。材はエノキ。漆椀は16世紀末～17世紀初頭。203は曲物の底（蓋）で中央に穴を開ける。材はヒノキ科。桃山時代。

土製品（図59、図版14）

出土土製品には鑄造関係の遺物や人形・土錘などがある。204は鞆の羽口である。先端に鋳滓が付着し、被熱をうけて赤褐色に変色している。直径8.0cm、内径2.3cm、先端から9.6cm残存する。C2区第4面から出土した。205は壁土で、竹の跡が残り、中にスサが入る。赤褐色を呈し火災の痕跡が窺える。C2区第2面から出土した。206～208は犬形土製品である。手づくねで、胴短・

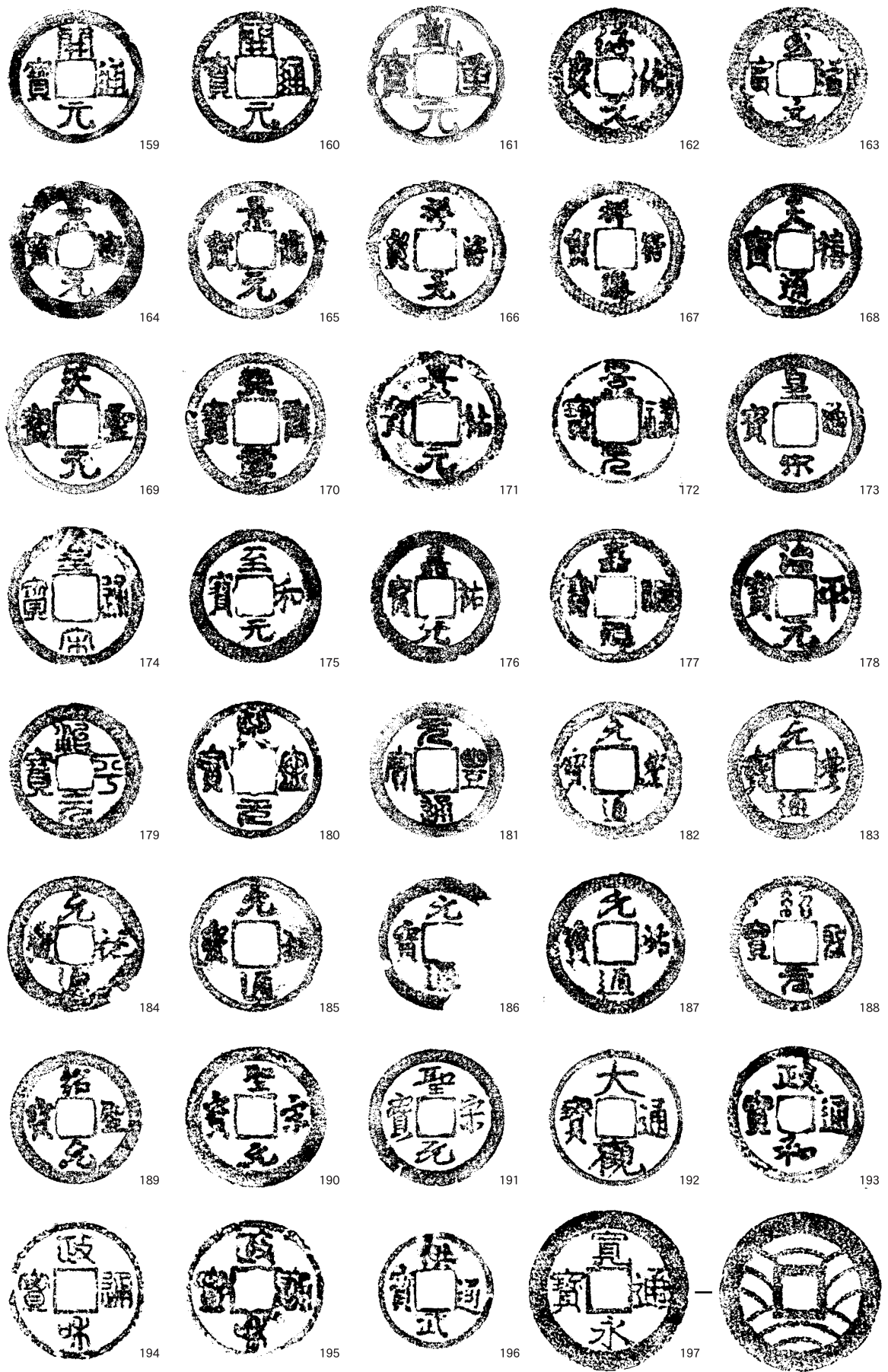


图58 钱货拓影(1:1)

表4 錢貨一覧表

遺物番号	種類	区	遺構名	外径mm	厚さmm	孔径mm	重さg	初鑄年	備考
159	開元通寶	C2	落込み62	23.9	1.3	6.3	2.46	621	唐
160	開元通寶	C2	落込み62	23.5	0.9	6.7	2.06	621	唐
161	乾元重寶	C2	落込み62	24.7	1.1	6.9	3.01	759	唐
162	淳化元寶	C2	落込み62	23.9	1.2	5.6	2.88	990	北宋
163	至道元寶	C2	落込み62	25.0	1.1	6.9	3.04	995	北宋
164	景德元寶	C2	第4面	24.6	1.1	6.1	2.96	1004	北宋
165	景德元寶	C2	落込み62	24.5	1.0	6.1	2.71	1004	北宋
166	祥符元寶	C2	落込み62	24.9	1.4	6.3	3.24	1009	北宋
167	祥符通寶	C2	落込み62	23.8	0.8	6.5	2.09	1009	北宋
168	天禧通寶	C2	第1面	24.0	0.9	6.2	2.46	1017	北宋
169	天聖元寶	C2	落込み62	24.9	1.1	6.6	2.99	1023	北宋
170	天聖元寶	C2	第5層	25.2	1.1	6.9	2.96	1023	北宋
171	景祐元寶	C2	第4層上面	24.9	0.9	7.0	2.31	1034	北宋
172	景祐元寶	C2	落込み62	22.5	1.1	6.7	2.47	1034	北宋
173	皇宋通寶	C2	第5層	24.9	1.1	6.9	2.83	1038	北宋
174	皇宋通寶	C2	落込み62	24.6	1.3	7.2	3.09	1038	北宋
175	至和元寶	C2	落込み62	23.9	1.2	6.2	3.10	1054	北宋
176	嘉祐元寶	C2	落込み62	23.3	1.2	6.1	2.86	1056	北宋
177	嘉祐通寶	C2	落込み62	23.6	1.3	6.5	3.52	1056	北宋
178	治平元寶	C2	落込み62	23.5	1.2	6.1	2.89	1064	北宋
179	治平元寶	C2	落込み62	24.0	1.1	6.2	2.78	1064	北宋
180	熙寧元寶	C2	落込み62	23.9	1.4	8.2	2.93	1068	北宋
181	元豐通寶	C2	落込み62	24.1	1.2	6.7	3.40	1078	北宋
182	元豐通寶	C2	落込み62	24.4	1.0	6.6	2.12	1078	北宋
183	元豐通寶	C2	落込み62	24.4	1.0	6.6	2.26	1078	北宋
184	元祐通寶	C2	第4面	24.5	1.2	6.3	2.91	1086	北宋
185	元祐通寶	C2	落込み62	24.2	1.2	7.0	2.92	1086	北宋
186	元祐通寶	C2	落込み62	24.4	1.1	6.0	1.36	1086	北宋
187	元祐通寶	C2	落込み62	24.9	1.1	6.5	2.76	1086	北宋
188	紹聖元寶	C2	落込み62	23.9	1.0	7.0	1.98	1094	北宋
189	紹聖元寶	C2	落込み62	23.6	1.2	6.4	3.18	1094	北宋
190	聖宋元寶	C2	落込み62	24.7	1.3	6.1	4.09	1101	北宋
191	聖宋元寶	C2	落込み62	24.0	1.0	6.0	2.50	1101	北宋
192	大觀通寶	C2	落込み62	24.1	1.3	6.3	2.83	1107	北宋
193	政和通寶	C2	第5面	24.2	1.6	6.5	3.91	1111	北宋
194	政和通寶	C2	第5面	24.3	1.1	6.2	2.78	1111	北宋
195	政和通寶	C2	落込み62	24.4	1.3	6.6	3.13	1111	北宋
196	洪武通寶	C2	落込み62	20.8	1.1	6.6	1.08	1368	明
197	寛永通寶	C3	堀埋土	28.4	1.2	5.9	4.26	1768	江戸 新寛永 四文銭

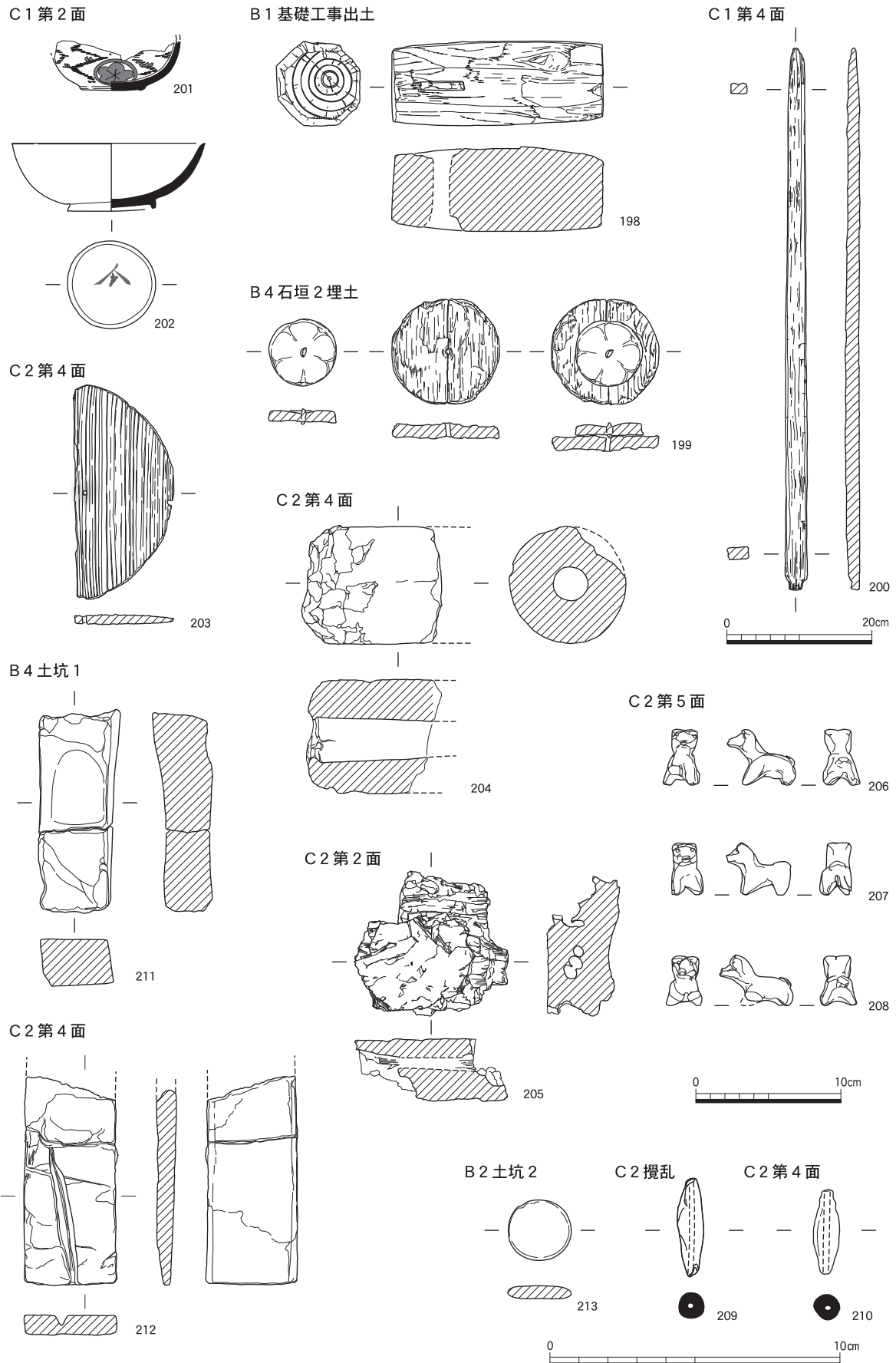


図59 木製品・土製品・石製品実測図 (200は1 : 8、209・210・213は1 : 2、他は1 : 4)

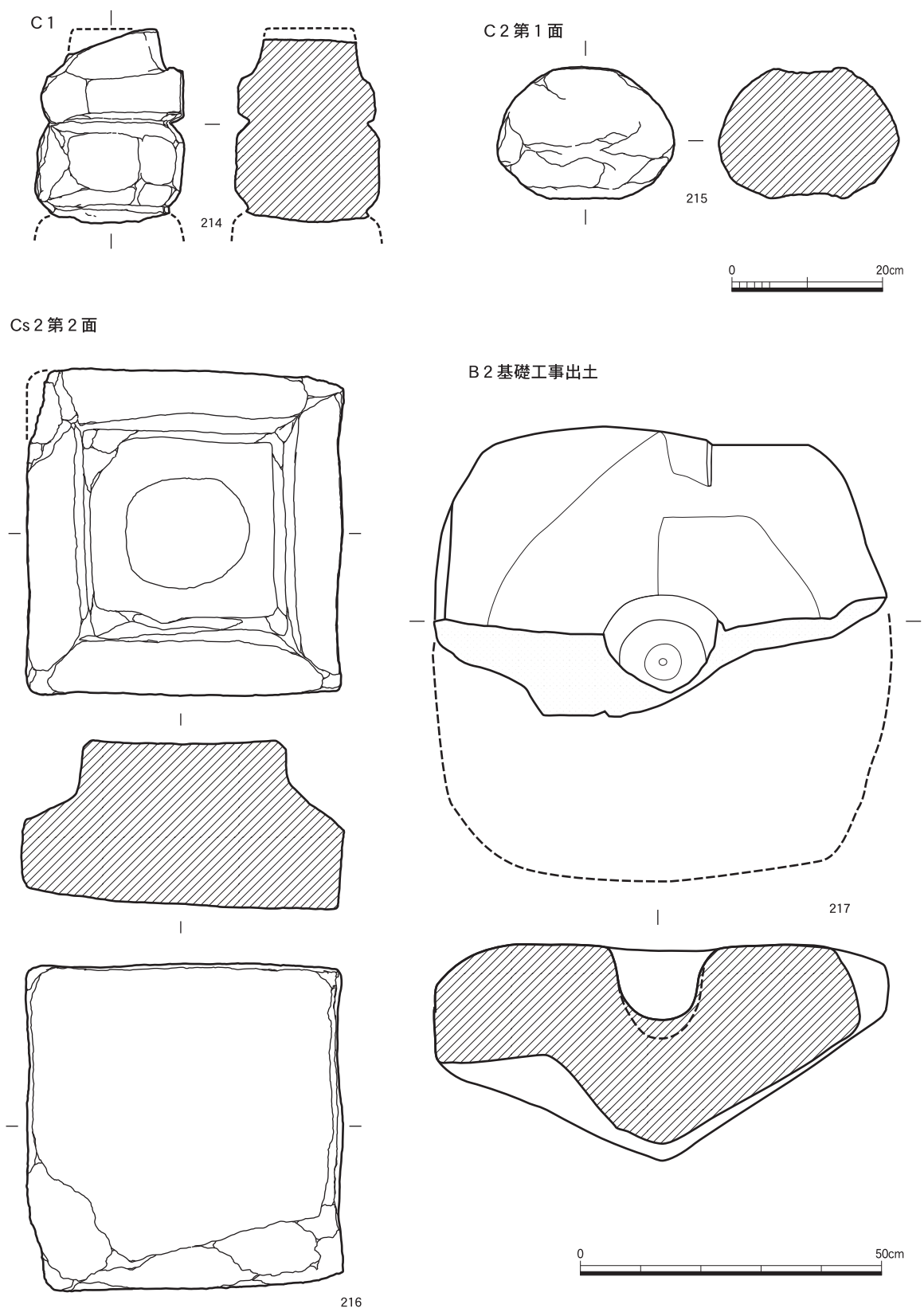


図60 石製品実測図(1:8、1:10)

短足、目は小穴を開け、口は横線で表現する。同様の形式のものが大坂城三の丸跡からは大量に、また、姫路城などから出土している。安産・魔よけのお守りと言われている。今でも、奈良・法華寺では安産のお守りや火難よけとして授受している。時期は16世紀末。17世紀初頭まで作られ、17世紀後半からは型作りとなる。C 2区第5面から出土した。209・210は土錘である。C 2区4面などから出土した。

石製品（図59～61、図版14）

石製品には砥石・滑石製鍋・碁石などの日用品の他に、五輪塔・軸石・礎石・石垣石などの石造物がある。石造物の材質はいずれも花崗岩である。

211・212は砥石である。211は4面に使用痕がある。材質は粘板岩である。212は硯の転用で片面にV字形の刃物の研痕がある。213は黒色の碁石で、粘板岩の那智黒石と思われる。直径2.1～2.2cmと楕円形である。

214は一石五輪塔である。上部空輪と最下部地輪部分は欠損し、風輪の一部・火輪・水輪が残存する。215は積み上げ五輪塔の一部で水輪部（塔身）である。上下に火輪部と地輪部を組み合わせるためを窪みをつける。216は多重石塔の一部を逆にして礎石に転用したものである。Cs 2区第2面から出土した。

B 1区～C 1区から出土した石垣石など大型の石造物のうち、残存状態の良好なものや刻印のあるものは、黄色ペンキで通し番号を付けて整理した。総計23個で、工事終了後、整備計画に使用するため京阪電気鉄道株式会社が保管している。そのうち3点を掲載する。217は石製部材である。上面はほぼ水平で中央部に径20cm・深さ15cmの穴を開ける。穴の内面はきれいに磨かれている。B 2区基礎工事時に出土した。調査地は本丸南の曲輪の門から、南側の内高嶋に通じる橋の北側に位置することから、この石は曲輪の門扉の軸受けの可能性はある。218・219は刻印石である。218はB 4区堀3から出土。「」の刻印があり、加賀藩前田利常・利長の刻印とされている。219はB 2区攪乱から出土。「一」「」「二」の刻印があり、安芸・毛利輝元か前田家とされている。

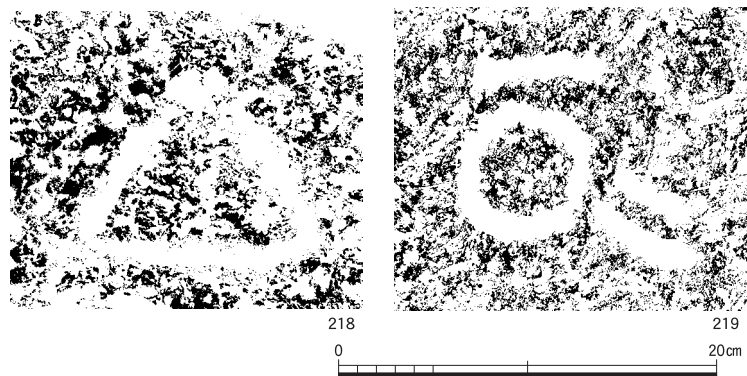


図61 石垣石刻印拓影（1：4）

4.まとめ

今回の7次調査では、C1区～Cs2区において、淀城期以前の大坂街道と街道筋の町屋跡を検出できた。C2区第6面出土の遺物が京都編年XI期古（桃山時代末期の16世紀末）に比定される。この年代は、古淀城期（1588～1594年）頃になり、豊臣秀吉により大坂街道が整備され淀が交通の要所として重視された頃である。その後、古淀城は破却され、港の機能も失ったと言われている。しかし、江戸時代初頭、陸上・海運交通の要所として復活し、1623年に淀城が築城される。²⁰⁾ その約30～40年間の淀の状況の一端が明らかとなった。

これは、3次～5次調査でも、一部、明らかとなっていたが、C1区第2・3面、C2区第3～6面では、淀城期以前の江戸時代初頭から桃山時代末期に遡る大坂街道と側溝、両側の町屋遺構を確認した。それらの遺構は、標高10.8～9.8mまでの間に成立している。南方の5次調査では、標高約10.3～9.1mで淀城期直前の大坂街道路面を検出し、標高8.25mで平安時代から中世の遺物包含層を確認している。淀城期直前の路面の標高を勘案すると、C2区では少なくとも標高約8.75mまで包含層が存在する可能性が高く、今後の周辺調査の重要な資料となるであろう。

桃山時代から江戸時代初頭（図62）5次と今回のC1・C2区では、南北方向の大坂街道を検出した。検出長は南北約30m以上、道路幅は約7mを測り、そして、この街道沿いに町屋が建ち並んでいたことが判明した。

また、C2区第6面の落込み62から多数の銭貨が出土しており、空閑地68には、社あるいは野仏など、何らかの信仰施設があったものと考えられる。このような施設の存在から、淀の住民の精神生活の一端がかいま見られる。

江戸時代（図63）淀城期の調査は、今回の7次のA1区～B5区までは、2006年度の6次調査に隣接していることもあり、6次の延長部分を検出したものがほとんどである。遺構平面図には、今回の7次に隣接する6次部分をグレーで表している。その結果は、A1区では内高嶋の南面する土手と堀の西延長部分、A2区では内高嶋内の建物南側石垣の西延長部分、B1区では本丸南の曲輪内の石垣7Bの西延長部分、B2区では建物基礎の集石の北延長部分、B3区では内堀に北面する石垣の西延長部分、B4区では内堀に西面する石垣の北延長部分と柱列11の北延長部分、B5区では中堀に東面する石垣の北延長部分を検出した。また、6次調査における、A2区の石垣66、B1区の石垣8、B2区の石列6など7次調査では残存していなかったものがある。また、C1区～C3区は、淀城期には、中堀を挟んで大手門の東に位置する東曲輪内に位置する。C1区では、中堀に面する堀1と石垣13を検出し、C2区では江戸時代後半の路面と江戸時代前半の路面と石垣4を検出した。Cs2区では第2面として江戸時代前半の礎石1・2を検出し、C3区では東曲輪北端部分と堀部分を検出した。時期差があると思われるが、これまでの調査成果を合成すると、図63のようになる。調査6と2・3次調査で検出した米蔵の西側には、4次調査の井戸があり、さらに西側には3次2区から4次1区に続く南北方向の石垣があった。そこから1段低くなってC2区・C1区で検出された空閑地の路面がある。

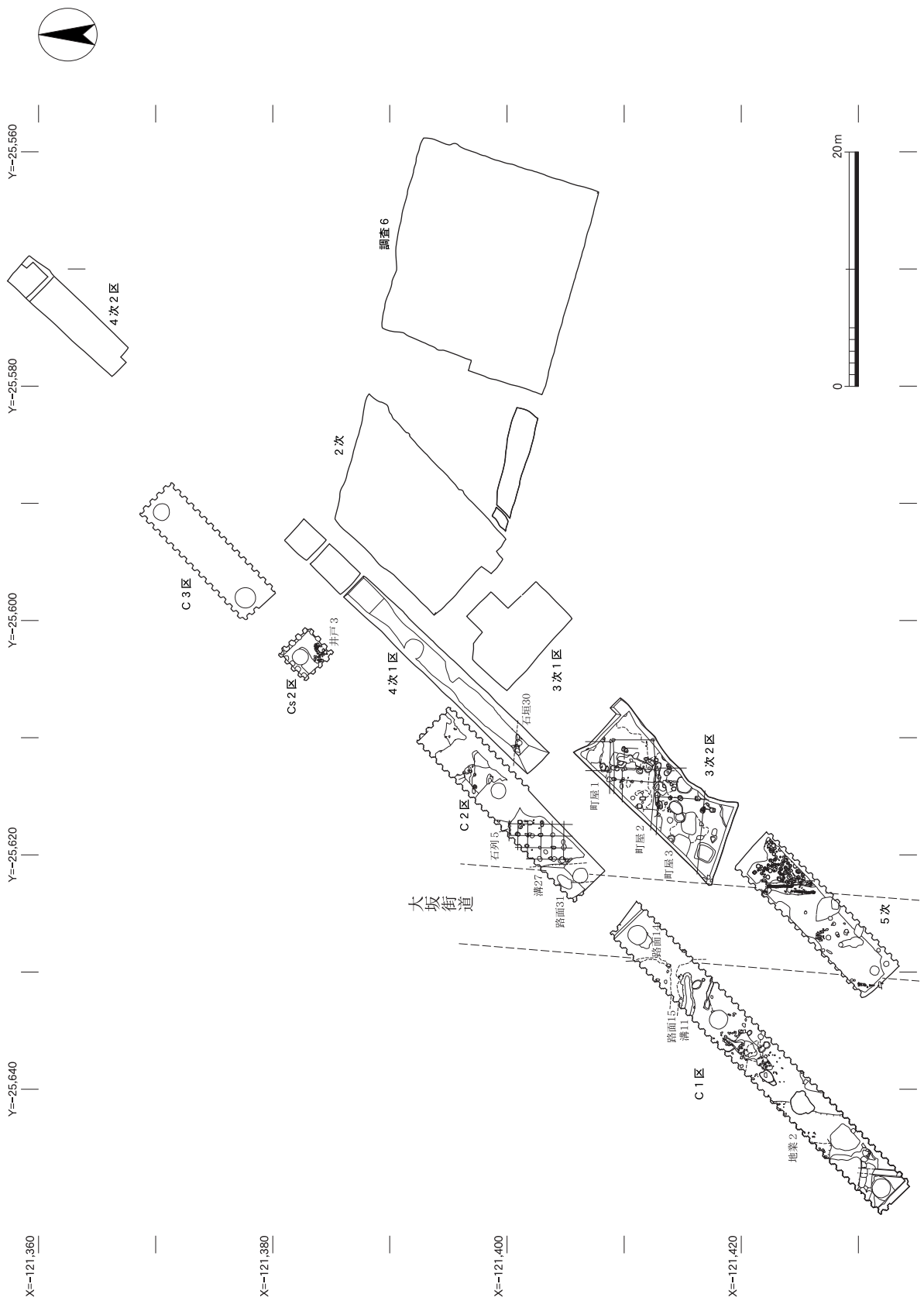


図62 C区桃山時代から江戸時代初頭復元図(1:500)

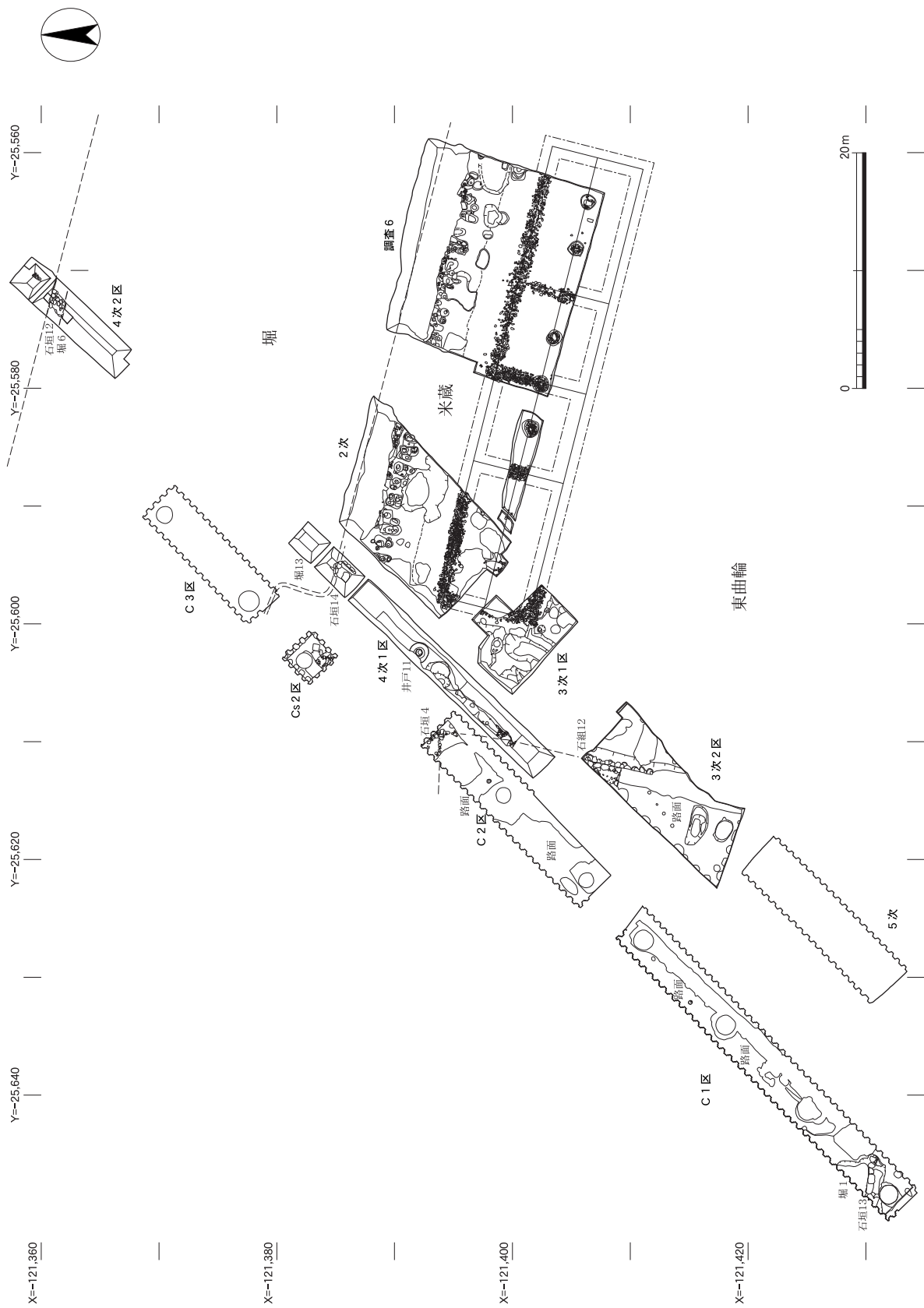


图63 C区江戸時代復元图(1:500)

淀城は川中の自然堤防を拡張する方法で造成している。その方法は、調査6や4・6・7次調査の断割り断面観察から、淀城築城時の元和9年(1623)には、最初に土や砂を互層にして堤状の土手を築いた後、両側に粗砂や砂を互層に盛り土して造成(堤状盛土)していることが明らかとなっている。その最深部分は、標高約9mまで及び、ここから標高11m前後の第2面まで盛土し、のちの改修で約0.3m高くし、最終的には標高11.3m近くまで盛土したものと考えられる。

A1区・A2区、B1区～B5区では、淀城造成時の盛土などから淀城期以前の遺物が出土している。これは、淀城構築時の用土として近隣の平安時代から室町時代の遺構面を掘削したためと考えられる。しかし、C区は異なっている。とくに、C2区の地表下1.4mの第3面上面には焼土・炭層が均一にあり、第3面の礎石列などが埋め殺されていた。その直上に淀城期の路面(第2面)があることから、淀城を構築する際に、該当地の建物が存在し、それらを焼却・整地して構築したためと考える。

淀城復元図と6・7次調査の堀・石垣などの検出状況を比較すると、A1区外堀、B1区の東西石垣・杭列は復元図通り検出できた。一方、3区の東西石垣は復元図から約9m南で、B4区の南北石垣は約7m東で、B5区の南北石垣は約9m東へずれて検出した。さらに、C3区南端で東曲輪の北端が検出されたなど、復元図とは異なる部分も多く認められ、今後調査により明らかとなるであろう。

註

- 1) 「京都西南部」『土地分類基本調査 地形・表層地質・土壤』 経済企画庁総合開発局国土調査課 1972年
- 2) 西川幸治『淀の歴史と文化』 淀観光協会 1994年
- 3) 『京の城 - 洛中洛外の城郭 - 京都市文化財ボックス第20集』 京都市文化市民局文化財保護課 2006年
- 4) 星野猷二『淀城跡・天守台調査概報』 伏見城研究会 1988年
- 5) 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』 京都市文化市民局 2004年
- 6) 久世康博「淀城跡(TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年
- 7) 馬瀬智光「淀城跡 21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
- 8) 久世康博「淀城跡(TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年 表23-1(1976年調査)
- 9) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 10) 117『京都市内遺跡試掘調査概報 平成18年度』 京都市文化市民局 2007年
- 11) 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 12) 内田好昭・能芝妙子「長岡京跡・淀城跡(2次・3次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化

財研究所発掘調査報告 2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年

- 13) 註12に同じ
- 14) 尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡(4次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 15) 尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡(5次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 16) 尾藤徳行・丸川義広・能芝 勉「淀城跡(6次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 17) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 18) 註3に同じ
- 19) サメの種類については、大江文雄氏(愛知県自然環境保全審議会代表委員)より御教示および参考資料の写真(図57)の提供をうけた。
- 20) 註2に同じ

圖 版



1 A1区全景（北東から）



2 A2区第1面全景（南西から）



3 A2区第2面全景（南西から）



4 B1区全景（北東から）



1 B2区第1面全景（北東から）



2 B2区第2面全景（北東から）



3 B3区全景（南西から）



4 B4区第1面全景（北東から）



1 B4区第2面全景(北東から)



2 B5区全景(南西から)



3 C1区第1面全景(北東から)



4 C1区第2面全景(北東から)



1 C1区第3面全景(北東から)



2 C2区第1面全景(北東から)



3 C2区第2面全景(北東から)



4 C2区第3面全景(北東から)



1 C2区第4面全景(北東から)



2 C2区第6面全景(北東から)



3 Cs2区第1面全景(北東から)



4 Cs2区第2面全景(北東から)



5 C3区全景(南西から)



1 B2区集石7・15断割り断面(南から)



2 B3区石垣1(北東から)



3 B5区石垣2(北東から)



1 C1区石垣13(北東から)



2 C1区第4面路面14(南西から)



3 C2区第3面礎石・礎石抜き跡(南東から)



1 C 2区第4面路面・溝（南西から）



2 C 2区第5面縁石・溝・路面（北東から）



3 C 2区第6面空閑地・溝・路面（北東から）



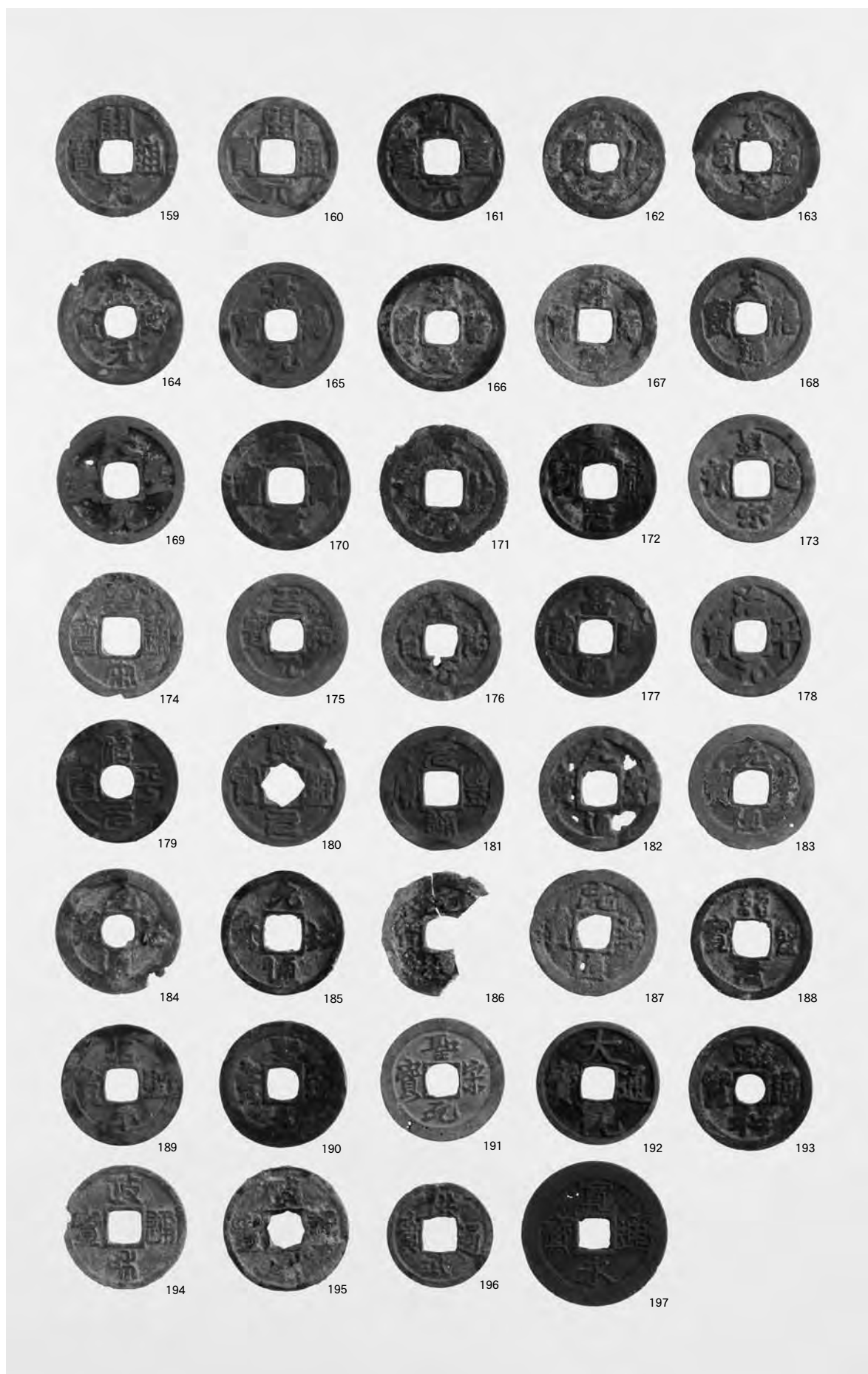
B 1 ~ B 4 区出土土器

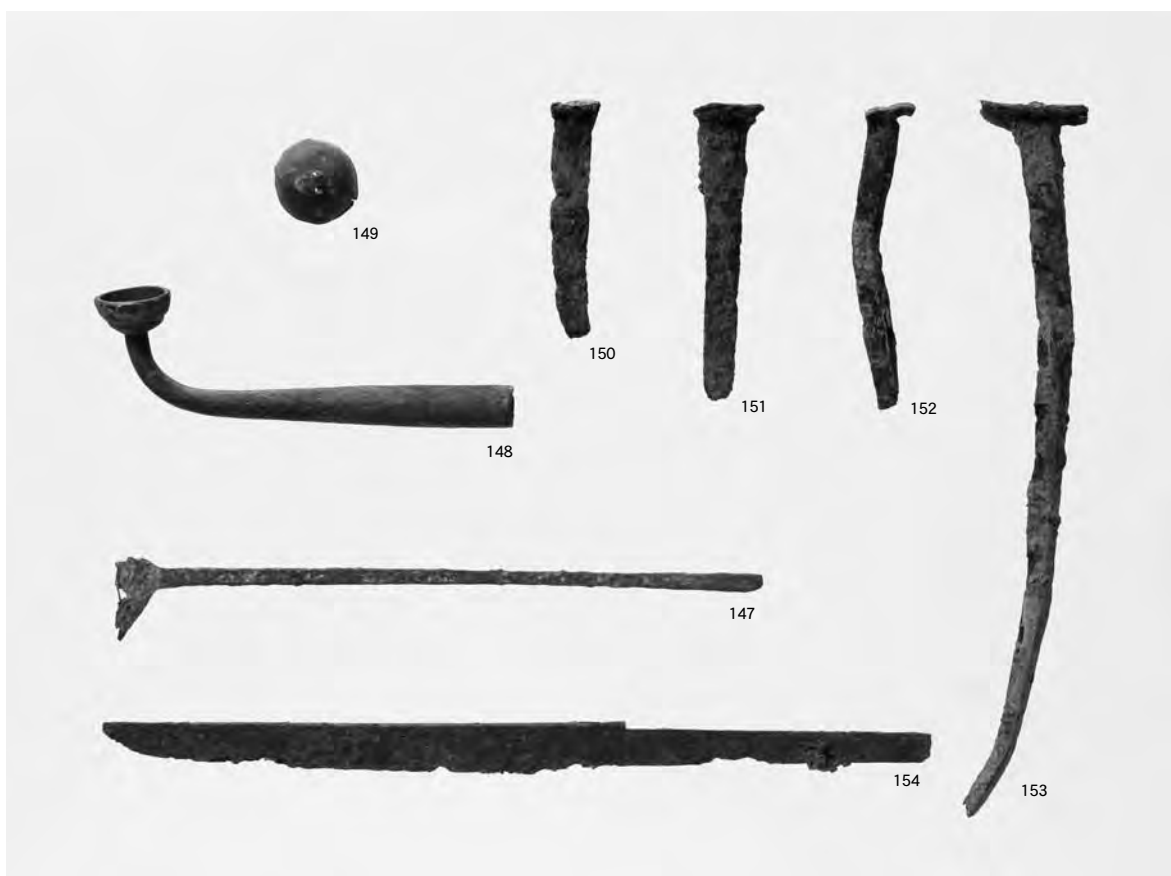


C 1・C 2区出土土器



軒瓦・鬼瓦





1 金属製品



2 木製品



報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-7							
編著者名	尾藤徳行・長戸満男・南出俊彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどいけがみちちょうちない 淀池上町地内	26100	3 1191	34度 54分 16秒	135度 43分 08秒	2010年2月 15日～2010 年8月31日	980m ²	高架工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 淀城跡	都城跡 平城跡	桃山時代～ 江戸時代初頭 江戸時代	土坑、柱穴、礎石、 路面、溝、地業、 石列、縁石、小径、 空閑地、落込み	土師器、瓦器、瓦質土 器、施釉陶器、焼締陶 器、輸入陶磁器、瓦類、 金属製品、角鮫棘、木 製品、土製品、石製品、 石造物				
			土坑、柱穴、礎石、 石列、石垣、堀、 集石、路面、溝、 土手、掘込、杭列	土師器、土師質土器、 瓦質土器、施釉陶器、 焼締陶器、磁器、瓦類、 金属製品、銭貨、木製 品、土製品、石製品、 石造物				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-7

長岡京跡・淀城跡

発行日 2010年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961